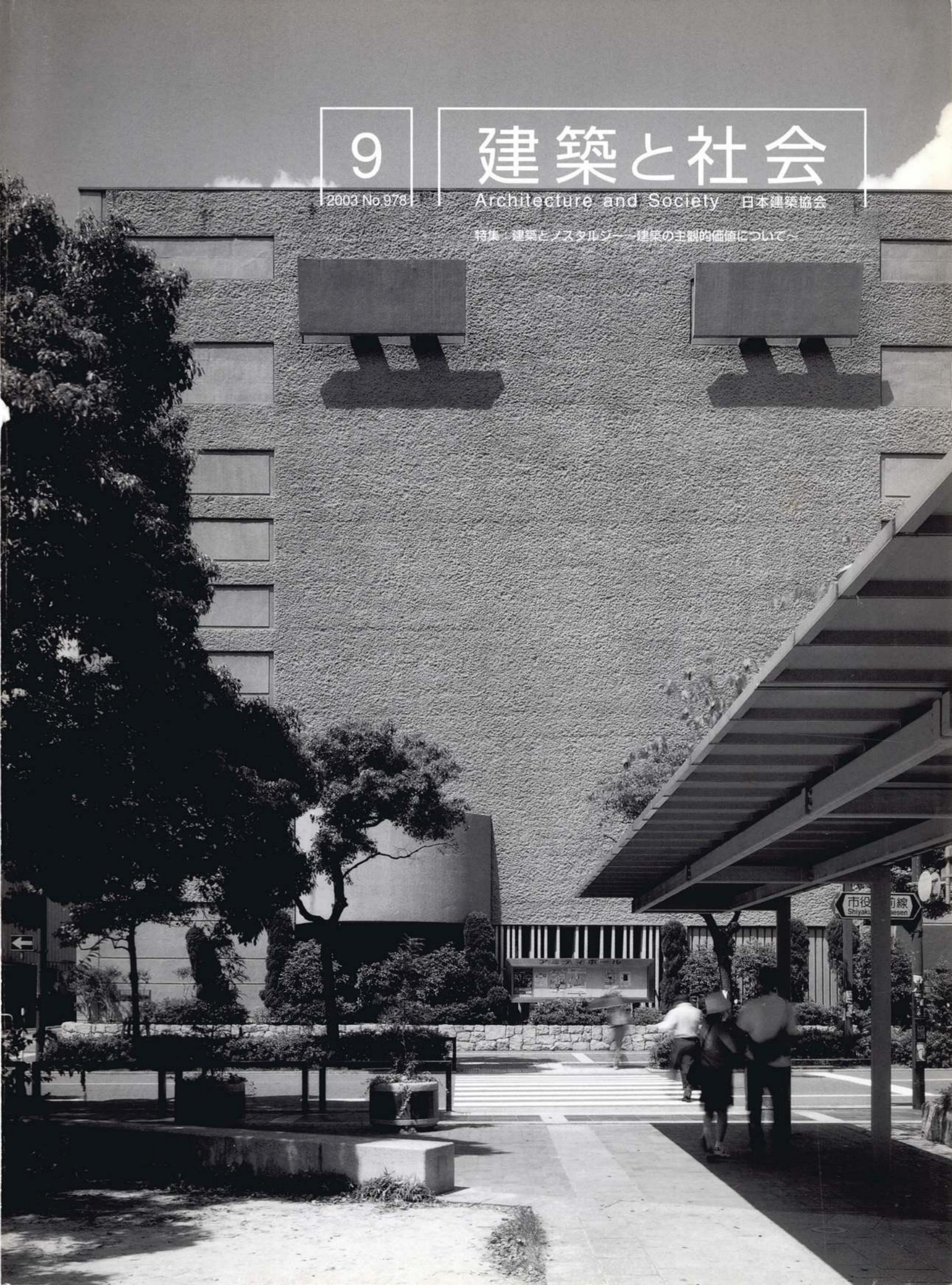


9 建築と社会

2003 No.978
Architecture and Society 日本建築協会

特集：建築とノスタルジー～建築の主観的価値について～

2003年
E・家・くらし
住まいの設計コンテスト

設計部門にリフォームの部、新設しました。

◉募集要項

建築家のための設計部門

【リフォームの部】

■テーマ

「電気による家族にとって心地よい住まいのリフォーム」

機器の取り替えや修繕にとどまらず、家族の心地よい暮らしの創出を目的としたリフォームであること。

※ 本コンテストが求めるリフォームとは、下記の1～3のいずれかを満たしたものである。

1. 家族構成の変化（高齢化や二世帯、家族の成長）に対応できるよう改善したリフォーム。
2. 家族が健康に生活できるよう配慮したリフォーム。
3. 四季を快適にすごせるよう、自然との共生を実現したリフォーム。

■応募規定

＜対象＞

- 2002年10月1日～2003年9月30日までにリフォームした住まいで、テーマに該当するもの。
  ※戸建て住宅、集合住宅の一住戸のどちらでも可
- リフォームに際して、電気設備機器（IHクッキングヒーター、電気温水器、エコキュート、電気床暖房等）を導入した住まいであること。
- 応募作品の所在地域が、関西電力供給エリア（近畿2府4県）であること。

＜資格＞

- 所定の登録方法で本コンテストへの応募登録をすませた方。
- 応募者は設計者とします。個人・組織は問いません。ただし、あらかじめ建て主を含む関係者の了解をお取りください。

■提出資料

- 図面はA2パネル（スチレンボード貼り）で、1枚とします。（サイズ、枚数厳守、変形不可）
- リフォーム前・リフォーム後の建築物の内外観写真および平面図（必ず方位、室内外の設備機器の配置を明記すること）、その他必要と思われる資料をA2パネル内にまとめてください。
- 所定の「応募用紙A」に必要事項を記入し、パネル裏面に貼付けてください。
- 「応募用紙B」に、設計の主旨（1.家族にとって心地よい住まいとなるリフォームのコンセプト、2.電気による快適な空間のための設計上の工夫、3.住まいの課題に対する解決策と住まい方の提案、4.主な電気設備機器）を記入してください。
- 「応募用紙C」に、建て主のコメント（今回のリフォームによりご家族の暮らしが改善されたポイント）を記入し、ポイントにそった写真2枚程度を添付してください。※写真は省略可
- 「応募用紙B」「応募用紙C」は作品パネルと同送してください。

■賞

- 最優秀賞（1点） 500,000円
- 優秀賞 （1点） 300,000円
- 佳作 （2点） 100,000円

【新築の部】

■テーマ

「電気による家族にとって心地よい住まいづくり」

設備や造作の設計に電気が積極的に活かされており、そこに住まう家族が心地よく暮らせることを追求した住まい。

1. 住宅における電気利用のメリット「安全性」「快適性」「経済性」等が、住まい手の暮らしに合わせて魅力的に取り入れられていること。
2. 住まい手の思いを取り入れ、心地よい住まい方に対する提案が魅力的にされていること。
3. 居住快適性および住まいを取り巻く環境との調和に工夫がされていること。

■応募規定

＜対象＞

- 2002年10月1日～2003年9月30日までに竣工した住まいで、テーマに該当するもの。
- 応募作品の所在地域が、関西電力供給エリア（近畿2府4県）であること。

＜資格＞

- 所定の登録方法で本コンテストへの応募登録をすませた方。
- 応募者は設計者とします。個人・組織は問いません。ただし、あらかじめ建て主を含む関係者の了解をお取りください。

■提出資料

- 図面はA2パネル（スチレンボード貼り）で、戸建ては1枚、集合住宅は2枚とします。（サイズ、枚数厳守、変形不可）
- 建築物の内外観写真および平面図（必ず方位、室内外の設備機器の配置を明記すること）、その他必要と思われる資料をA2パネル内にまとめてください。
- 所定の「応募用紙A」に必要事項を記入し、パネル裏面に貼付けてください。
- 「応募用紙B」に、設計の主旨（1.住まいづくりのコンセプト、2.電気による快適な空間のための設計上の工夫、3.住まい手の思いに対する実現性と住まい方の提案、4.主な電気設備機器）を記入してください。
- 「応募用紙C」に、建て主のコメント（今回の新築によりご家族が快適に暮らせるようになったポイント）を記入し、ポイントにそった写真2枚程度を添付してください。※写真は省略可
- 「応募用紙B」「応募用紙C」は作品パネルと同送してください。

■賞

- 最優秀賞（1点） 500,000円
- 優秀賞 （1点） 300,000円
- 佳作 （2点） 100,000円

学生のためのアイデア部門

■テーマ

「家族のコミュニケーションが深まる住まいの提案」

設備や造作に電気が積極的に活かされた住まいで、そこに住まう家族間のコミュニケーションが深まることを追求したアイデア。

1. 住宅における電気利用のメリット「安全性」「快適性」「経済性」等が、なんらかのカタチで魅力的に取り入れられていること。
2. その中で、家族間のコミュニケーションが深まる住まい方を提案し、その提案が魅力的にまとめられていること。

■応募規定

＜対象＞

- テーマに該当する提案であること。

＜資格＞

- 所定の登録方法で本コンテストへの応募登録をすませた方。
- 応募者は建築家・インテリアデザイナー等を目指す、大学・大学院・高等専門学校・専門学校等に在籍中の方。
- 合作およびグループ応募も可。

■提出資料

- 図面はA2パネル（スチレンボード貼り）1枚とします。
- 所定の「応募用紙」に、アイデアの主旨（1.コンセプトと住まいづくり・住まい方の提案、2.電気利用のメリットと活用性、3.実現のための工夫）について記入し、作品パネルと同送してください。

■賞

- 最優秀賞（1点） 200,000円
- 優秀賞 （1点） 100,000円
- 佳作 （2点） 50,000円

［応募締切］

2003年11月14日（当日消印有効）

＜備考＞

- 応募資料（図面、写真等）は返却いたしません。必要な場合は、あらかじめ複写しておいてください。
- 本コンテストの入賞作品に対して、その発表に関する権利は主催者が保有するものとします。
- 入賞作品には、ネガまたはポジの提出（あるいは撮影許可）をお願いすることがあります。
- 入賞作品は、「2003年度 E・家・くらし 住まいの設計コンテスト入賞作品集」に収録させていただきます。
- 応募作品は、当社のカタログ・広告・ホームページ・その他の印刷物、また当社のショールーム・展示会場等に展示させていただく場合があります。その場合は詳細を改めて連絡いたします。
- 同一物件についての応募は一点に限ります。

［登録方法］

1. 応募する方は、登録してください。
   （登録締め切りは2003年10月17日まで）
2. 登録方法はFAX、e-mail、ホームページまたはハガキに、氏名、年齢、住所、電話番号、勤務先または在籍校の名前、住所、電話番号を明記してください。
3. 複数登録の場合は、その件数を記入してください。
4. 登録申込の方には「応募要項」「応募用紙」を送付またはお届けします。

［登録・作品提出先］

〒553-0003 大阪市福島区福島7-12-2 淀川福島ビル7階
シーアクトプロデュース株式会社内
関西電力「住まいの設計コンテスト」事務局
FAX:06-6451-6314 e-mail:e-life@c-acto.co.jp

※本コンテストに関するお問い合わせは、お手数ですがFAXまたはe-mailにてお願いします。折り返し回答いたします。
※お問い合わせの締め切りは、2003年11月10日までとします。
※コンテストの詳細については、ホームページでもご覧いただけます。

［審査委員］

- 審査委員長
  鈴木 胖
  （姫路工業大学学長・大阪大学名誉教授・住宅電気利用技術懇話会会長）
- 審査委員
  東 孝光
  （建築家・千葉工業大学教授・大阪大学名誉教授）
  北浦 かほる
  （大阪市立大学大学院教授・居住空間デザイン学）
  吉村 篤一
  （建築家）
  木村 博昭
  （建築家・神戸芸術工科大学教授）

関西電力

設計コンテスト専用URL http://www.kepco.co.jp/contest/

■主催：関西電力株式会社 ■後援：（社）日本建築学会 近畿支部／（社）日本建築家協会 近畿支部／（社）大阪建築設備設計事務所協会（社）大阪建築士事務所協会／（社）大阪府建築士会／住宅電気利用技術懇話会／関西電化推進協議会

「伊東忠太の世界」展 大阪展 シンポジウム&見学ツアー

8月31日まで東京のワタリウム美術館で開催されていた＜『伊東忠太の世界』展＞大阪展が、9月6日～10月5日に心斎橋にあるKPOキリンプラザ大阪にて開催されることになりました。この展覧会は建築図面、家具、石像、絵画、スケッチ、写真などおよそ300点あまりを一堂に集め、展示する初めての伊東忠太回顧展です。

この巡回展にあわせて、KPOキリンプラザ大阪を会場としたシンポジウムと、京都市内に現存する伊東忠太の建物を中心に同時代の建物を訪ねるバス・ツアーを開催します。（日本建築協会とKPOキリンプラザ大阪の共同主催）



築地本願寺（1934年竣工）　伊東忠太実行委員会
撮影：菅原一剛

＊展覧会の案内は本号information欄（48頁）に掲載してます。

■〈シンポジウム＝レクチャー＋対談〉
「伊東忠太の見たもの」

日　時　2003年9月14日（日）
14：00～（13時30分開場）
自由席

場　所　KPOキリンプラザ大阪ホール
大阪市中央区宗右衛門町7-2
地下鉄御堂筋線難波駅より徒歩約3分

聴講料　一般1,500円、学生1,000円
（先着申込み順・展覧会入場券含む）
＊当日は、シンポジウムのため、展覧会はご覧になれません。

定　員　100名（うち､本会会員枠あり※）

協　力　ワタリウム美術館

後　援　朝日新聞大阪本社

申込先　KPOキリンプラザ大阪
TEL：06-6212-6578
受付時間11：00～21：00
＊本会会員の方も直接上記へお申込み願います。

講　演　「妖怪と怪獣に魅せられて」
藤森照信／東京大学生産技術研究所教授
「エンタシスに魅せられて」
井上章一／国際日本文化研究センター教授

対　談　「伊東忠太の世界」藤森照信＋井上章一＋立川直樹（司会）
＊当日の進行及び内容については未定です。

■〈見学バスツアー〉
「京に伊東忠太と同時代の建築を訪ねる」～平安神宮（明治28年）から祇園閣（昭和2年）まで～

日　時　2003年9月15日（祝）
10：00～17：00頃(9：30集合)

見学地　「平安神宮」「西本願寺伝道院」「祇園閣」伊東忠太、「京都府庁舎」松室重光、「西陣電話局」岩元禄、「京都市考古資料館」本野精吾、「京都府立図書館」「藤井有鄰館」武田五一、「新風館（旧電電公社）」吉田鉄郎等（外観のみのものも含む）
＊各自お弁当をご持参下さい。

集　合　JRバス京都駅前バスターミナル
（現地集合・現地解散）

随行講師　石田潤一郎／京都工芸繊維大学教授ほか

参加費　一般・学生とも4,800円
（当日受付にて申しうけます）

定　員　大型貸切観光バス1台
（先着申込み順）
（うち本会会員枠あり※）

協　力　ワタリウム美術館

後　援　朝日新聞大阪本社

申込先　KPOキリンプラザ大阪
TEL：06-6212-6578

※申し込みの際に会員である旨お申し出下さい。ただし、会員枠も会員の申し込み先着順です。

これからの建築と社会
第6回

リファイン建築へ 過去と未来を結ぶもの

再掲



あおき・しげる
1948年　大分県生まれ
1971年　近畿大学九州工学部建築学科卒業
1977年　アオキ建築設計事務所設立
1990年　株式会社青木茂建築工房に改組
受賞
2000年　第1回JIA環境建築賞(緒方町役場庁舎)
2001年　日本建築学会賞業績賞(リファイン建築一連作品)
著書
1999年　建物のリサイクル(学芸出版社)
2001年　リファイン建築へ:青木茂の全仕事(建築資料研究社)
2003年　リノベーションスタディーズ(INAX出版)

日　時　2003年9月17日（水）
18：30―20：30

会　場　大阪市中央公会堂
大会議室／B1階

講　師　青木 茂／青木茂建築工房代表

定　員　80人

参加費　会員1,000円、一般1,500円
学生500円引　＊税込

申　込　9月9日(火)までに
①催し名：リファイン建築へ
②氏名
③個人会員･団体会員・一般の別
④職場･学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を9月10日（水）に発送します。

申込先　(社)日本建築協会編集事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
〒530-0001
TEL.06-6348-0633
FAX.06-6348-0634
e-mail : jigyoka@aaj.or.jp

この十数年間、約20年から30年経過した建物を再生させるという手法で建築を作ってきた。住宅の寿命がイギリスでは128年、アメリカ98年、フランスが82年、日本はわずか32年といわれている。建築の寿命を延ばすことは欧米では当たり前のように行われていて、新築はわずか20%である。日本で何故再生の手法がなかったかというと、建築界に身を置く我々の方がスクラップアンドビルドの方が安いと思っていたことが一つ大きな原因ではないかと考えられる。

そのことに対する議論は別として、古いものを触ってみるといろんなものが理解できる。一つはその建物が作られた時、何を考えどう設計したか、そしてどのような施工が行われたかということが手に取るように理解できる。

僕が大学を卒業した頃、空前のニュータウンブームで、大阪の千里ニュータウンなどはまさにそのような都市計画の先端的な試みであった。その当時開発された集合住宅の考え方は、民間の分譲マンションや賃貸住宅にも大きな影響を与えた。というよりは決定的であった。現在作られている新築の集合住宅においてもほとんどがこの頃作られた集合住宅の考え方がそのまま採用され作られている。30年前のこのシステムはそれほど凄いものであったのであろうか。ちょっと別の見方をすれば我々は30年前に考えられたこのシステムから全く進歩していないということが言える。携帯電話の世界を覗いてみると､この10年間の進歩は機能・価格とも格段の進歩を遂げ、そしてまだ進化を続けている。建築の世界において進化と言えばメーカーによる新製品の開発はかなりの進化を遂げているが、建築の進化はほとんど止まった状態である。

過去の建築を触っているとそのようなことを思い知らされ、今現在、僕が作っているものが30年や40年後どのように見られているのだろうかと期待と不安が交差する。　（青木茂）

話題建築を聞く
（第36回）
見学会合同開催

なんばパークス
商業棟

日　時　2003年10月23日(木)
16：00―18：30
講　師　大井昇二
大林組本店建築設計部長
会　場　JV工事事務所会議室及び現地
定　員　60人
＊申込者多数の場合は抽選
参加費　会員1,500円、一般2,000円
学生半額
申　込　10月15日(水)までに、
①催し名:難波パークス講演・見学会
②氏名
③個人会員・団体会員・一般の別
④職場・学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を10月16日(木)に発送します。
申込先　(社)日本建築協会編集事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
〒530-0001
TEL.06-6348-0633
FAX.06-6348-0634
e-mail：jigyoka@aaj.or.jp
主　催　(社)日本建築協会
事業委員会見学・情報小委員会
担当主査　坂本良高／大林組

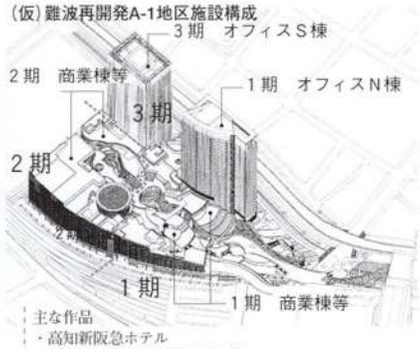


なんばパークス商業棟
所在地　大阪市浪速区難波中2丁目
建築主　南海電気鉄道(株)、(株)高島屋
街づくり　企　画　南海電気鉄道(株)・(株)高島屋
監　修　(株)日建設計
デザイン　(株)大林組本店一級建築士事務所
デザイン協力：ジャーディ・パートナーシップ・インターナショナルINC
基本設計　(株)大林組本店一級建築士事務所
デザイン協力：ジャーディ・パートナーシップ・インターナショナルINC
実施設計　大林組・南海辰村建設・大成建設・熊谷組 共同企業体 設計室
（代表：(株)大林組本店一級建築士事務所）
監　理　南海電気鉄道(株)
大林組・南海辰村建設・大成建設・熊谷組 共同企業体 設計室
（代表：(株)大林組本店一級建築士事務所）
施　工　大林組・南海辰村建設・大成建設・熊谷組 共同企業体
敷地面積　37,179.30㎡
延床面積　107,600㎡（商業棟等1期）
構造規模　地上部／SRC，S造　11階　塔屋1階、地下部／SRC造　地下4階



大井昇二（おおい　しょうじ）
1949年　大阪府生まれ
1972年　大阪市立大学工学部建築学科卒業
（株）大林組入社
現在、本店建築設計部長

（仮）難波再開発A-1地区施設構成



主な作品
・高知新阪急ホテル
・大阪ドーム（日建設計と協働）
・近鉄学園前駅ビル
・ホテルモントレ大阪マルイト西梅田ビル
（建築学会作品選集2003）
・なんばパークス商業棟
・ホテルモントレ仙台（H16春竣工予定）

南海難波駅南側の大阪球場跡地の開発として進めてきた（仮）難波再開発A-1地区建設工事（なんばパークス）の1期が、10月7日にグランドオープンする。
今回は、（仮）難波再開発A-1地区建設工事のうち商業棟等建設工事（以降、なんばパークス商業棟と表現）の、企画段階から設計・施工・竣工に至るまでの経緯とその内容をご紹介する。
なんばパークス商業棟は、800%の高密度な容積の中に圧倒的なオープンスペースを形成し、同時に都会のアクティビティを享受できる街にすることを意図している。具体的には、グランドラインから8階に至る商業棟の屋上全体を大きな緑の公園とし、その下層に大きな街を内包した二重の都市構造としている。
商業施設の街のデザインは、常に新しい体験ができる場を創出することである。なんばパークス商業棟では、3つの大きな体験の場をデザインしている。
ひとつは屋上公園ビッグパークで、2つめは2階に設置された南北を縦断するセンターモール（地区施設：歩行者専用立体通路）のキャニオンストリートである。そして3つめが、屋上公園の下に内包された、商業施設の回遊動線（インナーモール）のビレッジモールである。
なんばパークス商業棟は、米国の商業デザイン事務所の、ジャーディ事務所とコラボレートして進めてきた。3つの大きな体験の場を創出するまでの経緯や、その時のドローイング等を交えて、お話する予定である。
大阪球場がその球場機能を失ってから16年になる。そして、新しい施設が第一歩を踏み出す。講演会後、実際に新しいミナミの街歩きの楽しめる体験をしていただけるよう、なんばパークス商業棟の見学会を予定している。なお、当日のなんばパークス商業棟の都合により、パークス内での見学は自由見学になることもある。

『民間(旧四会)連合協定工事請負契約約款』頒布場所のお知らせ

本約款を下記場所で頒布しております。広くご利用いただきますようお知らせいたします。

●(社)日本建築協会事務局
〒530-0001
大阪市北区梅田1-1-3-2100
大阪駅前第3ビル・21階
TEL.06-6348-0635

●(社)日本建築協会京都支部
〒604-0944
京都市中京区押小路通柳馬場東入橘町641
京都建設会館別館内
TEL.075-211-2857

●(社)日本建築協会和歌山支部
〒640-8045
和歌山市ト半町38　建築士会館
TEL.073-423-2562

●大阪府庁別館諸用紙販売
〒540-8570
大阪市中央区大手前2-1-22
TEL.06-6941-4741
※販売価格　1部230円（A4判）
（工事請負契約約款、工事請負契約書、仲裁合意書、契約書使用上の留意事項、建設工事に係る資材の再資源化等に関する法律第13条及び省令第4条に基づく書面）

建築と社会 9 2003
ARCHITECTURE AND SOCIETY
JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN
1917年創刊　第84集／通巻978号

今月の表紙

表紙デザイン／田村昭彦
企画／倉渕奈千子
建築写真／河合止揚

●西宮市民会館
設　計／増田友也(京都大学)
施　工／開組
竣　工／1967年4月1日
所在地／西宮市六湛寺町10-11

●今回、表紙案は二つあって、下から見上げたのを私は推していたのだが、本誌表紙企画のK女史に一蹴されてしまった。毎回やっていると、表紙とはこうでなければという気持ちが出て、ワンパターンになっていたのかも知れない。
北、南面はデザイン的にもっと冗舌なのだが、はつり仕上げのコンクリートの感じや、庇のシンプルな構成に増田友也らしさを見て、東面を撮影した。
(河合止揚)

■特集予告
10月号／力と楽しくつき合う方法
11月号／私の空間作法
12月号／第50回青年技術者

編集委員会(平成15年度)
■副会長
井上　豊
奥謝野　久
■編集担当理事
上原　正行
岡田　聿之
佐藤友美子
◎設楽　貞樹
竹中　統一
畠山　祐治
広原　盛明
堀田　修二
松村　慶三
■特集小委員会
□計画分科会
★計画系
伊藤　憲幸
梅田　善愛
小浦　久子
※鈴木　克彦
田中　直人
紅谷　昇平
細田　浩史
松田奈緒子
辻　　武之
三宅　次郎
吉村　英祐
★建築計画系
荒木　宏之
江副　敏史
菅野　忠司
小林　優子
桜井　則雄
笹村　欽也
静　　茂夫
所　　千夏
※野田　隆史
三村　和生
★インテリア・住宅系
加藤　　力
小梶　吉隆
佐藤　勝紀
田中　浩介
※高野　直樹
戸井賢一郎
西田　和子
ペリー史子
本山　　仁
□構造分科会
稲田　竜也
大氏　正嗣
大住　和正
尾上　清治
金田　興熙
木下　隆嗣
住田　隆二
田中　　剛
※田渕　勝道
松村　和夫
向井　洋一
山本　健二
吉川　真次
□設備分科会
※梶井　宏修
河井　康人
河津　隆之
近藤　国夫
近藤　正一
多賀　浩三
田ノ畑好幸
桝井　貴廣
松浦　　肇
丸山　和夫
村上幸三郎
□施工材料分科会
植田　　実
竹中　秀文
太刀川丈爾
野島　昭博
平田　茂良
※平野　　剛
吉田　正友
□法令分科会
岡本　哲夫
坂中　信隆
田村　俊郎
※鶴田　和幸
中島　和也
溝上　省二
■作品作風小委員会
赤木　　隆
石塚なぎさ
居内　章夫
井上　雅祐
池上　　明
川上比奈子
△倉渕奈千子
寺岡　宏治
鞆野　淳司
中村　文紀
林　　孝司
前川　治彦
増田　敬彦
山田　俊紀
■会員企画小委員会
稲木　裕子
大谷由紀子
河崎　敦子
清水　麗子
△髙岡　伸一
髙田　光雄
辰巳　清一
塚口　明洋
辻川ひとみ
福田　瑞穂
■広告企画小委員会
荒本　俊明
大迎　敏樹
小山　　昭
斉藤　治久
竹内　健介
林　　一彦
古畑　健一
前田　　衛
横田　和生
△渡邊　浩文
◎委員長 △副委員長 ※幹事

印　刷　2003年8月25日
発　行　2003年9月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市北区梅田1-1-3-2100
電　話　06-6348-0635
振替口座　00910-9-39975
印刷所　青葉印刷株式会社
日本データネット株式会社
定　価　1200円〔本体価格1143円〕

CONTENTS

特集● 建築とノスタルジー ～建築の主観的価値について～

[総論] 建築を捉える新しい価値をめぐって●中川　理 — 16
[各論1] JR奈良駅舎の保存運動を通じて考えたこと●好川忠延 — 19
[各論2] 法善寺横丁の復興 — 22
・復興の経緯●飯山義隆
・連担建築物設計制度の適用●小川恵三
・横丁と人・店●川久保建明
・横丁と法善寺●神田眞晃
・復興の形～「正弁丹吾亭」の場合～●岡本清文
[各論3] 大阪の近代長屋そして現在●和田康由 — 28
[各論4] 下寺町界隈のまちの魅力と価値●秋田光彦 — 30
[各論5] 北浜・船場における近代建築の魅力と再生●栗本智代 — 34
[各論6] 市民が選ぶ文化財／京都の近代建築を考える会 — 36

会告　「伊東忠太の世界」展大阪展シンポジウム&見学ツアー，これからの建築と社会⑥リファイン建築へ―過去と未来を結ぶもの―，話題建築を聞く㊱見学会合同開催―なんばパークス商業棟― — 1

作品作風
篠山市民センター — 4
姫路獨協大学 武道館 — 6
船井電機株式会社 技術館 — 8
勝美住宅加古川支店 — 10

gallery　草屋根の家（前田由利）●増田敬彦 — 12

建築の眼　建築力の可能性●柏原士郎
～徒然なるままに～法の読み方●岸本勝也
小さな子●寺岡宏治
最近の木材事情●安井　洋 — 14

法令コーナー　大阪市の日影条例●淺野志昌 — 39

構造の頁　デザイナーと構造設計者のコラボレーションって？
美について考える（その1）●大氏正嗣 — 40

設備の頁　冷媒への取り組みと将来●片岡修身 — 42

研究最前線を追う　健康で快適な生活と温熱環境を考える●奈良女子大学生活環境学科生活健康学専攻 環境行動学研究室 — 44

やさしいケンチク数学ばなし　―その9―平均値について — 45

新建材の頁　リウッド（再生木）●森川　務 — 46

REPORT　温故知新●上原正行 — 47

information　「建築家 伊東忠太の世界展」，村井修写真展『東京―街の余白』，第20回記念 現代日本彫刻展，第15回関西三大学合同建築展，緑をまとう家―我流天国―，INAXギャラリー大阪で，ジャン・ヌーベル展，東京オペラシティアートギャラリーへ，ODPデザインセミナー，American Wood Design Awards 2004作品募集，「国際デザイン・ビジネス交流会議2003」参加者募集，「建築・設備総合管理技術者」資格取得講習，「建築環境・省エネルギー講習会」，第9回公共建築賞公募，国際光触媒技術シンポジウム，ギャルリー・タイセイ常設展 — 48

月間の動き　平成15年7月分 — 50





作品風作

設計・監理■
東畑建築事務所

施工■
東洋建設

篠山市民センター

本施設は　①充実した生涯学習機能を有する施設づくり　②人と環境に優しい施設づくり　③利用者にアメニティを感じさせる施設づくりを目指し計画した。

外観デザインは篠山の伝統的なモチーフである白壁と和瓦をベースに、現代の素材であるガラスと篠山産杉材を型枠に用いたコンクリート打放し壁を加え、時代性と地域性を表現したデザインとしている。透明感あふれる造形は周辺の風景に溶け込み、人々が集い交流する賑わいを表出している。

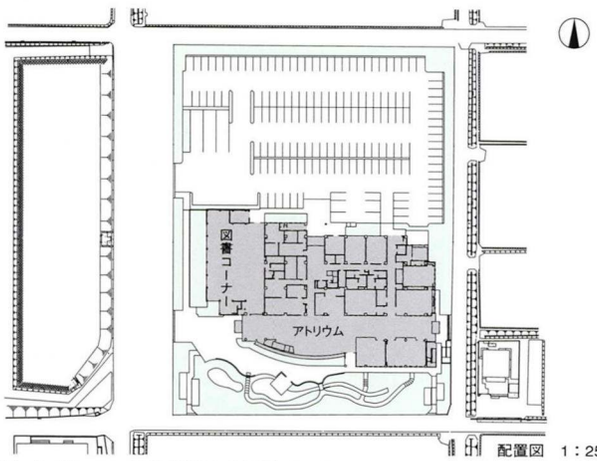
敷地を東西に貫く２層吹抜けのアトリウムは、その表情を周囲に開放することにより、市街地との回遊性を高める役割を持っている。また、建物内部においても、様々な諸室を機能的有機的に統合する装置として働いている。ダブルスキンのガラス越しにビオトープを持った庭園と渾然一体となることで、緑溢れる雰囲気の中で人と人とのふれあいを重視した空間となるように配慮している。

３万冊の蔵書を持つ図書コーナーは中央に吹抜けを配し、ゆったりとした空間を創り出している。フローリングの床、篠山産杉材の天井、木製書架とあいまって、木の持つ優しさや温もりから落着きを感じ取るデザインとしている。

移動観覧席を持つ多目的ホールは最大400人収容のホールである。昇降式舞台、可動プロセニアム、移動間仕切壁を備え、平土間から段床ホールへと様々な演目に対応することが可能である。

近隣商業地域の賑わい空間の創出・各種イベントの開催や情報発信基地として、また篠山を訪れる人達の情報交換やくつろぎの場として機能することを期待している。

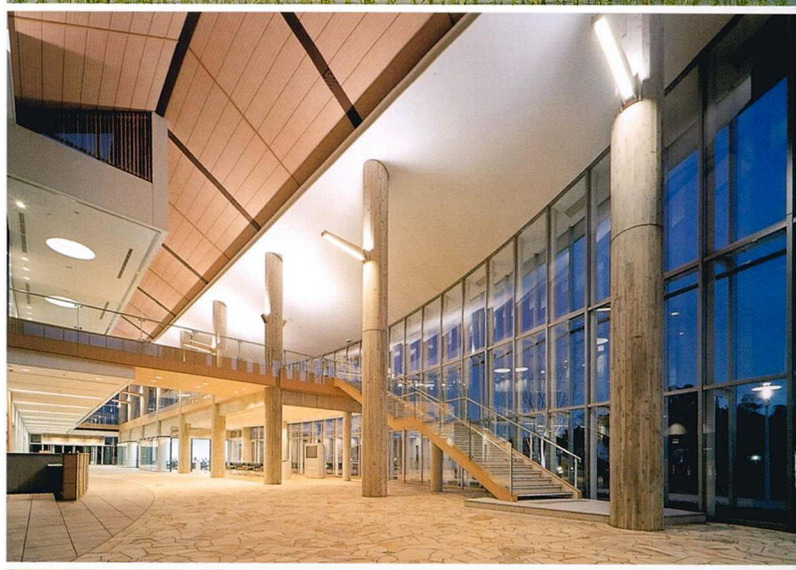
（上羽一輝、小林健司／東畑建築事務所）



配置図　1：2500

所 在 地 ――兵庫県篠山市黒岡191-1
敷地面積 ――9,869.79㎡
建築面積 ――2,841.82㎡
延床面積 ――4,295.29㎡
構造規模 ――RC・一部SRC、S、2F
工　　期 ――2001年9月～2002年12月
最 寄 駅 ――JR福知山線・篠山口駅
撮　　影 ――花城辰男（時空アート）

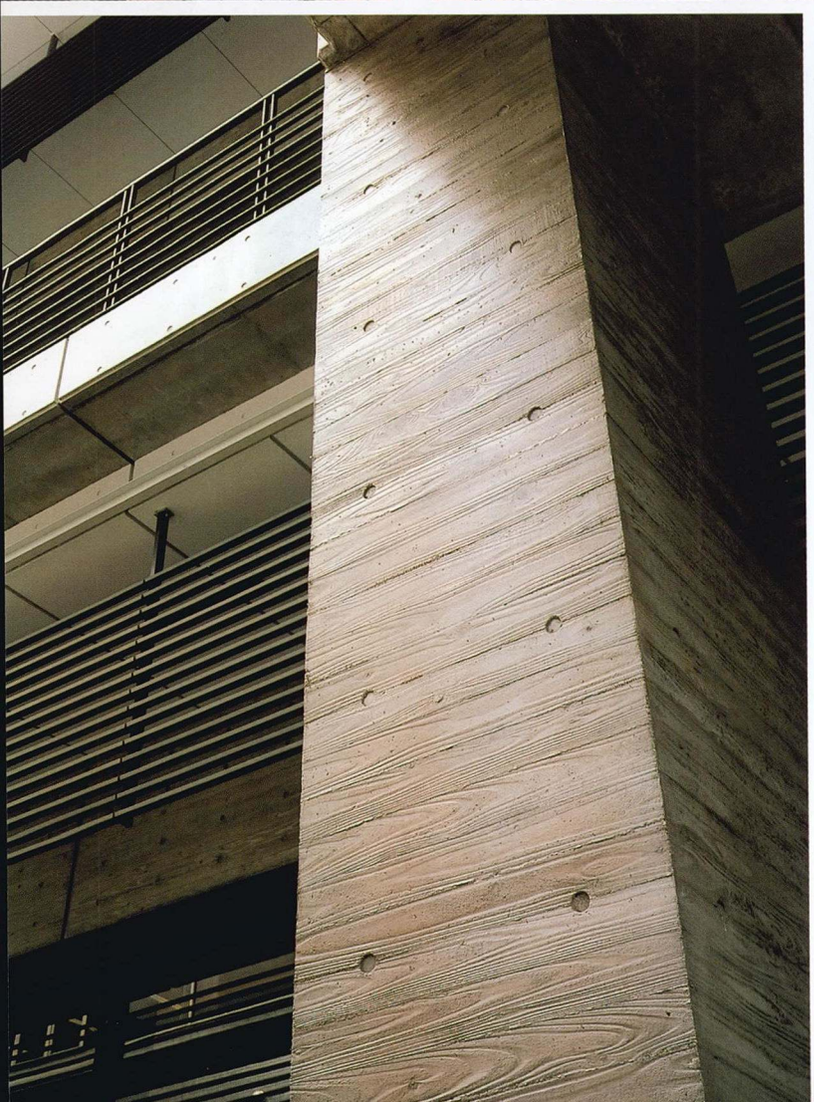









定礎





作品風作

設計■
安井建築設計事務所

監理■
姫路獨協大学

施工■
竹中工務店

姫路獨協大学 武道館

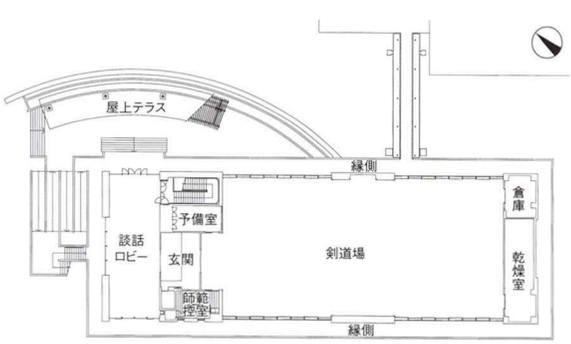
姫路獨協大学は、その淵源となる獨協学園と姫路市との「公私協力」により昭和62年（西暦1987年）に開学された大学であり、幅広い語学教育を中心に法学・経済学など多彩な部門での才能の発掘や人間性豊かな人材の育成を図っている。その一環として位置付けられるクラブ活動もたいへん活気があり中にはその実力が全国レベルに至るものもある。今回、「創立15周年記念」にあたり学内の更なる活性化と学生生活環境の充実を目指し、その一端を担うべく「武道館」が建設された。

武道館はコンクリート杉板化粧打放しの外壁と寄棟の勾配屋根の構成とし、コンクリート打放しの外観で構成されたキャンパス全体と調和しながら、より存在感のある意匠を選択した。

柔道・剣道共に公式戦を２試合同時に開催できる充実した広さと観覧スペースを確保し、その四周は縁側で囲み、和風建築のもつフォルムをモチーフにして武道館らしい緊張感と風格のある空間を造り出した。また、ガラスと面格子戸の組み合わせにより外光をやさしく受け入れ、武道場にありがちな閉塞感をぬぐいさり、より開放的な道場を目指した。

憩いの空間となる談話ラウンジや屋上テラスを形づくるアースカラーの曲面の外壁は、武道館の持つ「和（わ）」の緊張感をやさしく包みこむ「和（なごみ）」の場でもあることを表現したものである。武道館が限られた学生だけでなく、一般学生も自由に利用できる施設として、学内の新しい交流拠点となることを期待している。

（上枝真二・藤田昌宏／安井建築設計事務所）

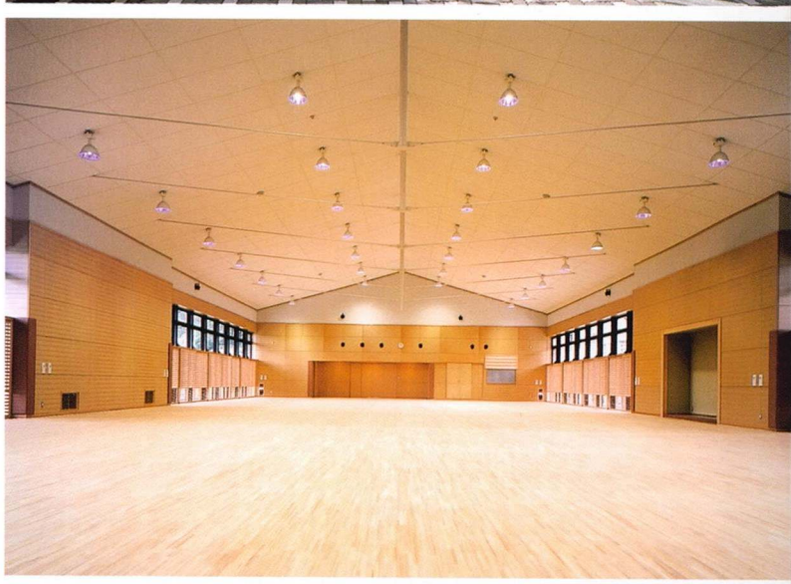


２階平面図　１：1000

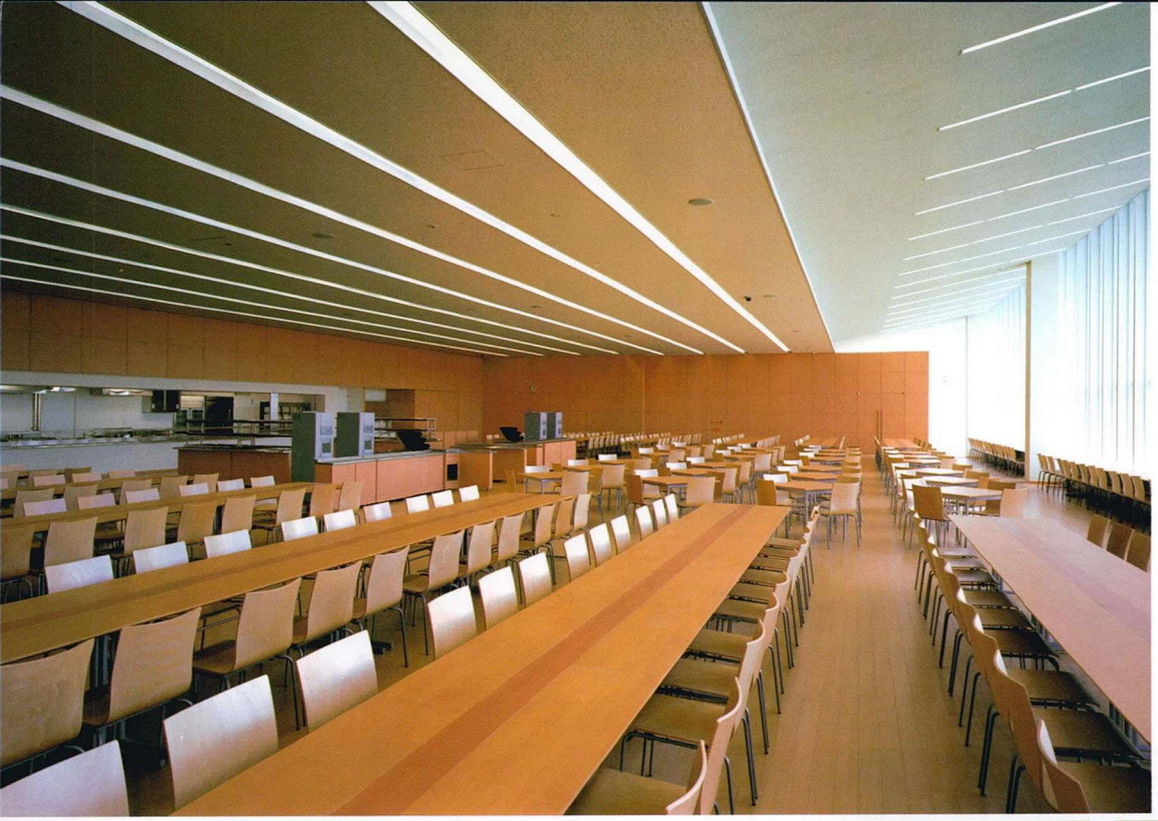
所 在 地 —— 兵庫県姫路市上大野7-2-1
敷地面積 —— 69,573.34㎡
建築面積 —— 1,933.15㎡
延床面積 —— 3,414.96㎡
構造規模 —— RC、2F、B1F
工　　期 —— 2002年７月～2003年７月
最 寄 駅 —— JR姫路駅バス20分
撮　　影 —— 清水向山（エスエス大阪）

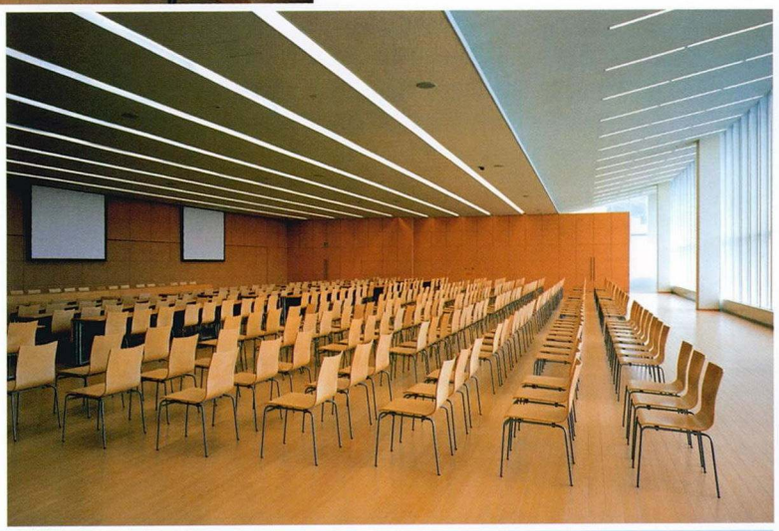


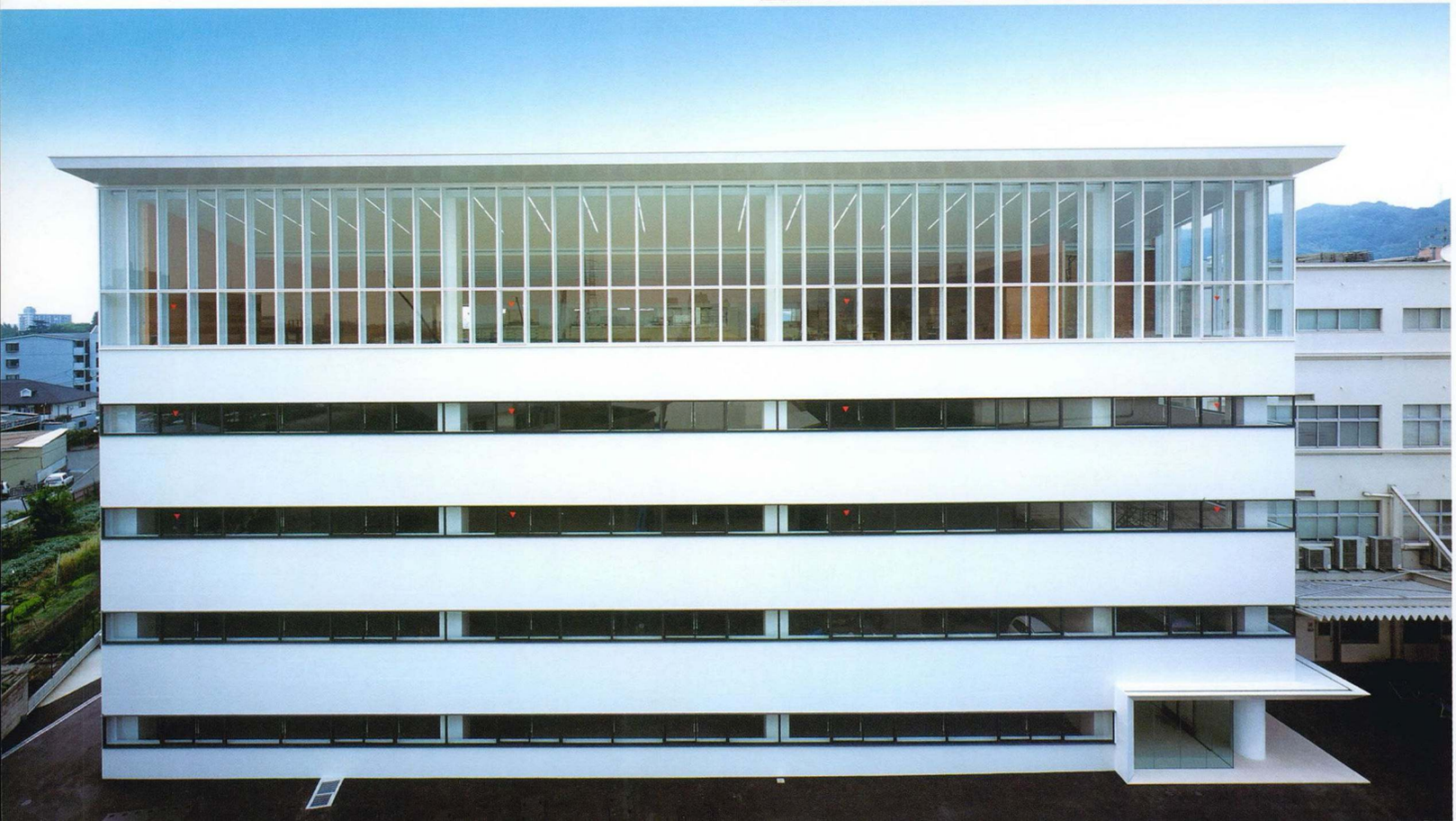












作品
作風

設計・監理■
大林組

施工■
大林組

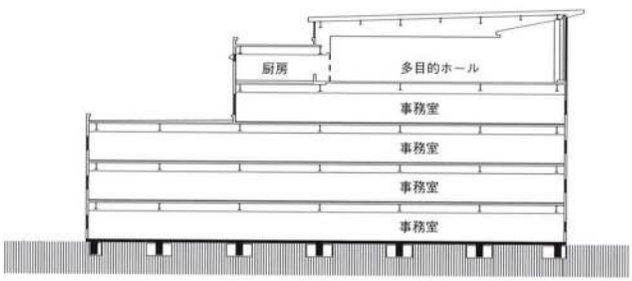
船井電機株式会社技術館

この建物は大東市の外環沿いにある船井電機株式会社の敷地内に新築された、製品開発・設計のための自社施設である。社員増加に伴って執務スペースの増床が求められ、以前体育館と食堂が建っていた場所に、それらの機能を維持しつつ、執務スペースを最大限確保することが命題として課された。そこで、特定の用途に対して固定的ではなく、選択可能性をもつ空間をめざし、「建築の可変性」をテーマに据えた。

この技術館は最上階に多目的ホールと称した天井高4.0M～5.5Mの可変空間がある。そこは、通常は社員食堂として利用され、入社式や株主総会などの特別な日は講堂として利用される。厨房カウンターに沿って設けられたスライディングウォールを閉めると食堂から講堂に一変する。また食事以外の時間にもミーティングスペースやリフレッシュスペースなど、多様な活動の場となる。このようなさまざまな家具レイアウトを実現するために6人用食堂テーブルから3人用会議テーブルに変わる折畳み式の可変家具も考案した。

1階から4階までの執務スペースは、技術者が集中して業務を行う為の場であり、これらに対比した最上階はリラックスの場である。これから求められるクリエイティブワークをサポートする、選択可能な新たなワーク環境のあり方を示唆している。

（荒井庸行／大林組）



断面図

所 在 地 —— 大阪府大東市中垣内7丁目7-1
敷地面積 —— 11,550.00㎡
建築面積 —— 1,780.47㎡
延床面積 —— 7,868.14㎡
構造規模 —— S、5F
工　　期 —— 2001年5月～2002年10月
最 寄 駅 —— JR学研都市線・野崎駅
撮　　影 —— 河合止揚、日本創芸











再生前　農協連東播南会館





作品
作風

設計・監理■
竹中工務店

施工■
竹中工務店

勝美住宅加古川支店

1973年に竣工した農協連東播南会館の再生プロジェクトである。2001年の農協連移転後、注文住宅販売会社の支店として再生することになった。環境への配慮、安全性の向上、イメージの一新をテーマに、顧客ニーズに応じた改修リニューアルをするだけではなく、改修により全体として新たに生まれ変わったような建物に再生することを意図した。

■安全性の向上

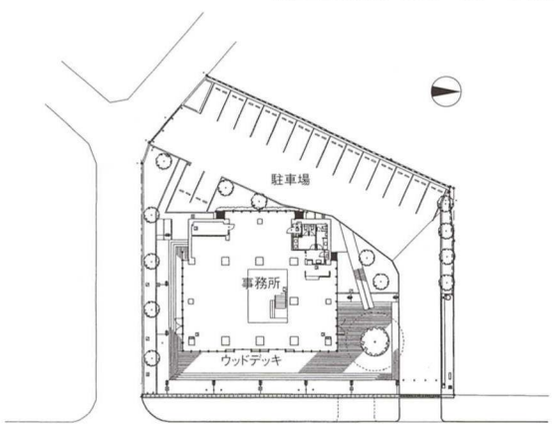
産業廃棄物削減のため既存躯体を利用する上で、大きな吹き抜けの新設や塔屋、庇の解体によって建物全体の軽量化を図り、大規模な補強なしで現在の耐震基準に適合する建物とし、安全性の向上を図った。

■既存建物のリファイン（refine）

建物を新たな要求に合わせ利用していく上で、注文住宅販売会社の支店としての入りやすさ、人をひきつける工夫が必要となった。建物と前面道路間に設けた大庇の下には木製デッキと植栽を配し、誰もが利用できるオープンスペースを設け、通りに対するアメニティーの向上を図った。また外壁をカーテンウォールとレンガタイルに変更し、建物のイメージを変えている。

既存建築を新たなニーズに合わせ再構築していく中で付加価値を創造し、新たな建築として再生できたのではないかと考えている。

（竹中工務店／茨木　保・中村圭祐）



配置図・1階平面図　1：1000

所 在 地 —— 兵庫県加古川市加古川町北在家44-3
敷地面積 —— 1,555.00㎡
建築面積 ——　691.93㎡
延床面積 ——　863.63㎡
構造規模 —— RC・S、3F
工　　期 —— 2002年6月～2002年12月
最 寄 駅 —— JR山陽本線・加古川駅
撮　　影 —— 古川泰造





gallery

草屋根の家

設計
前田由利

屋根の上に草がはえてるんだって。子供部屋が涼しくなるよーに。



御影草屋根の家



屋根のキバナコスモス



こおひい麓
今度は店のかんばん！



子供も水遣りが大好き。





平野草屋根の家

ここは草屋根2段構え。毎日ていねいに
水遣りをしてもらってフサフサと毛並みが良い。
道路斜線で屋根はギリギリ、施主の背は高い。
それで小屋裏を省略するため草屋根に。



屋根に登るとずーっと続く
田んぼと山が見える。
家族全員でお月見もしたらしい。

料理好き夫婦の家





春の草屋根



そんなふうに草屋根は



庭が取れないからだとか

団子３兄弟の家



東住吉草屋根の家



屋根から海が見えるだとか

御影山手草屋根の家



コナンの家

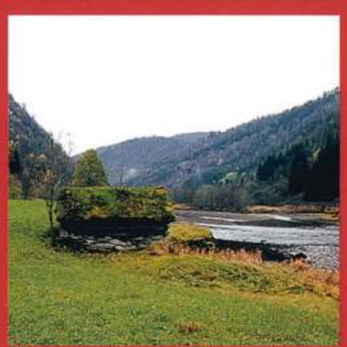


飛行機の家
かわいいからだとか、で



彫刻家の家

増殖中。



これはノルウエーの船小屋です。
北欧には古くから草屋根が民家
として存在します。
これほど豊かな自然の中にあっても、
草屋根です。
建築行為で
自然の熱や水、生態系を
急激に変化させることを避けるため。
厳しい自然から屋根を守るため。

前田由利
1963　大阪府生まれ
1986　関西大学工学部建築学科卒業
　　株式会社タケツー入社
1998　一級建築士事務所YURI DESIGN設立
担当―増田敬彦（作品作風小委員会）

建築力の可能性

ケビン・リンチの名著「都市のイメージ」にはイメージされる可能性を高めることこそ、美しく楽しい環境にとっての要件であるとしています。シドニーといえばオペラハウス、パリといえばエッフェル塔というように、建築はイメージを高める大きな力を持っています。英国の友人は、大阪では超高層ビルよりも大阪城を挙げました。日本の伝統の流れの中にある美や存在感に大いに引きつけられたようです。

ところで、ニューヨークの象徴であったWTCビル崩壊から二年たち、再建案も決まりました。でもなぜ、復元案が浮上しなかったのか。あの建物は、良きにつけ悪しきにつけ二十世紀の文明を象徴する建築であったはずです。もし仮に、フィレンツェの大聖堂が崩壊したとしたら、市民はどのような理由があろうと必ず復元するでしょう。ロス・キングの「天才建築家ブルネレスキ」によりますと、ルネッサンス期のフィレンツェでは、政治家も市民も芸術家も都市を美化するため、広場や居酒屋で一緒になって聖堂のデザインの善し悪しについて論評しあった、ということです。それだけ建築には魂が込められ、愛着が持たれたのでしょう。建築力の無限の可能性を信じたいものです。

柏原　士郎　大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻教授

～徒然なるままに～　法の読み方

今回は「法」をつくる側に立って考えてみたい。

法を作る時は、その時代に合った、また、将来を見越して作られている。しかし、時代の変遷、社会の変化、技術の発展など多くの周辺状況の変化に対応して法も改正される。

たとえば、建築基準法、消防法などは、大地震の発生、大火災の発生により、改正強化されて、現在の法になってきた。

ところで、法の規制、基準は出来るだけ範囲が小さい方が良いことはわかっている。自由な範囲が広い中で、法の趣旨を理解し、活発な社会が実現できれば良い。だが現実はどうか？

前回書いたように、法を使う側が周辺社会と相容れない限度いっぱいを自分の権利として主張し、トラブルの原因になることが多く、そのために規制がどんどんと強化され、使いにくい法令になっているのが現実ではないだろうか。

よく「法の規制が強いため、思うような設計が出来ない」と聞くことがあるが、それは、設計者の努力の足りなさと、使いにくい法令にしてしまった使う側の人達のせいではないか。

法を作るのも使うのも「人」である。互いの立場を尊重しながら、人に、社会に、環境に、全ての権利に対して、迷惑をかけない、犠牲を強いないように、自制しながら法を守っていくことが、人間社会の営みの中では大切なことではないかと思う。

岸本　勝也　兵庫県県土整備部まちづくり局営繕課長

建築の眼

小さな子

10歳になる娘がいます。少し前までは一緒に手をつなぎ散歩を楽しんだものですが、さすがに最近そういうわけにはいきません。大きくなったことを嬉しく思う反面、寂しさを感じる今日この頃です。そんな小さかった頃の娘と散策した思い出を…。

小さな子と一緒に散歩をすると色々なものを教えてくれます。久しく見ることのなかった、ありさんやだんご虫・バッタなど、大人になってから気にも留めていなかったものを、めざとく見つけて立ち止まってくれます。街の小さな公園で、ごく小さな生き物の営みが続いていることを思いださせてくれます。

片膝をつき、こどもとほぼ同じ視線になると、視界はやけに地面に近く、小さな虫のほか草花や木々の細かな造作にも目がいきます。そういったこどもの目でもって、公園の周辺や街中を観察すると、様々なものが目に飛び込んできます。

目には映っているのですが気づいていなかったものが、見えてくるという感覚。こういう感覚はどこかで経験しているもので、以前見た建築・街並など改めて見てみると、気づかなかったものが見えたり、感心して見ていたものがぼやけて感じたり。人間の目というのは当たり前のことですが、年月と共に、成長と変化を繰り返しているという事実を思い起こします。目に入るものを平滑に見るのではなく、見るべき何かがないかと捜すことのできるズームの効いた奥行きのある目・好奇心に満ちた元気な目になるよう、これからも小さな子と遊びたいものです。

寺岡　宏治　安井建築設計事務所設計部副部長

最近の木材事情

最近いろいろな種類の木を使って、家造りをすることが多くなってきている。昔は桧、松、杉ぐらいだったものが、様々な外国産木材の輸入で多種多様になってきた。杉の代わりに中国杉・米杉、松の代わりに米松・中国松・カンボジア松、栗・桐・たも・塩地・桧も外国産に取って代わられようとしているようである。

良質な国産材の不足は、木材価格のコストダウンとも相俟って次々と新しい建材〈集成材、練付材〉を生み出して行く。それらの建材は無垢の木材と比べて、今のところ転用や再利用が難しい。聞くところによると、少なくとも私の生まれる前ぐらいまでは、使用されていた木材は捨てるのではなく、出来うる限りリサイクルされていたようである。

一方山の方では、木材を早く市場に送り出すために成長を促進する。間伐によって日当たりを良くし環境を良くする。肥料を多量に与える。なんだか、まるで養殖魚を飼育しているようだ。結果として、大きさはそれなりでも年輪巾の大きいまっすぐな木を作り出す。魚でも天然ものが良いように木も同じである。よって同じ種類の国産木材でもいろいろ単価が変わる。例えば集成材をしんに持つ練付材、植林による人工的な木材、天然の木材というように、とても複雑になってくる。さらによく似た性質の外国産の木材が入ってくる。使う方は、たまったものではない。

元来木造建築は、その地域の木を使って建てられたものである。その方が木にあっているからである。木材市場は今や全国ネットワークであるが、少なくとも家ぐらいは、その地方の木を使って建てたいものである。

安井　洋　（株）安井杢工務店代表取締役社長

法善寺横丁の復興

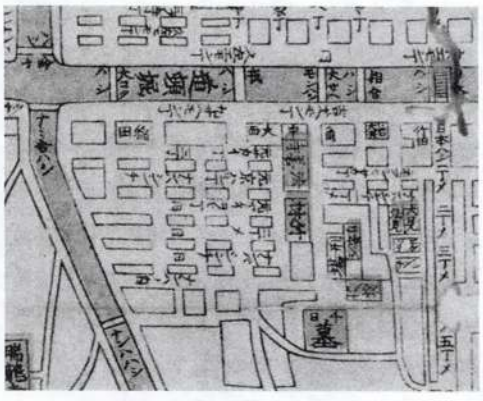
飯山義隆・小川惠三・川久保建明・神田眞晃・岡本清文

復興の経緯

□□寛永14年（1637年）、法善寺が今の土地に移転

江戸後期、昼夜別なく千日念仏の回向を行ったことから、多数の露店が境内に現れた。

明治後期、参詣の絶えなかった寺の境内には出し物や露店が軒を連ね出し常設化していった。



弘化改正大坂細見1845年

□□1945年、太平洋戦争大阪大空襲にて法善寺は炎上し、法善寺界隈は焦土と化した。戦後、金比羅堂と水掛不動はいち早く復旧した。

□□2003年７月28日（月）19:00

法善寺護摩法要が始まった。法善寺横丁北側店舗復興成就と南側店舗の復興祈願が行われた。護摩木の炎、山伏の説教の中、なぜか「ホッ」とし、肩の力が抜けた思いであった。

2002年９月９日（月）、未明に旧中座解体工事中の爆発炎上による事故が原因で、７棟が類焼を受け、焼失した。私たち「法善寺横丁復興プロジェクトチーム」は、当日スタートを切り、初期の情報収集を開始した。チームメンバーが現地に入ることが許されたのは、９月12日になってからのことであった。通常の火災には珍しく、屋根、上階の焼け方が酷かった。１階はどのような店であったか、雰囲気がわかる程度に残っていた。

□□復興を中心に思い返してみる

翌、９月13日（金）、第二回近隣説明会が開かれた。加害者側の立場で私も参加したが、二度と経験はしたくない身の置き所のない説明会であった。被災者への説明は、新聞紙上をにぎわしていた建築基準法に関することに終始せざるを得なかった。

９月14日（土）、横丁に関する具体的な情報は皆無に等しく、まずは、横丁全体の測量を指示することからスタートした。

９月17日（火）、意見交換会では、怒号の中、被災された方々に敷地区画を確定するための図面などの情報提供をお願いした。被災者から、「元に戻せ」「一刻も早く」と何度も何度もこの２つの言葉が発せられた。今になって考えてみると、この２つのキーワードが私たちを奮起させた。

測量図をもとに、建物調査報告書（旧中座解体工事事前調査資料）、被災された方々からの図面、スケッチ等を元に切り貼りしてみた。驚いたことに、敷地区画を全て飛び出していた。

私たちがこのようなスタディを積み重ねていた頃、行政サイドの情報が新聞紙上に形として表れだした。

９月19日（木）、大阪市は特例制度「連担建築物設計制度（以下、連担制度）」の飲食店舗版の活用を検討中であることを新聞２紙が報じた。連担エリア図まで入った報道であった。

火災当日、開発計画本部（現プロジェクト推進部）と地区計画あるいは、連担制度適用の可能性について話し合ったが、市議会を通すことは時間が掛かりすぎるであろうと考えていた。

その「連担制度」が報道され、我々も飛びついた。

９月21日（土）、大阪市「協調建替型住宅設計制度」をもとに北側地権者と３つの案についての説明会を開いた。

① 現行法規—前面道路幅員４m

② ３項道路—前面道路幅員2.7m

③ 連担制度適用—前面道路幅員2.7m（または４m）

９月24日（火）、法善寺横丁復興委員会設立、委員長川久保建明氏が選出された。

10月２日（水）、第３回近隣説明会

９月21日に北側の方々に説明した内容を法善寺会の皆様に「連担制度」と復興スケジュールを提示した。一刻も早い復興ということで、2003年６月末復興というものであった。スケジュールを提示し、更に具体的な法善寺横丁を知る必要があり、法善寺横丁の歴史などを研究しているサントリー不易流行研究所をお訪ねした。法善寺横丁の歴史、写真、店舗写真などの貴重な情報を頂いた。

行政とも連担制度申請、廃道手続き、建築協定などの協議を重ねた。

10月30日（水）13:30、大阪市住宅局建築指導部より、連担制度、廃道、建築協定の説明会が開かれた。

同日の15:00、法善寺横丁復興委員会が開かれ、連担制度、連担エリア、復興スケジュール（'03年５月末建物完成）の説明を行い、建築協定書、運営委員会細則の同意をいただき、諸手続に必要な押印のスタートを切った。

測量も進み北側店舗の区画が明確になってきた。この段階で大きな大きな壁にぶつかった。敷地寸法の確定が、なかなか進まないことである。最終確定をしたのは、12月28日であった。

11月８日（金）、法善寺横丁建築協定書を大阪市に提出した。

11月25日（月）、法善寺横丁廃道同意、連担制度認定を提出した。

12月24日（火）、確認申請を大阪市に提出

年が明け、

'03年１月15日（水）、３軒の確認申請が許可になる

１月16日、法善寺横丁北側店舗地鎮式が法善寺、法善寺の神田眞晃住職により執り行われた

本格的に内装設計と建設工事が併行して進められた。

２月終わり頃になり、復興委員会にて復興をもとにした石畳、電気、ガス、横丁東西の山門、各店の看板について話し合いができるようになった。各店舗とも大阪市による中間検査も終わり、

３月22日（土）、建築協議をもとにした「法善寺横丁町づくり運営委員会」が開かれた。委員長、副委員長、幹事が選任され、インフラ等についても議論いただいた。

３月28日（金）、法善寺横丁建築協定運営委員会役員名簿を大阪市住宅局建築指導部に提出し、現況を委員長より報告した。

４月２日（水）、法善寺横丁南側店舗で火災。天ぷら屋さんの失火により10軒類焼、私も現地に11:30頃着き、消火活動を見守った。一旦鎮まったと思うと、また黒煙が横丁をふさぐ感があった。

この後、５月22日、23日、２軒の消防検査、建築完了検査、連担の検査、26日には保健所の検査を受け、'02年10月30日に被災者の皆様とお約束をした５月30日に、２軒ではあったが建物の引渡しが行われた。

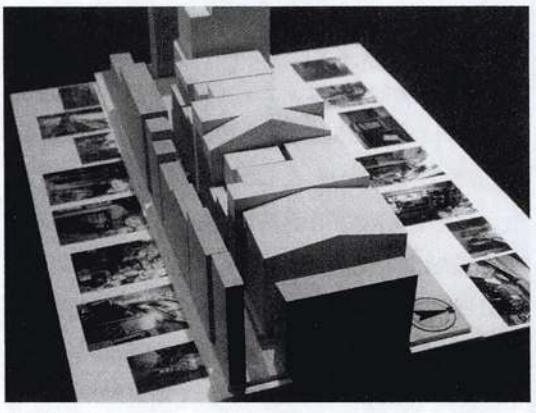
６月５日（木）、南側店舗火災のため、封鎖されていた横丁の通り抜けが法善寺住職の先導により、開放された。

その後、順次引き渡しとオープンに向かい、テナント未定の最後の１軒も７月末には引き渡しを終えた。

まだ南側の復興援助、連担エリア変更手続きと続く。残念なことに、例年行われていた法善寺祭りが、今年は見送ることになったと聞いている。

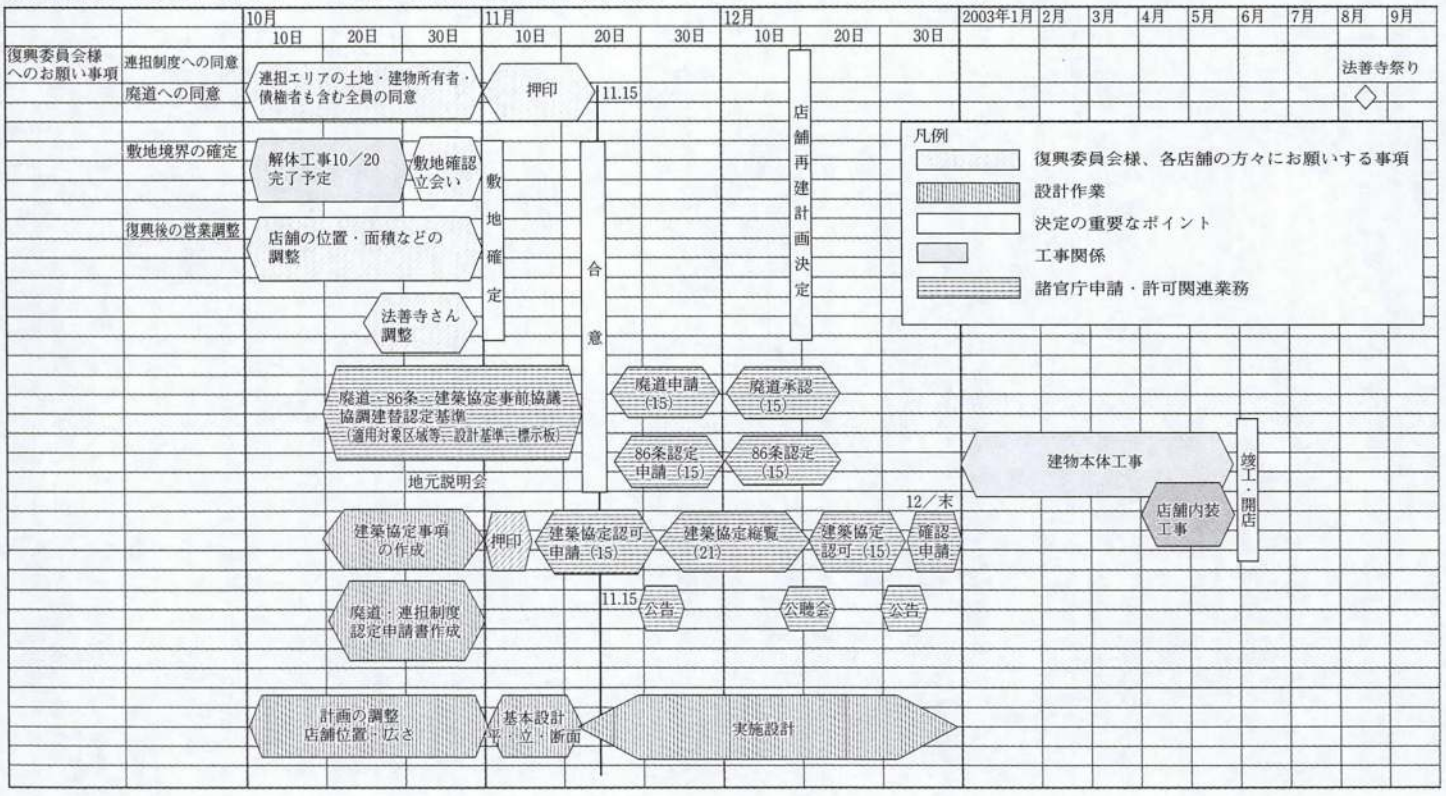
多くの皆様のご支援と声援があっての復興だと思います。ご協力いただいた皆様へは、心より感謝の意を誌面をお借りしてお礼を申し上げます。

（いいやま よしたか／株式会社竹中工務店）



模型

法善寺横丁復興計画スケジュール案　3社協議会 法善寺横丁復興プロジェクトチーム 2002年10月29日



体での復興はできていません。年内の復興をめざしてがんばっています。あと少しの応援お願いいたします。

（かわくぼ たてあき／“えび家”店主・法善寺横丁復興委員会委員長）

横丁と法善寺

法善寺にお参りに来られる方は、楽しい拝み方をなさっておられ、一杯気分で『男前にしてくれ』とか、線香の煙を胸に掛け『大きくなりますよう』と拝んでおられます。

もちろん、本来のお寺は「葷酒山門に入らず」と、お酒や大蒜の食べた方はお寺には入れないのですが、そこが法善寺の味があるところなのです。参拝者が、横丁で一杯飲み、何を食べて頂いても、アベックで来て頂いても良い、下町のお寺なのです。

さて、法善寺と法善寺横丁の関係の資料は、昭和20年３月13日の第一次大阪大空襲（Ｂ29、274機、焼夷弾1733トン）の時に六堂伽藍が焼失し、先代眞亮和尚の話では「お不動さんだけが残り、消失を免れた倉も扉を開けた瞬間に火が上がった」と、一切残っていないのであります。

もちろん寺歴には、開山は琴雲和尚で、1686年（貞享３年）とあり、この難波の地には、中誉専念和尚が、1637年（寛永14年）金毘羅天王懇伝の故事によって現在地に移転したとあります。しかし、その当時の図面は、私自身見たこともなく、千日寺とも呼ばれ、お墓があり、先代眞亮和尚は、「寺領（境内）の中に、芝居小屋や飲食店などができて、門前町的なにぎわいになったのだろう」と言われていました。そこで、私は、横丁の狭い道は、お客さんがお互いに袖擦れ合い、譲り合う優しい心のふれあう所で、その優しい思いやりの心こそ、境内のお不動様より頂いた慈しみの心なのだと思います。

この優しい思いやりの心は、店主の皆様もお不動様を拝んでいる間に培われ、お不動様に願掛けの水をかけられた後に、バケツの水を次のお参りの人のために水鉢に注がれているのです。もちろん、この心は店主や店員の心となり、周りのお客様に伝わっていくのです。

このように法善寺横丁（昔は極楽小路）に来られる人は、優しい思いやりの心でいっぱいになっているのです。この心こそ、法善寺横丁の心であり、「法善寺は大阪の顔です」と都蝶々先生が言われた大阪の心で、そのふれあいの人情の横丁こそ、大阪の庶民の文化の発祥地であります。そして、この文化下町の情のふれあう法善寺横丁を再確認をしたのが、今回の火災なのです。

消失したお店の方が、「横丁で店出したいのです。もう一度」「横丁はお箸です。二本あってご飯食べれます。一本でも鉄のお箸でも食べれへんのです」と言う声を聞いたときに、私は、横丁を愛する心に打たれ、涙が出たのでした。

そして、その時に私の心に響いていたのが、先代眞亮和尚の戦災の時の言葉で、「再興の第一歩は、焼け残った水掛不動尊の前で法要し、お不動さんに頼むことや」なのです。そこで、今回の被災も復興の心の支えは仏様や神様で、『死のうと思う日はないが生きてゆく力がなくなることがある　そんな時お寺を訪ね、わたしはひとり仏陀の前に座ってくる　力わき明日を思う心が出てくるまで座ってくる』と坂村真民先生の詩のように、被災された人の心に仏様神様に縋る心をお持ち頂くように、「たのんまっせお不動さん、たのんまっせ復興を、たのんまっせ法善寺横丁を」と水掛不動尊に復興祈願護摩法要・金毘羅様に復興祈願をお願いし、心の支援として色々な店のご縁のある俳優、歌手、音楽家や芸人さんが励ましの落語会・コンサートなどを開催できたのです。



護摩法要

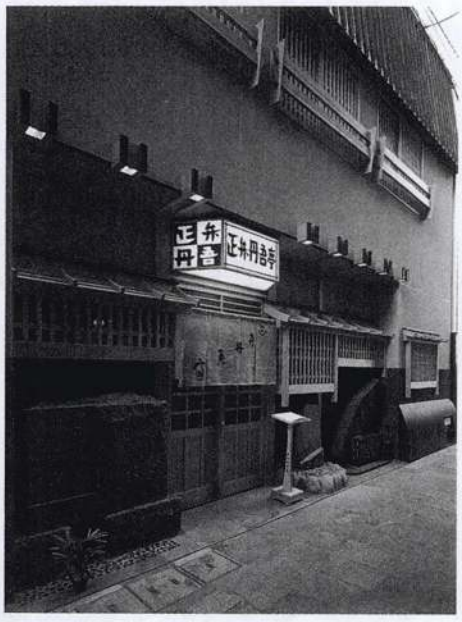
このようなことができたのも、法善寺横丁がお寺の一部で、共に生活共同体であるからではないでしょうか。そして、大阪の人情や信仰深い心があればこそ、お不動様は、「よしわかった、必ず復興さすぞ」と導いて頂けるのです。

この紙面を借りまして、最後になりましたが署名活動や義援金活動にご支援頂きました多数の皆様や、ボランティアにご協力頂きました三代目桂春団治師匠をはじめ多くの俳優、芸人さんや歌手の皆様、寺院の皆様に心よりお礼申し上げます。　合掌

（かんだ しんこう／法善寺第30世住職）

復興の形
～「正弁丹吾亭」の場合～

私が設計担当者として「正弁丹吾亭の店主夫妻と面会して間もないころ、夫人がつくづく淋しげに「先代が大切にとっておいた歴代の暖簾が焼けてしまったのです。季節ごと、年ごとに新調するのが楽しみだったのに、何十枚とあったのが全て焼けてしまって…」と話された言葉は、彼らが失ったものの実体として強烈に突き刺さっ



てきた。いくら建物や路地を以前の姿に復元したところで、焼失した思い出や歴史は再び元通りには戻らない。復元だけでは本当の意味での復興にならないのだと思い知らされたのである。積み重ねてきた時間そのものの価値—手垢や煙草のヤニ、油、傷、すれ、ほつれ、凹み…、人間のあらゆる営為の跡が染み込んだもの、いわば人の染みこそが法善寺横丁の魅力であり、染みから発せられる暖かで懐かしい匂いに誘われて、きっと人はこの狭い路地の奥へと引寄せられたのであろう。それは一朝一夕で再現できるものではない。もし安直な疑似ノスタルジーを求めるのなら、エイジングやレトロ調デザインという手法もある。しかし、法善寺横丁はテーマパークでも映画のセットでもない。情緒的な懐古趣味だけでは真の復興を望めないであろう。当プロジェクトの本義は、歴史的町並みの再現ではなく、悲しみと絶望の淵に立たされた被災者の一人一人が、この苦難をどう乗り超えて、いかに新しい商いを再開継続するか。商人としての精神を一日も早く復興するかにあったと思う。そして、彼らの商魂を注ぎ込むに値する器を建築することが、我々に与えられた役目であった。

正弁丹吾亭の場合、表は前のままに戻すが、店内は一新するという意向で、内装を間宮吉彦氏に依頼された。若者向けのカフェなどを多く手掛けるデザイナーと、年配客が中心であった老舗料理店の組み合わせは唐突にも思えたが、間宮氏起用は店主自身が語るように、「名前の上にあぐらをかいていたくない」という姿勢から、災害を与えられた大きな転機ととらえて、古い味わいを残しながらも時代と響き合うような店作りに挑戦したいという強い決意の表れである。そこへ辿り着くには、過去への思い入れやこだわりと現実の制約条件との狭間に奥悩し、葛藤した壮絶な内面の過程があったに違いない。

火災前のファサードは、奇遇にも千葉県の国立歴史民俗博物館に実物大模型として展示されていたので、展示模型用資料を参考に実際の図面を起こし直すというアイロニカルな作業になった。モデルがあるとは言え、現行の法規や連担の条件から、完全な復元は不可能であった。あくまでも、原型を尊重しながら、柔軟な視点で改良、修正、アレンジを加えた。にもかかわらず、完成後訪れた客達が、全く前の通りの姿に戻ったと一様に驚いているのを見ると、違和感がなく記憶の継承ができた事は一つの成功ではなかったかと思う。つまり、博物館に展示されているものと実際の姿はすでに異なっている訳である。ロンドンのマダム・タッソーにある蝋人形が、本物そっくりに模していながらどれもあまり似ていないのと同じように、現実の方は常に流動的に変化している。街並みの風情も、変わらないことにあるのではなく、気づかないくらい緩やかな変容の連続によって醸し出されるのではないだろうか。

刷新されたインテリア空間には、見せ場となる大きな壁面がしつらえられた。そこへ飾るアートについて何案かの作品候補があがったが、店主自身も一体何が良いのかが判断つかずに随分と悩んでおられた。そのとき私はふと、焼けた暖簾の事が頭に浮かび、どのような焼け残りの断片でもよいから見せて欲しいと頼んだところ、二箱のダンボールを持ってこられた。中からは、泥と水に紛れて焼けただれた布の塊が出てきた。沈火直後の水浸しの現場から運び出したものらしい。一枚一枚はがすようにして広げていくと、湿りを帯びた焼け焦げの匂いが部屋中に満ちて、事故の生々しさが蘇った。おそらく猛火をくぐって変色したものだろうが、焼け残った部分を見ると、上質な生地と染めは力強い色の精を失っていなかった。私はかろうじて助かった宝の破片をつなぎ合わせて美しいコラージュ作品にできると確信した。それこそがこの店に掛けるべきアート「記念碑」ではないかと。


暖簾アート

先代が守り続けた暖簾の束は、老舗の歴史そのものである。一枚一枚の布には、手垢と伴に万感の思いが染み込んでいる。そして、火災という不幸な出来事もまた歴史の中の深い染みとして、色とりどりの布の中に吸い込まれた。まさしく悲喜交々の歴史模様を描き出したかに見える暖簾のコラージュは、約10カ月に渡る法善寺横丁復興計画の中で偶然に生まれたものかも知れないが、私にはなぜか予定調和に似たような不思議なドラマ性を感じずにはいられない。こういう事故が無ければ、おそらく役割を終えた幾十もの暖簾たちは、人目に触れることもなく静かに物置の片隅で眠り続けていたであろう。姿形を変えながら、歴史は縷縷として受け継がれたと思う。

今回のプロジェクトでは、この暖簾アートもまた、復興の一つの形であり、自分にとってはむしろそれこそが建築そのものであったような気がしている。

（おかもと きよふみ／株式会社竹中工務店）

特集

建築とノスタルジー

～建築の主観的価値について～

昔ながらの建築や町並みが、いざ無くなるかもしれない、という話になると「失いたくない！」という声が市民から上がる――そういう事例が最近増えています。

例えばJR奈良駅では解体がほぼ決定していましたが、市民団体が３年にわたって署名運動やシンポジウムの開催などを通じて粘り強く駅舎への「愛」を訴え続けることによって、保存が実現しました。また法善寺横丁の復興においては元々の横丁の風情を守りたいという多くの人々が法的な特例処置嘆願のために署名しました。滋賀県の豊郷小学校保存問題では、解体・新築を推進する町長を、「建物を遺したい」と願う住民運動によってリコール、失職までに追い込みました。これらはいずれも「昔ながらの雰囲気」「歴史的な建物」に対する一人一人の思い入れやノスタルジックな感情が価値を持ちはじめているが故に起こる現象と言えるでしょう。

ここで言う「ノスタルジー」という言葉は、「古いものへの愛着」という感情を意味しています。JR奈良駅舎も豊郷小学校も法善寺横丁も、長い間そこに存在し続け、市民が愛着を持っている建物や町並みであるからこそ、「壊さないでほしい」「風情を守りたい」という声が上がったのではないでしょうか。その建物や町並みを「失いたくない」という市民の感情、「愛着心」が一つの原動力になったであろうことは想像に難くありません。

今回はそういった感情を喚起する根底にあるものについて探ると同時に、建築や町並みへの「愛着」という、従来の文化財などがもつ客観的価値にとらわれない、ひとつの主観的価値について考えたいと思います。

編集委員　野田隆史

□総論
建築を捉える新しい価値をめぐって／中川　理
□各論1
JR奈良駅舎の保存運動を通じて考えたこと／好川忠延
□各論2
法善寺横丁の復興
・復興の経緯／飯山義隆
・連担建築物設計制度の適用／小川惠三
・横丁と人・店／川久保建明
・横丁と法善寺／神田眞晃
・復興の形～「正弁丹吾亭」の場合～／岡本清文
□各論3
大阪の近代長屋そして現在／和田康由
□各論4
下寺町界隈のまちの魅力と価値／秋田光彦
□各論5
北浜・船場における近代建築の魅力と再生／栗本智代
□各論6
市民が選ぶ文化財／京都の近代建築を考える会

企画：建築系分科会

建築を捉える新しい価値をめぐって

中川　理

豊郷小学校の保存問題から考えること

今、建築の価値をめぐる議論を起こすとなれば、やはり、豊郷小学校の話から始めるしかないだろう。町長の独特なキャラクターなど、話題になりやすい要素は多かったとはいえ、この小さな町で起こった保存問題には、建築物の価値をめぐる本質的な議論が潜んでいた。だからこそ、これだけの話題になったのだと思う。


保存運動にゆれた「豊郷小学校校舎」

豊郷小学校の保存をめぐる一連の騒動については、住民と町長との対立という構図で連日報道されてきた。実際、リコールされた町長の強引な手法は、多くの人が反発を感じたはずだ。しかし、この問題の原点には、この小学校の建築（1937年竣工）が、保存を願う住民たちのすさまじい熱意を引き出すまでの魅力を持っていたという事実がある。その魅力とは何なのか、改めて考えてみる必要があるだろう。

連日の報道で映し出される小学校の校舎に、建築の歴史に詳しい人の中には、少し意外な感想を持った人も多かったようだ。文化財としての価値が主張されるものであれば、例えば東京駅のようなレンガ建築、あるいは列柱が並んだ石造建築など、歴史的な装飾がほどこされた建物をイメージするのが一般的と考えられるからだ。設計者がヴォーリズだと聞くと、なおさらではないか。大阪芸大の山形政昭先生の一連の研究でも知られる米国人建築家・ヴォーリズは、心斎橋の大丸百貨店（1927年）、大阪教会（1922年）、関西学院大学上ヶ原キャンパス（1927年）などの作品から、様式建築の名手として名高い建築家である。

しかし、豊郷小学校には、装飾的な部分がほとんど見られない。図書館などの内装の一部にアール・デコ的な装飾は残るが、建物全体としては無装飾の近代的なデザインと言ってよい。もちろん、当時「東洋一の小学校」とうたわれたほど、その完成度はすこぶる高いのだが、そのデザインだけに限れば、むしろ現代の合理主義建築に近い。にもかかわらず、この建物は多くの住民に「失ってはならないもの」として強く認識された。

設計者のヴォーリズは、確かに様式建築の名手ではあったが、それは、当時の母国アメリカのスタイルを持ち込んだ結果であった。20世紀初頭のアメリカでは伝統回帰的傾向からさまざまな過去の様式がリバイバルされており、建築家はそうした様式に精通していなくてはならなかった。しかし、もちろん、当時の最先端であったモダニズム（近代主義）のデザインもヴォーリズは巧みにこなすことができた。つまり、無装飾のモダニズムも彼のデザインの選択肢のひとつであったわけで、その選択の結果が豊郷小学校のデザインであったと位置づけることができるのである。

建築におけるモダニズムは、1920年代に産声をあげ、その後世界を席巻し現在に至っている。われわれもいまだモダニズムの美意識に捉えられていると言ってよい。しかし、現在、このモダニズムの建築も保存を考える対象になりつつある。例えば、オランダに本部を置くＤＯＣＯＭＯＭＯ（近代建築の保存と調査のための国際組織）は、世界各国に現存するモダニズム建築の重要性を再評価し保存を訴える運動を始めている。

ただ、ここで難しいのは、装飾を不合理なものとして「断罪」してしまったモダニズムが、保存の対象としてどれだけ一般的な理解を得られるかということである。一般的に言って、われわれが建築の歴史性を見出すきっかけとなるのは、やはり装飾にあるからだ。合理主義を目指す無装飾の建築が、はたして文化財としてどれだけ一般の認知を獲得できるのだろうか。ＤＯＣＯＭＯＭＯも、専門家たちがそうした困難を克服するために始めた活動と理解することもできるだろう。

しかし、豊郷小学校の無装飾の校舎は、実際にはあれだけの力を見せ付けたのだ。それはなぜか。ポイントはモダニズムの理念のひとつである「空間」にあるはずだ。近代主義では、建築の壁や柱ではなく、それらによってつつまれる空間をどう作り出すのかがテーマとなった。はたして、豊郷小学校の校舎も、その空間に魅力の本質が隠されている。豊郷小学校を訪れた人が誰もが感じるのは、ゆったりとした廊下や教室、あるいは階段である。単に広いだけではない、児童や教師の日常をしっかりと受け止める空間の豊かさが、そこにはある。

これは、校舎としての機能を正確に測った結果ではあるが、その豊かさは、単純な機能主義を超えた魅力にまでなっている。この魅力は残念ながら写真や映像では伝わりにくい。だから、報道だけで見る校舎の姿では、そこにどれほどの魅力が隠されているのかわかりずらいのだ。

そして、その魅力は、現在のわれわれの周囲を取り囲む無装飾の建築物にはほとんど失われてしまったものなのである。そこにこそ、豊郷小学校の建物を歴史的建築と認める根拠があるのだ。この建物は、地元の篤志家の寄付により建設されたなど、確かに地域の歴史を語る上でかけがえのない建物である。しかし、それ以上に、この建物の空間が持っている価値は重要なのである。

こう考えると、豊郷小学校の保存運動は、われわれが新しい建築の歴史的価値を発見しつつあるという事態を示すものになっていることがわかる。しかし、それは同時に、建築におけるモダニズムが、この60年ほどの間に失っていったものが何であるのかを示すことにもなるわけだ。

「景観」と「市場」による価値付け

結局、この事態は、旧来からの文化財という概念が、もはや使い物にならなくなってきているということを示しているのだ。建築文化財の価値指標とは、あくまで装飾を必須とする「様式」をその基準としてきたと言ってよい。それは、もちろん一般の歴史的建築の認識とも符合するものであった。しかし、「空間」の価値を評価しなければならなくなるとすると、その文化財の指標はほとんど役に立たなくなる。そもそも、空間を創造しようとするモダニズムは、確実に現代と繋がっており、「過去」の様式ではありえないのだし。

といっても、実は、建築の価値を決める価値判断は、もはや文化財概念だけではなくなってきている。他にも、人々の歴史建築への評価が高まるにつれて、いくつかの新たな価値観が育ってきている。そうした価値指標で、ここで言う「空間」が測れるのなら、そこでの価値観に、われわれは大きな期待が持てることになるだろう。はたしてどうだろうか。

一つは、景観構成要素として歴史的建築を評価しようとする、いわば「景観財」としての指標である。1970年代前半のオイルショック以降、いわゆる町並み保存運動が盛んになったが、それを受ける形で、文化庁の重要伝統的建造物群保存地区指定（重伝建）がスタートする。これは主に街道筋などの伝統的建造物群が対象であったが、都市内の近代建築を重要景観構成要素として保全しようとする動きも、地方行政に広がっていった。1976年に岩手県盛岡市が導入した「盛岡方式」と呼ばれる制度がさきがけとなったこうした制度は、建築物を、文化財とは異なる、よりゆるやかな規制で保全しようとするものであった。

ただし、重伝建も含めてそうなのだが、歴史的建築を景観要素として捉える考え方には、本来的に大きな矛盾が潜んでいる。そこでは、景観の背後にある歴史性よりも、色や形という表層の保全に力が注がれることになるからだ。「保存修景」という言葉で代表される、「創造的」な景観の保存は、場合によっては、歴史の捏造、あるいはテーマパーク化という指摘を受けることにもなるだろう。

例えば、写真にあるような例も登場してしまう。これは、撤去されてしまった煉瓦造の第一勧業銀行京都支店（辰野金吾設計・1906年）を同じ場所でそっくり真似て新築した建物だ（みずほ銀行京都中央支店・2003年）。この建物が立地する三条通りが、京都市によって歴史的界わい地区に指定されているために、行政の指導により「景観を配慮」した結果として、このような「保存」が実現した。言うまでもなく、色や形のレベルでは景観は保全されているが、オーセンティシティの概念から考えれば、その歴史性は全く継承されていないと言える。


そっくりな形態で再現された「みずほ銀行京都中央支店」

そして、もはや言うまでもないだろうが、豊郷小学校校舎で評価されたような「空間」の価値は、こうした景観財的な価値指標では、決して測ることができないのである。「空間」は、色や形の問題ではありえないからだ。しかも、景観要素としての価値が、群としての建築を前提としていることも「景観財」の限界として捉えなくてはならないだろう。市街や町並みとは縁遠い豊郷のような場所で、単独で存在する「空間」の力は、その意味でも決して測ることはできないのである。

しかし、もう一つ、最近育ってきた、歴史的建築の価値指標がある。経済的価値である。というか、歴史的建築のマーケットが育ってきた、と言ったほうがいいのかもしれない。

京都では、最近、京町家を再生したショップやレストランが次々と登場して、たいへんなブームとなっている。店舗だけではない。西陣・町家倶楽部などによる古い町家の仲介活動で、それまで「古家付」として全く価値のつかなかった町家が、不動産的にも価値を持とうとさえしてきている。もちろん、近代建築も、そのレトロな雰囲気が価値を持つようになり、高級レストランやショッピングセンターなどに転用されるケースが増えている。写真は、京都に登場した古い電話局（吉田鉄郎設計・1926年）を利用した大規模商業施設の「新風館」だ。こうした傾向は、やはり1970年代後半ごろから徐々に目立つようになってきたが、1990年代以降、とりわけ顕著になってきていると言えるだろう。


古い電話局を商業施設としてよみがえらせた「新風館」

機能を失った古い建物を、現代に蘇らせることは、歴史的建築の保存にとって、きわめて望ましい手法である。したがって、こうして歴史的建築が、その魅力によって商業的な価値を持つことは望ましいのかもしれない。ただし、ここにも本質的な矛盾がある。

ここで問題にしている、豊郷小学校などに典型的に見られる近代主義の「空間」とは、明らかに市場原理とは別の次元で作られてきたものなのだ。モダニズムの理念である計画性・機能性とは、市場を越えるものとして考えられてきたはずのものだ。逆に、市場原理の側が、（ケインズのビジョン以来）市場とは別の次元での「空間」を、公共投資として要請してきたという側面すら指摘できるだろう。

したがって、ここで言う「空間」は、市場に取り込まれ消費され

ることを本質的に拒むはずだ。実際に観察してみると、商業的に再利用されている歴史的建築の中に、モダニズムの範疇に入るものは極めて少ない。多くは、その装飾や様式が現代にない魅力を発揮しているものなのである。言うまでもなく、豊郷小学校の校舎も、商業的価値とは縁遠い。たとえ、あの建物が都市の真ん中にあったとしても、商業的な再利用は難しいだろう。

「私が」から「私たちが」へ

結局のところ、豊郷小学校の保存問題に見られた住民の「壊してはいけない」という主張は、「景観」にも「市場」にも回収されない価値だったのだということになるだろう。改めて言おう。その意味で、やはり豊郷小学校の保存運動が語る内容は深刻で重要なのである。ここに表れた保存しなければならないという根拠は、文化財だからという理由では説明できなかった。だからといって、この建物が単独で歴史的景観を作っているわけでもないし、ましてや商業利用としての価値を持っているわけでもなかった。

つまり、豊郷小学校の「空間」を保存しなければならない根拠とは、きわめて純粋なものであると言えるのである。では、ここで純粋というのは、何が何に対しての純粋なのだろうか。それは端的に言って、個々人の「残さなければならない」という思いが、社会のさまざまな状況に対して純粋なのである。豊郷小学校の保存運動は、確かに、その後リコール運動から選挙へと、確実に政治問題へと発展していった。しかし、そうであっても、その一連の騒動の本質には、あの建物を残さなければならないという純粋な個々人の思いが、一貫してあったことは事実である。その純粋さは、町長が、保存問題を利用した町長の追い落とし、つまり保存問題に名を借りた政治運動だと批判すればするほど、逆に際立って、見るものに伝わったように思う。

景観的価値という指標に振り回されたり、市場原理の中で簡単に消費されてしまったり、あるいは政治問題に巧みに利用されてしまったり。建築物の価値は、意外にもろくて、すぐに社会のさまざまな状況の中に隠れてしまいがちである。しかし、豊郷小学校の保存の論理は、ほとんど無垢なままでわれわれの前に現れたのである。言い換えれば、いかにもろいものであっても、純粋に残さなければならないと思う価値観というのは、確かに存在することを、豊郷小学校の保存運動ははっきりと認識させてくれたのである。

さて、ではその純粋な思いの本質はなんだろうか。モダニズムの作り出した「空間」に魅力を感じたからといって、そこから、それを残さなければならないという思いに達する過程には、何らかの説明が必要となる。それは、「空間」だけではなく、装飾や様式に対して人々が、それを大切に思うようになる過程にも共通するだろう。ノスタルジー、実存的価値や倫理観、さまざまな説明ができそうだが、いずれにしても哲学も含む深遠な考察が必要になる。ここではそのことには立ち入らないことにしよう。ここで問わなければならないのは、そうして残さなければならないと思い至った衝動がどのように価値指標となっていくかということだ。

この点に関して、本誌の2001年9月号の「保存再生の根拠を求めて」で石田潤一郎も指摘した松原隆一郎の理論がある。簡単に言えば、自己所有権の絶対性は、景観を守ることには適用できないということを主張するものであった。自分が自分でなくなってしまうような改変を含むような場合には、自己の同一性が失われるのだから、土地や建物の自由な交換や処分は認められないのではないかというわけだ。つまり、残さなければならないという根拠を、個人をとりまく環境の激変として捉え、その場合の保存の正当性を言い当てた、巧みな理論である。

しかし、この理論は今回の豊郷小学校のケースには当てはまるだろうか。小学校は町民すべての共有財産である。たとえ、その改築の当事者は町長であったからといっても、彼に限って言えば、小学校の建物が失われることを、自分が自分でなくなるような改変として捉えたわけではない。

松原隆一郎の理論に弱点があるとすればこの点である。つまり、対象が多くの人に共有されている場合、あるいは環境の激変が所有者（当事者）とは別の人々に現象する場合などには、自己所有権の制限、つまり保存すべきという価値指標は通用しずらくなる。

問題は、環境が激変することを拒否しようとする、つまり保存すべきであると思う衝動が、いかに共有されうるのかという問題設定ではないだろうか。「私が」残したいという思いが、いかにして「私たちが」残したいという思いに至るのか。言い換えれば、内在的価値が、どのようにして外在的価値へ転化するのかということである。

豊郷小学校の保存運動が興味深いのは、実は、この転化の過程が実に鮮やかだったからだと言えそうだ。「私が」残したいという思いが、純粋なまま「私たちが」残したいという共有化された思いに見事に転化している。だからこそ、リコール運動という政治運動に直結したのだ。そして、豊郷小学校の騒動の前後から始まる、国立のマンション問題などの景観保全運動には、豊郷のケースと同様に鮮やかな価値の共有化をうかがうことができるのである。

これまでの建築保存の動きは、たとえ多くの人が共通して保存しなければならないと思っていたとしても、ほとんどの場合、それが個人の外に共有化され外在化された価値指標として顕れることがなかった。旧来の文化財でも、景観財でも、あるいは商業利用価値でもない、本質として建築を大切に思う新しい価値観。市民的価値とでもいうべきそうした価値観があるのだとすれば、それは建築を「私たち」のものとして捉える意識が育ってきた結果であると捉えるべきだと考えている。

（なかがわ おさむ／京都工芸繊維大学工芸学部造形工学科 教授）

ＪＲ奈良駅舎の保存運動を通じて考えたこと

好川忠延

「建築とノスタルジー／～建築の主観的価値について～」という原稿の依頼を受けた。JR奈良駅舎の保存運動について書くようにとのことである。JR奈良駅舎の保存活用をもとめて、私たちの『JR奈良駅舎を生かす会』は1998年９月以来2002年12月まで活動を続けてきた。この運動の経過をなぞる前に奈良の歴史的背景から話しておきたい。

明治維新の直後、明治４年、興福寺の一隅に奈良県庁が設置された。南都の大寺院は神仏分離で空家状態となったからである。しかし経済的に疲弊していた奈良は県庁を維持することができず、明治９年、堺に合併され「奈良県」は「堺県」となってしまう。それから、県民の悲願の独立分離運動が起きる。これが実って、明治20年再び堺から独立を果たし奈良県となる。その間、奈良は残った古社寺をもとに観光立県をめざすこととなる。京都八坂、東京上野、浅草の社寺跡が公園になっていくのをみて奈良公園設置を願い出て、明治13年認可され興福寺の敷地に奈良公園の建設が始まる。フェノロサ、岡倉天心が仏像の調査に訪れるのもこの頃である。ぼつぼつ観光客が訪れるようになり、観光客誘致に向けて鉄道が敷設される。

大阪鉄道株式会社（現在のＪＲ）奈良駅（初代）は明治23年奈良市街地西郊、春日大社の参道である三條通りに面した場所に設置された。三條通りは古くからの春日神社参道であるだけでなく、真っすぐ西に向かえば生駒山暗がり峠を越え難波宮に通じる重要な道である。「大和は日本の故郷、大和を日本の床の間として飾る」という日本文化への関心から奈良公園の整備が求められた。明治27年、奈良公園内に帝室博物館（片山東熊）ができる。このネオバロック建築にはさすがに奈良の人は吃驚した。奈良県議会では景観論争が起こったと言われているが、おそらく皇室の建物であるこの建築への批判ではなく、今後の建築への規制といったものではなかったかと思う。翌年、近くで竣工した奈良県庁（長野宇平治）は木造で、和風の雰囲気を持った洋風建築である。日本型建築の誕生である。以降これが奈良公園の建築の規範となり、公会堂、図書館、物産陳列館、ホテルと次々とこのスタイルを踏襲した。明治時代のことである。

その後しばらくして、昭和９年二代目の現駅舎が建て替えられる。場所は奈良公園から少し離れているが、春日神社参道に面していることもあり、公園の建築の影響を少なからず受け継いでいると思われる。竣工式当日のこの駅舎を特集した地方新聞の中で、当時の大阪鉄道管理局建築課長の柴田四郎氏は「鉄筋コンクリートで作るとはいえ、陸屋根の建築は差し控えるように」という助言を各方面から貰ったと述べている。この建築の形には、帝冠様式の国家権力の顕示といった思いはなく、もっぱら奈良盆地の奈良的風景にあわせたのだということがこの文面から読み取れる。

この当時、春日大社近くの高畑には志賀直哉が住んでいた。志賀邸は多くの一流文人、画家、写真家などが集って、一種の文化サロンの様相を呈していたといわれていた。柴田四郎氏の文面から、こういった人たちの助言があったのではないかと私は推測している。この新聞の紙面も広告も、この駅に対する期待と、新しい駅ができたことの喜びに満ちている。このようにして祝福されて竣工した。その後、大軌鉄道（現近畿日本鉄道）の開通で相対的な地位は下がったものの、観光立県のシンボルとして存在し続けた。

奈良にはご存じのように天平時代からの古典建築が目白押しであり、建造物の重要文化財が260件（全国の12%）、国宝62件（全国の30%）あり文化財の、特に建造物文化財の密度は大変濃厚である。こういった古典建築は奈良を象徴するものであったし、その中に収蔵されている仏像などと相まって観光奈良は成り立ってきた。このような環境では近代建築は、建築的価値のないものと見なす傾向があり、おまけに絶対数が少ない。明治期の建築は重要文化財もあり、比較的多いが、昭和初期の鉄筋コンクリートの建築は奈良市内に限れば、商業ビル、学校建築を含め、このJR奈良駅舎が唯一のものではないかと思う。しかし市民にはたかだか70年の建築なんてどうでも良いという反応がある。これがこの建築を取り壊す騒動になった遠因ではないかと考えている。

取り壊しの騒動が起こったのは「ＪＲ奈良駅付近連続立体交差事業」と呼ばれ、奈良駅を中心として、南北の３カ所の道路交差部分を立体化する事業が原因である。道路と鉄道との立体化工事は県の事業で、ＪＲ西日本がその鉄道施設の改造工事を担当する。駅前広場は奈良市が整備するという役割分担になっている。鉄道の高架事業は通常、仮線を敷設し、そこに車線を一旦移動した後、空いた車線を立体化する。これを順次繰り替えして立体化が完成すると仮線を撤去する。この駅舎の取り壊しは、この仮線に架かるという理由であり、現在の駅舎の上に仮線計画をしたわけである。これはわれわれも耳を疑うものであった。それというのも、駅前広場の計画として奈良市が公にしている完成予想の鳥瞰図がある。この中で、現駅舎は用途は分からないが、きちんと保存活用されているように見える。そしてこの鳥瞰図は広く配布されている。しかしある日、市役所でもらった鳥瞰図から現駅舎だけがペロリとなくなって、その場所が単なる広場になっていたのである。それに気付いた人がいた。どうなったんだろうと言っていると、1998年１月、県が現駅舎の取

り壊しを発表した。仮線に架かるのは、敷地が狭いからここに仮線を引くしかなかったからという説明である。私たちは、県と市とＪＲとの連絡が不十分であったことがその理由で、一旦間違ってしまうと元に戻れない役所独特の論理が、これを必要以上にこじらせてしまったのではないかと思っている。この発表に追い討ちをかけるように、保存するとすれば30億の費用がかかる。財政上こんな費用は到底無理であると発表した。

それから数カ月、どうしたものか仲間内で話し合った。立体化工事事務所、奈良市などへ事情を聞きに行くなどして動き始めたが、市民は30億の保存費用が影響して反応が鈍い。おまけに近代建築蔑視の風潮である。数カ月して『ＪＲ奈良駅舎を生かす会』を一般市民を交えて発足させた。まず30億の根拠を県に問い合わせた。自治省からの出向の課長は、滔々と試算の根拠を説明してくれた。この説明から、苦心しながら残す努力をしているという気配は微塵も感じられなかった。「一旦仮線域からこの駅舎を移動し、仮線が不要になる10年先にもう一度もとの所に移動する。その間もちろん用途はなく放置する。最終的に移動した場所の土地をこの保存のために買収する。買収費用は近くの商業地の銀行用地の取り引き事例を参考にして、面積は必要面積の２倍くらいあるが、これが一筆であるからまとめて全部買収する」これでしめて30億である。30億で、市民の愛着も吹っ飛んだのである。

奈良市長にも会った。市長は個人的には残したいと思っているという。あの駅舎は私の子供の頃の遊び場だったと懐かしそうに言う。強い愛着を示しながらも、30億に難色を示した。

前後して、知事は「ＪＲ奈良駅デザイン検討委員会」という私的諮問機関を立ち上げ検討に入った。非公開であるから新聞に数行発表される記事だけが頼りで、県の担当課から、わずかな資料をもらって様子を伺う状態が約２年続いた。その間私たちはシンポジウムを開くなど、市民向けの啓蒙活動を始めた。残す費用も４～５億ぐらいの費用で残せるという試算もたてた。その間「ＪＲ奈良駅デザイン検討委員会」は新駅舎のデザインを検討していることになっている。この委員会が面談に依る市民団体へのアンケートを試みた。私たちも一団体としてアンケートを受け、そこで驚くべきものを見た。「レプリカに依る保存」である。保存費用を安くするには、ペデストリアンデッキの上に現駅舎を載せて保存すれば、地代が不要だという。現駅舎のやや小振りの、つまり橋の上に乗る大きさの駅舎をＦＲＰで造り設置する案や、建物の前半分を新駅舎の前に貼り付ける案、等々である。委員会はこれらを「イメージ保存」と称していた。デザイン検討委員会には、著名なプロフェッサー・アーキテクトも有識者も参加しているはずである。何故こんな案で市民団体にアンケートをとることになるのか。

この委員会が２年かかって出した答申は「連続立体化事業の中では現駅舎の保存はできない」であった。記者会見した座長を務めた医科大学名誉教授は「文化的に価値のない建築であるから取り壊しやむなし」と発言した。文化的に価値がないのはどのような根拠によるのか、という記者の質問に「登録文化財としても登録されていないではないか」と言った。県の文化財保護課は、県広報でもこの駅舎の登録文化財登録はしたいのであるが、JR西日本が所有者としてこれに応じないと述べているのを、この座長は知らなかったらしい。

町に出て、署名活動、チラシ作成など活発に活動したのは、それからで、約１年余りにわたって続けた。そして、市民の反応が大変よく分かった。駅前で机を出して座っていると、次々と人がやって来て署名をしてくれるのである。この駅舎を懐かしがる人や、まだまだ使えるこの駅舎を何故壊すのかという人たちが多いのには驚いた。建築の保存は、根源的には持続可能な社会の構築にかかわっているということが、市民にはきっちり浸透しているのを実感した。恐らくわれわれのように建築にかかわっている人間がこの点に一番疎いことを認識するべきである。余談になるが、保存問題がおこった時に、保存に難色を示し、新築した方が結局お徳ですよと取り壊しをすすめるのは、「専門家」という建築家とゼネコンであることを認識するべきである。今話題の豊郷小学校でも、市民の実感を専門家が認識していないことによる混乱である。この豊郷小学校は耐

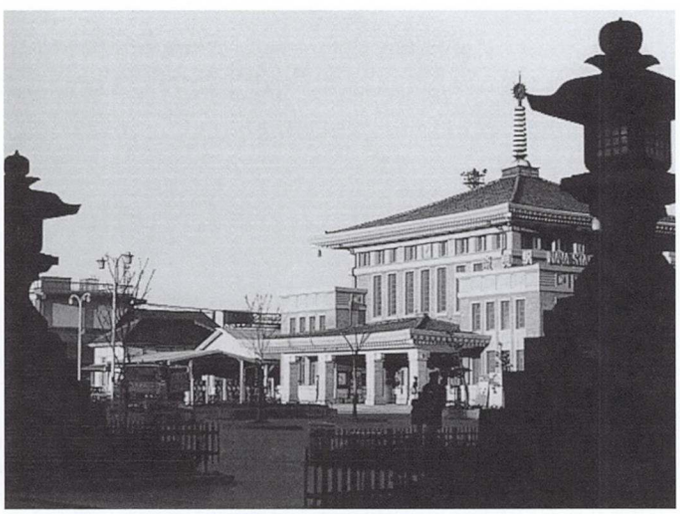


写真１　JR奈良駅舎　撮影／川下　栄穂

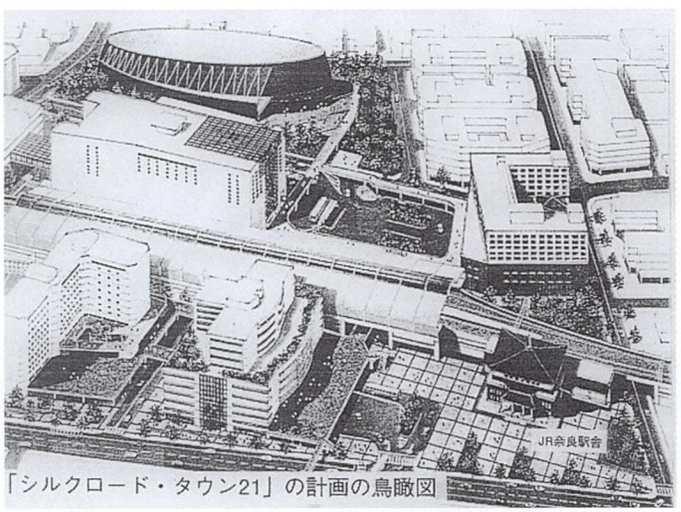


写真２　JR奈良駅周辺再開発事業完成予想図

1995年奈良市が作成したJR奈良駅周辺の全体計画である。
公会堂、ホテルなどが見えるが駅前広場のシンボル的存在として、このJR奈良駅舎があつかわれている。

震補強をしても先が短いと取り壊しを勧めている建築家が大問題なのである。市民は直感的に、少しの補強をして修理していけばまだまだ安全に使用できると分かっているのである。先に述べた奈良の国宝、重文は決してそのまま建っていたはずはない。腐った柱は丁寧に根継ぎをし、瓦を修理して千年持たせてきたのは、奈良の大工たちである。建築保存は古くからこういった日常的な地味な手入れをすることによって長く持たせてきたのである。

また、私たちはこの運動中にアンケートをとった。ＪＲ奈良駅前で通りがかりの人に面談で質疑項目の回答を頂いた。その結果は96%が保存を要望したが、その理由の大部分が、立派に使えている建築をなぜ壊すのですかということだった。建築に対する愛着もあるだろうが、こんな立派な駅舎は今後作れないのだから、使えるものはできるだけ長く使うべきであるというごく自然な感情である。昨今の立体化した駅舎のつまらなさを知っている市民には当然の感情である。私は保存活用の原点は、きちんとした建築をできるだけ長く使い続けることであろうと思っている。こう考えることによって、私たちの日常の建築を造る活動が保存につながっていくのだと思っている。

2001年９月、奈良県知事は突然、記者会見して「現駅舎を曳き家して仮線から外し、奈良市がこれを保存活用する」とし、「私はこの建築の文化財としての価値は認めない。市民運動があったから残すということでは更々ない。奈良市長が保存活用をしたいと言うから、その意見を尊重したに過ぎない」と発表した。これで一応、壊されないことが判明し、ホッと一息ついたのであるが、ここでも知事の近代建築観が見える。保存費用は最終的に県は４億と発表した。

さて以上がＪＲ奈良駅舎の保存再生運動の経過であるが、表題にもどって「ノスタルジー」について一言述べたい。

ノスタルジーとは「望郷の念」という意味だと私は理解しておりここで言うノスタルジーとは保存とは関係ないと思う、と依頼のあった編集者に言うと、「古いものへの愛着」だという返事があった。岩波国語辞典によると「故郷を遠く離れた所に居てさびしさに苦しみ故郷を恋しがること。そのさびしさ。郷愁。懐郷病」とある。ノスタルジーには古いものへの愛着という意味より、どちらかと言えば、亡くなったものへの追慕、記憶という意味の方が近いのではないかと思う。そういう意味で、まだ現に存在する建築への愛着はノスタルジーと言っては誤解を招くと思う。

編集者が事例としてあげている中で、法善寺横丁、ＪＲ奈良駅舎、豊郷小学校はノスタルジックな感情が原動力となって、いろんな成果を上げたと指摘しているが、このような感情で成果が上がった訳ではないと縷々述べたつもりである。失火による類焼で消滅した法善寺横丁と、JR奈良駅舎、豊郷小学校のように現に存在している建築とはまったく別の問題と捉える必要がある。法善寺横丁の復興の努力に水を差す気は更々ないが、なくなったものの復元を「保存」といって良いのだろうか、例えば京都の旧第一勧業銀行や、近江八幡の八幡小学校のように復元された物も同じように、保存といって良いのだろうか。復元することの意味はそれなりにあると思うが、復元は保存ではないということをこの際はっきりしておく必要がある。先に述べた縮小レプリカをイメージ保存という類いは話にもならないが、曖昧にしておけばこんな話がでてくる。「主観的価値」「市民的価値」といったことで、復元も保存も曖昧にしていくようなことがあれば、それは困ったものだと思う。

一方、古い建築や建築の保存に一般市民の関心が高まりつつあり、これは自分の町の歴史に対する関心の高まりを表しているのであり、喜ばしいことだと思う。最近、特に顕著な現象である。この雑誌の編集者たちはこのような現象を「古いものへの愛着」「失いたくない」と捉えたようである。副題にある「建築の主観的価値について」は権威ある研究者の客観的価値ではなく、市民の思いが主観的価値として評価されるべきであるという意味ではないかと好意的に推察する。平成８年文化財保護法が改正され、登録文化財制度ができた。この制度は、いわば「市民的価値」で価値ある建築を登録していこうという趣旨で出発したと聞いている。その地域の人たちにとって大事な建築というものがある。今までは地域の歴史上の人物が関係した建築物にはそれなりの敬意を表するものの、建築学的価値がないとなると、文化財としての指定はなされなかったが、今回は登録であるから、比較的簡単に登録することができるようになった。しかしこの建前と実情とは大分違っている。最近保存が問題になった、ＪＲ奈良駅舎、豊郷小学校、神戸高校、旭ヶ丘高校、正田邸などはいずれも登録文化財となっていない。市民が運動しても所有者である官公庁が同意しないからである。問題は簡単でない。建築物に対する価値観はそれぞれ各個人がそれぞれの建築に対して持っているものであることは言うまでもない。しかし、それが市民的価値という所までまとまりをみせ、更に官公庁をも動かすまでには大変なエネルギーが必要である。建築学的価値だけでなく地域の歴史の中での重さを市民的立場で立証して行く努力をしない限り「ノスタルジックな感情」「古いものへの愛着」「失いたくない」だけでは、果たしてどれほどの力になるのだろうか。

私たちは、JR奈良駅舎保存運動の最中、こんな話を聞いた。何人かの老人がある県会議員を訪れて「どうかあのＪＲ奈良駅舎を一刻も早く取り壊してください」と口々に訴えたという。「戦争にいった私の息子たちをあの駅で見送って、彼らはそれから再び帰りませんでした。私はあの駅を見る度にその事を思い出します。一刻も早く取り壊しをお願い致します」という陳情だということである。これは本当だろうか。あるゼネコンが流した噂だという話もある。真偽の程はいまだに分からない。しかしこれは建築にまつわる「ノスタルジックな感情」「古いものへの愛着」「失いたくない」の裏返しの感情である。世の中は多様である。こういった感情がどれほどの力になるのか、逆に働く場合もあることを考えてみる必要がある。

（よしかわ ただのぶ／好川忠延建築設計事務所 所長）

法善寺横丁の復興

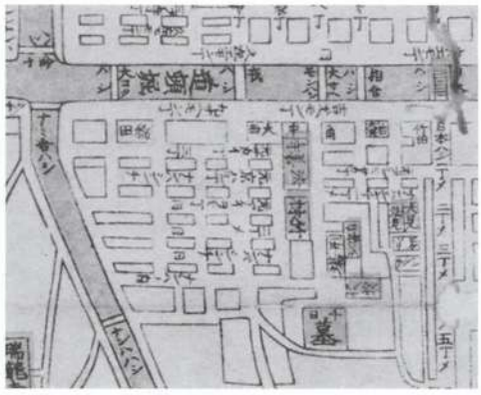
飯山義隆・小川惠三・川久保建明・神田眞晃・岡本清文

復興の経緯

□□寛永14年（1637年）、法善寺が今の土地に移転

江戸後期、昼夜別なく千日念仏の回向を行ったことから、多数の露店が境内に現れた。

明治後期、参詣の絶えなかった寺の境内には出し物や露店が軒を連ね出し常設化していった。



弘化改正大坂細見1845年

□□1945年、太平洋戦争大阪大空襲にて法善寺は炎上し、法善寺界隈は焦土と化した。戦後、金比羅堂と水掛不動はいち早く復旧した。

□□2003年７月28日（月）19:00

法善寺護摩法要が始まった。法善寺横丁北側店舗復興成就と南側店舗の復興祈願が行われた。護摩木の炎、山伏の説教の中、なぜか「ホッ」とし、肩の力が抜けた思いであった。

2002年９月９日（月）、未明に旧中座解体工事中の爆発炎上による事故が原因で、７棟が類焼を受け、焼失した。私たち「法善寺横丁復興プロジェクトチーム」は、当日スタートを切り、初期の情報収集を開始した。チームメンバーが現地に入ることが許されたのは、９月12日になってからのことであった。通常の火災には珍しく、屋根、上階の焼け方が酷かった。１階はどのような店であったか、雰囲気がわかる程度に残っていた。

□□復興を中心に思い返してみる

翌、９月13日（金）、第二回近隣説明会が開かれた。加害者側の立場で私も参加したが、二度と経験はしたくない身の置き所のない説明会であった。被災者への説明は、新聞紙上をにぎわしていた建築基準法に関することに終始せざるを得なかった。

９月14日（土）、横丁に関する具体的な情報は皆無に等しく、まずは、横丁全体の測量を指示することからスタートした。

９月17日（火）、意見交換会では、怒号の中、被災された方々に敷地区画を確定するための図面などの情報提供をお願いした。被災者から、「元に戻せ」「一刻も早く」と何度も何度もこの２つの言葉が発せられた。今になって考えてみると、この２つのキーワードが私たちを奮起させた。

測量図をもとに、建物調査報告書（旧中座解体工事事前調査資料）、被災された方々からの図面、スケッチ等を元に切り貼りしてみた。驚いたことに、敷地区画を全て飛び出していた。

私たちがこのようなスタディを積み重ねていた頃、行政サイドの情報が新聞紙上に形として表れだした。

９月19日（木）、大阪市は特例制度「連担建築物設計制度（以下、連担制度）」の飲食店舗版の活用を検討中であることを新聞２紙が報じた。連担エリア図まで入った報道であった。

火災当日、開発計画本部（現プロジェクト推進部）と地区計画あるいは、連担制度適用の可能性について話し合ったが、市議会を通すことは時間が掛かりすぎるであろうと考えていた。

その「連担制度」が報道され、我々も飛びついた。

９月21日（土）、大阪市「協調建替型住宅設計制度」をもとに北側地権者と３つの案についての説明会を開いた。

① 現行法規—前面道路幅員４m
② ３項道路—前面道路幅員2.7m
③ 連担制度適用—前面道路幅員2.7m（または４m）

９月24日（火）、法善寺横丁復興委員会設立、委員長川久保建明氏が選出された。

10月２日（水）、第３回近隣説明会

９月21日に北側の方々に説明した内容を法善寺会の皆様に「連担制度」と復興スケジュールを提示した。一刻も早い復興ということで、2003年６月末復興というものであった。スケジュールを提示し、更に具体的な法善寺横丁を知る必要があり、法善寺横丁の歴史などを研究しているサントリー不易流行研究所をお訪ねした。法善寺横丁の歴史、写真、店舗写真などの貴重な情報を頂いた。

行政とも連担制度申請、廃道手続き、建築協定などの協議を重ねた。

10月30日（水）13:30、大阪市住宅局建築指導部より、連担制度、廃道、建築協定の説明会が開かれた。

同日の15:00、法善寺横丁復興委員会が開かれ、連担制度、連担エリア、復興スケジュール（'03年５月末建物完成）の説明を行い、建築協定書、運営委員会細則の同意をいただき、諸手続に必要な押印のスタートを切った。

測量も進み北側店舗の区画が明確になってきた。この段階で大きな大きな壁にぶつかった。敷地寸法の確定が、なかなか進まないことである。最終確定をしたのは、12月28日であった。

11月８日（金）、法善寺横丁建築協定書を大阪市に提出した。

11月25日（月）、法善寺横丁廃道同意、連担制度認定を提出した。

12月24日（火）、確認申請を大阪市に提出

年が明け、

'03年１月15日（水）、３軒の確認申請が許可になる

１月16日、法善寺横丁北側店舗地鎮式が法善寺、法善寺の神田眞晃住職により執り行われた

本格的に内装設計と建設工事が併行して進められた。

２月終わり頃になり、復興委員会にて復興をもとにした石畳、電気、ガス、横丁東西の山門、各店の看板について話し合いができるようになった。各店舗とも大阪市による中間検査も終わり、

３月22日（土）、建築協議をもとにした「法善寺横丁町づくり運営委員会」が開かれた。委員長、副委員長、幹事が選任され、インフラ等についても議論いただいた。

３月28日（金）、法善寺横丁建築協定運営委員会役員名簿を大阪市住宅局建築指導部に提出し、現況を委員長より報告した。

４月２日（水）、法善寺横丁南側店舗で火災。天ぷら屋さんの失火により10軒類焼、私も現地に11:30頃着き、消火活動を見守った。一旦鎮まったと思うと、また黒煙が横丁をふさぐ感があった。

この後、５月22日、23日、２軒の消防検査、建築完了検査、連担の検査、26日には保健所の検査を受け、'02年10月30日に被災者の皆様とお約束をした５月30日に、２軒ではあったが建物の引渡しが行われた。

６月５日（木）、南側店舗火災のため、封鎖されていた横丁の通り抜けが法善寺住職の先導により、開放された。

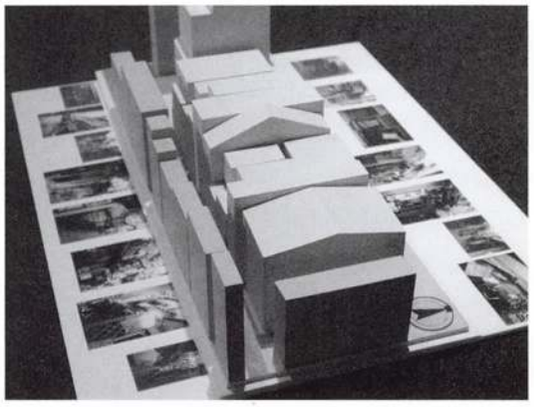
その後、順次引き渡しとオープンに向かい、テナント未定の最後の１軒も７月末には引き渡しを終えた。

まだ南側の復興援助、連担エリア変更手続きと続く。残念なことに、例年行われていた法善寺祭りが、今年は見送ることになったと聞いている。

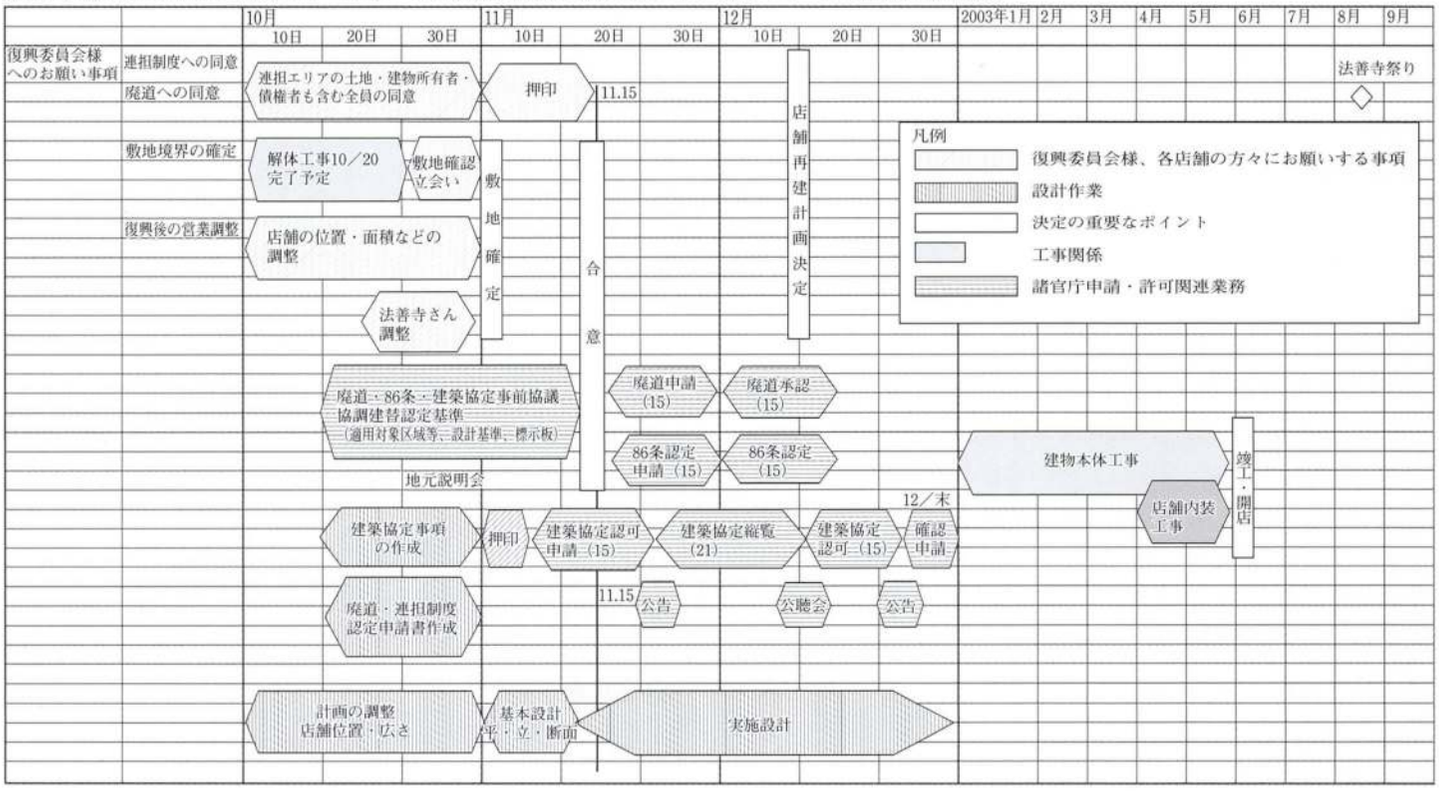
多くの皆様のご支援と声援があっての復興だと思います。ご協力いただいた皆様へは、心より感謝の意を誌面をお借りしてお礼を申し上げます。

（いいやま よしたか／株式会社竹中工務店）

模型



法善寺横丁復興計画スケジュール案　3社協議会 法善寺横丁復興プロジェクトチーム 2002年10月29日



連担建築物設計制度の適用

法善寺横丁の連担建築物設計制度とは、既に本誌2003年２月号にて詳細に記載されているとおり、「道路の廃止」「連担制度の認定」「建築協定の締結」という三位一体の手続きにより成り立っている。ここでは、

１．路幅を従前と同等にする

法善寺横丁建築協定書の第１条（目的）には、「法善寺横丁らしい風情ある町並の創出」と「安心して楽しめる街づくりの促進」と謳っている。

2002年９月９日未明の火災から１カ月も経たない10月２日に行った復興計画説明会では、まず「法善寺横丁の魅力」について、改めて共通の認識を得ることから始めた。第一に、ヒューマンスケールな「路地空間の魅力」である。当時の法善寺横丁は、建築基準法第42条第２項に規定する道路であった。従って、横丁に面する敷地での建て替えは、道路中心線から２ｍ後退し、幅員４ｍの道路を形成しなければならなかった。従前と同等の道路幅員で再建を行うには、横丁に面する全ての建物所有者の同意を得て、この道路を廃止し、建物が存する敷地全体を一体として認定する必要がある。復興に際し、直面した最大の課題が、連担制度を特例的に適用することにより、解決の道が開けた。2.7mの道路幅員を決定するにあたり、防災上、安全上の観点から、問題が生じないか検証を行い、インフラの再整備にも支障が無いことを確認した。

２．構え外装を従前と同等にする

「法善寺横丁の魅力」の第二は、誰しもがなにわ文化をイメージする個性溢れる店構えの生み出す「景観的魅力」である。再建にあたっては、遵法とすることは無論のこと、災害に強い安全で安心な街並みづくりが必須である。一方では、永く人々に愛され、親しまれてきた歴史のある景観の復興という命題も課せられた。

建物は、耐火建築物とし、外装は不燃材料としたが、幅員2.7mの横丁の景観は２階までと定めた。３階は通路中心線から３ｍ以上後退し、バルコニーを設けると共に避難器具を設置している。バルコニーは、避難・消防活動のスペースとして有効であり、横丁通路の上部空間が広がり、排煙・延焼防止の機能をも果たすと考えた。外壁の材料としては、木を用いたいとの意向が多々あったが、既に不燃材料として認定された木材加工品も開発されており、設計意匠の工夫により、支障は無いと判断した。再建された街並みは、装飾やサイン類も建築協定に定めた「法善寺横丁らしい景観に配慮したもの」であり、周辺の都市環境と調和のとれた景観を形成している。



突出し看板
凹凸のある外壁

３．従前の営業面積をできる限り確保する

法善寺横丁のもう一つの魅力は、路行く人の流れが生み出す界隈性であり、店内で客と店主が織りなす心の交流である。形態上の復興がなったとき、法善寺横丁が持つ活力が衰えては、真の復興とは言えない。決して広いとは言えない従前の店舗面積を、できる限り確保し、より多くの交流の場を提供することが、横丁の持つ魅力の持続につながると考えた。建築基準法の規定と比較し、異論の出ないところとして、容積率240%とした。この容積率は、３階建てで、バルコニー部分の壁面後退を行う場合の延床面積とほぼ同等である。また、道路幅員が４ｍの敷地で可能な容積率と一致する。この結果、再建復興後の持続性について、明るい見通しが立ち、関係者全員の合意が形成された。

以上の骨子となる３点の他、細部の規定も定まり、2002年10月30日には大阪市より、関係者全員に対し、「連担建築物設計制度の適用」について説明会が行われ、復興に向けて動き出した。今回の制度は、横丁の再建を望む多くの声を受けた特例的なものであり、関係者全員が建築協定運営委員会のメンバーであることを理解し、より良い街づくりを実践していく決意を「法善寺横丁まちづくり憲章」として「認定標示板」と共に、横丁内に掲げている。

「法善寺横丁」は、街並みの保存や古建築の復元とは異なり、伝統を継承しながら新たなものを生み出すという復興プロジェクトだった。再開された街並みは、20世紀後半に熟成された魅力と、21世紀初頭に復興された新鮮な魅力が、絶妙に調和し、時代に合った「法善寺横丁の魅力」を醸し出していくものと期待している。

（おがわ けいぞう／株式会社竹中工務店）

横丁と人・店

法善寺横丁は、なにわ五座の一つである旧中座の南側に隣接し、“天龍山法善寺”の境内地に広がった寺町であり、幅三メートルに満たない狭い石畳の道路が東西に約八十メートルの長さで続き、そ



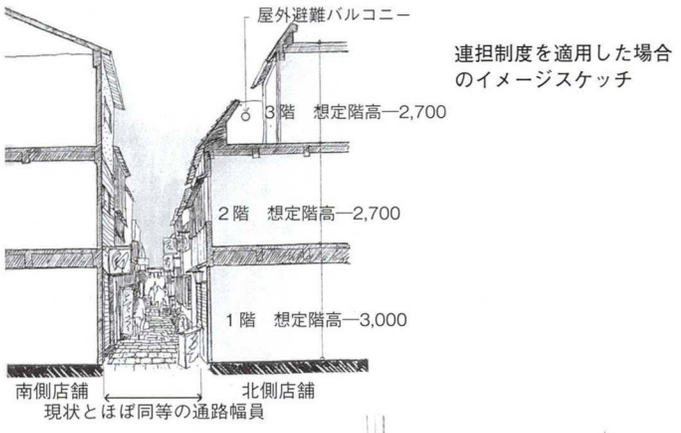
火災現場

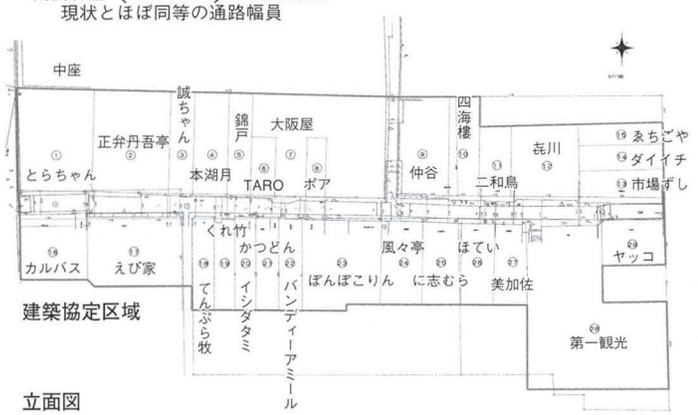


被災後

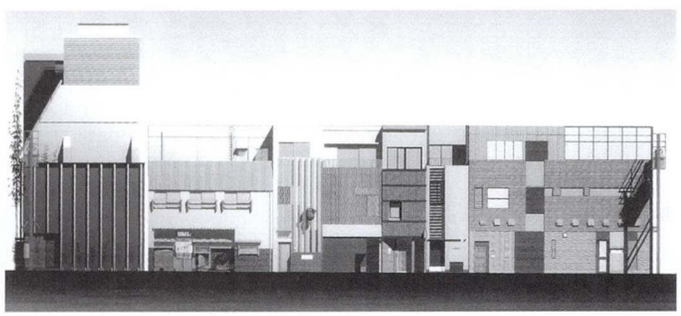


テント村





立面図



の両脇に四十近くの飲食店街などがひしめくように軒を連ねている。店主、従業員は法善寺横丁で営業しているとの自負を持ち、人と人のふれあいを大切にする人情の町でもある。そこに多くの文化人や粋人、道頓堀の劇場に出演する若い芸人さんたちが来て、酒と食を楽しみ、大阪のミナミならではの雰囲気をかもし出していた。

2002年９月９日の未明、旧中座が爆発炎上し法善寺横丁の十八店が全焼した。また、周辺にも大きな被害があり、営業ができない状態になった。事故直後、店主、従業員らは皆ぼう然自失の体で焼け焦げた店を眺めていた。奥さん連中のなかには不安で泣き崩れる方もいた。しかし、幸いにも事故で身体に被害を受けた人はなかったためか、街の皆の願いはなんとか元の姿のまま横丁を復活させたいという思いが日増しに強くなり、皆の思いも一つになっていた。そのため、９月25日には法善寺横丁復興委員会を結成し、私はその委員長を仰せつかった。

しかし、問題山積の状態であった。焼失した店をできるだけ早く再建したいと考えていたが、そこに立ちふさがった大きな問題があった。現行の建築基準法では幅四メートル以上の道路に面していないと、建物を建築することができないということだ。法善寺横丁の最大の売り物は、“石畳”と狭い通路を人と人とが行き交う“横丁の風情”である。法善寺横丁を「お箸の二本がそろっての法善寺横丁」と両側の店をお箸に例える女性店主もあった。法律を守れば、横丁の復元はできない。何とか横丁の復興ができないものかと町の者、全員が真剣に悩んだ。そこで、できることからやろうと復興委員会のメンバー全員で、法善寺横丁の復元を目指した署名活動をはじめた。目標は三十万人の署名。法善寺横丁界隈、道頓堀、戎橋で毎日毎日へとへとになるまでがんばった。ありがたいことに地元の高校生、ごひいきの芸能人など、考えられないくらいの応援があり約二カ月で目標の三十万人の署名を集めることができた。この署名の後押しもあり、2002年12月に大阪市から建築基準法の特例措置として連担建築物設計制度の適用を受けることができた。これにより、横丁の通路幅も従前通りの2.7メートルで認められ、横丁の風情を守ることができたのである。

我々は、今回の火災を教訓にして防災に努めるために、法善寺横丁建築協定を自主的に締結するとともに、更に、今回の被災の経験を大切にし、よい町づくりのために、「法善寺横丁まちづくり憲章」も制定し、全員で守るようにした。

その後、認められた特例措置に基づき、焼失店舗の設計・施工が順調に進み、2003年７月には、すべての建物が竣工し、営業を再開した。石畳も復元された。応援していただいた皆さんに感謝します。しかし、2003年４月に発生した横丁南側店舗の火災のために横丁全

体での復興はできていません。年内の復興をめざしてがんばっています。あと少しの応援お願いいたします。

（かわくぼ たてあき／“えび家”店主・法善寺横丁復興委員会委員長）

横丁と法善寺

法善寺にお参りに来られる方は、楽しい拝み方をなさっておられ、一杯気分で『男前にしてくれ』とか、線香の煙を胸に掛け『大きくなりますよう』と拝んでおられます。

もちろん、本来のお寺は「葷酒山門に入らず」と、お酒や大蒜の食べた方はお寺には入れないのですが、そこが法善寺の味があるところなのです。参拝者が、横丁で一杯飲み、何を食べて頂いても、アベックで来て頂いても良い、下町のお寺なのです。

さて、法善寺と法善寺横丁の関係の資料は、昭和20年３月13日の第一次大阪大空襲（B29、274機、焼夷弾1733トン）の時に六堂伽藍が焼失し、先代眞亮和尚の話では「お不動さんだけが残り、消失を免れた倉も扉を開けた瞬間に火が上がった」と、一切残っていないのであります。

もちろん寺歴には、開山は琴雲和尚で、1686年（貞享３年）とあり、この難波の地には、中誉専念和尚が、1637年（寛永14年）金毘羅天王懇伝の故事によって現在地に移転したとあります。しかし、その当時の図面は、私自身見たこともなく、千日寺とも呼ばれ、お墓があり、先代眞亮和尚は、「寺領（境内）の中に、芝居小屋や飲食店などができて、門前町的なにぎわいになったのだろう」と言われていました。そこで、私は、横丁の狭い道は、お客さんがお互いに袖擦れ合い、譲り合う優しい心のふれあう所で、その優しい思いやりの心こそ、境内のお不動様より頂いた慈しみの心なのだと思います。

この優しい思いやりの心は、店主の皆様もお不動様を拝んでいる間に培われ、お不動様に願掛けの水をかけられた後に、バケツの水を次のお参りの人のために水鉢に注がれているのです。もちろん、この心は店主や店員の心となり、周りのお客様に伝わっていくのです。

このように法善寺横丁（昔は極楽小路）に来られる人は、優しい思いやりの心でいっぱいになっているのです。この心こそ、法善寺横丁の心であり、「法善寺は大阪の顔です」と都蝶々先生が言われた大阪の心で、そのふれあいの人情の横丁こそ、大阪の庶民の文化の発祥地であります。そして、この文化下町の情のふれあう法善寺横丁を再確認をしたのが、今回の火災なのです。

消失したお店の方が、「横丁で店出したいのです。もう一度」「横丁はお箸です。二本あってご飯食べれます。一本でも鉄のお箸でも食べれへんのです」と言う声を聞いたときに、私は、横丁を愛する心に打たれ、涙が出たのでした。

そして、その時に私の心に響いていたのが、先代眞亮和尚の戦災の時の言葉で、「再興の第一歩は、焼け残った水掛不動尊の前で法要し、お不動さんに頼むことや」なのです。そこで、今回の被災も復興の心の支えは仏様や神様で、『死のうと思う日はないが生きてゆく力がなくなることがある　そんな時お寺を訪ね、わたしはひとり仏陀の前に座ってくる　力わき明日を思う心が出てくるまで座ってくる』と坂村真民先生の詩のように、被災された人の心に仏様神様に縋る心をお持ち頂くように、「たのんまっせお不動さん、たのんまっせ復興を、たのんまっせ法善寺横丁を」と水掛不動尊に復興祈願護摩法要・金毘羅様に復興祈願をお願いし、心の支援として色々な店のご縁のある俳優、歌手、音楽家や芸人さんが励ましの落語会・コンサートなどを開催できたのです。



護摩法要

このようなことができたのも、法善寺横丁がお寺の一部で、共に生活共同体であるからではないでしょうか。そして、大阪の人情や信仰深い心があればこそ、お不動様は、「よしわかった、必ず復興さすぞ」と導いて頂けるのです。

この紙面を借りまして、最後になりましたが署名活動や義援金活動にご支援頂きました多数の皆様や、ボランティアにご協力頂きました三代目桂春団治師匠をはじめ多くの俳優、芸人さんや歌手の皆様、寺院の皆様に心よりお礼申し上げます。　合掌

（かんだ しんこう／法善寺第30世住職）

復興の形
～「正弁丹吾亭」の場合～

私が設計担当者として「正弁丹吾亭の店主夫妻と面会して間もないころ、夫人がつくづく淋しげに「先代が大切にとっておいた歴代の暖簾が焼けてしまったのです。季節ごと、年ごとに新調するのが楽しみだったのに、何十枚とあったのが全て焼けてしまって…」と話された言葉は、彼らが失ったものの実体として強烈に突き刺さっ



てきた。いくら建物や路地を以前の姿に復元したところで、焼失した思い出や歴史は再び元通りには戻らない。復元だけでは本当の意味での復興にならないのだと思い知らされたのである。積み重ねてきた時間そのものの価値—手垢や煙草のヤニ、油、傷、すれ、ほつれ、凹み…、人間のあらゆる営為の跡が染み込んだもの、いわば人の染みこそが法善寺横丁の魅力であり、染みから発せられる暖かで懐かしい匂いに誘われて、きっと人はこの狭い路地の奥へと引寄せられたのであろう。それは一朝一夕で再現できるものではない。もし安直な疑似ノスタルジーを求めるのなら、エイジングやレトロ調デザインという手法もある。しかし、法善寺横丁はテーマパークでも映画のセットでもない。情緒的な懐古趣味だけでは真の復興を望めないであろう。当プロジェクトの本義は、歴史的町並みの再現ではなく、悲しみと絶望の淵に立たされた被災者の一人一人が、この苦難をどう乗り超えて、いかに新しい商いを再開継続するか。商人としての精神を一日も早く復興するかにあったと思う。そして、彼らの商魂を注ぎ込むに値する器を建築することが、我々に与えられた役目であった。

正弁丹吾亭の場合、表は前のままに戻すが、店内は一新するという意向で、内装を間宮吉彦氏に依頼された。若者向けのカフェなどを多く手掛けるデザイナーと、年配客が中心であった老舗料理店の組み合わせは唐突にも思えたが、間宮氏起用は店主自身が語るように、「名前の上にあぐらをかいていたくない」という姿勢から、災害を与えられた大きな転機ととらえて、古い味わいを残しながらも時代と響き合うような店作りに挑戦したいという強い決意の表れである。そこへ辿り着くには、過去への思い入れやこだわりと現実の制約条件との狭間に奥悩し、葛藤した壮絶な内面の過程があったに違いない。

火災前のファサードは、奇遇にも千葉県の国立歴史民俗博物館に実物大模型として展示されていたので、展示模型用資料を参考に実際の図面を起こし直すというアイロニカルな作業になった。モデルがあるとは言え、現行の法規や連担の条件から、完全な復元は不可能であった。あくまでも、原型を尊重しながら、柔軟な視点で改良、修正、アレンジを加えた。にもかかわらず、完成後訪れた客達が、全く前の通りの姿に戻ったと一様に驚いているのを見ると、違和感がなく記憶の継承ができた事は一つの成功ではなかったかと思う。つまり、博物館に展示されているものと実際の姿はすでに異なっている訳である。ロンドンのマダム・タッソーにある蝋人形が、本物そっくりに模していながらどれもあまり似ていないのと同じように、現実の方は常に流動的に変化している。街並みの風情も、変わらないことにあるのではなく、気づかないくらい緩やかな変容の連続によって醸し出されるのではないだろうか。

刷新されたインテリア空間には、見せ場となる大きな壁面がしつらえられた。そこへ飾るアートについて何案かの作品候補があがったが、店主自身も一体何が良いのかが判断つかずに随分と悩んでおられた。そのとき私はふと、焼けた暖簾の事が頭に浮かび、どのような焼け残りの断片でもよいから見せて欲しいと頼んだところ、二箱のダンボールを持ってこられた。中からは、泥と水に紛れて焼けただれた布の塊が出てきた。沈火直後の水浸しの現場から運び出したものらしい。一枚一枚はがすようにして広げていくと、湿りを帯びた焼け焦げの匂いが部屋中に満ちて、事故の生々しさが蘇った。おそらく猛火をくぐって変色したものだろうが、焼け残った部分を見ると、上質な生地と染めは力強い色の精を失っていなかった。私はかろうじて助かった宝の破片をつなぎ合わせて美しいコラージュ作品にできると確信した。それこそがこの店に掛けるべきアート「記念碑」ではないかと。



暖簾アート

先代が守り続けた暖簾の束は、老舗の歴史そのものである。一枚一枚の布には、手垢と伴に万感の思いが染み込んでいる。そして、火災という不幸な出来事もまた歴史の中の深い染みとして、色とりどりの布の中に吸い込まれた。まさしく悲喜交々の歴史模様を描き出したかに見える暖簾のコラージュは、約10カ月に渡る法善寺横丁復興計画の中で偶然に生まれたものかも知れないが、私にはなぜか予定調和に似たような不思議なドラマ性を感じずにはいられない。こういう事故が無ければ、おそらく役割を終えた幾十もの暖簾たちは、人目に触れることもなく静かに物置の片隅で眠り続けていたであろう。姿形を変えながら、歴史は縷縷として受け継がれたと思う。

今回のプロジェクトでは、この暖簾アートもまた、復興の一つの形であり、自分にとってはむしろそれこそが建築そのものであったような気がしている。

（おかもと きよふみ／株式会社竹中工務店）

大阪の近代長屋そして現在

和田康由

近代大阪の住宅事情を、大阪市の社会部報告から読み取る。

大正15（1926）年の住宅総数[1]は44万戸余り、昭和16（1941）年の住宅調査[2]では61万戸余りと約17万戸も増加している。その内訳は、旧市域では住宅の増加数はわずかに4千5百戸余りにとどまるが、新市域[3]では16万4千戸余りと著しい増加で、特に大阪市南部の住吉区が2倍半と最も増えている。所有別でみると、ほとんどの地区で9割程度が貸家で、同15（1940）年の貸家調査[4]では総戸数の95%が長屋である。つまり、大阪の住文化は、賃貸の長屋によって創られたといえよう（図1、2[5]）。しかし、それらの多くは、昭和20（1945）年の20数回の空襲とともに消失し倒壊した。失われた木造家屋は30万戸余りであった。その後の高度経済成長期に、長屋は「老朽化住宅」として扱われ、バブル期では「地上げ」の対象となっていた。住宅・都市整備公団の「長屋の共同建て替え」（昭和58（1983）年）などによる「長屋の建て替え」をすすめる動きや大阪市主催の「戦前長屋等建替モデル提案募集」（平成10（1997）年）なども行われている。平成10年、戦前の木造長屋の戸数[6]は、3万3千戸余りとなり、今もその数は急速に減り続けている。

長屋と私

昭和49（1974）年から長屋の調査を始めた頃、都会には人情も何も残っていないと考えていた。しかし、それが大きな間違いであることがわかった。長屋の歴史や間取りを調べるためになんの面識もない私が突然訪問しても、ほとんどの住民は快く調査に応じてくれた。間取りの採集も玄関先で伺うときもあれば二階まで見せていただいたところもある。また、長屋を建てた家主、建築技術者、大工などを訪問してもほとんど同じ応対を受けた。筆者は10年間余りで1万棟余りを調査した。大阪の長屋は、産業構造の変革と都市の人口集中に伴う住宅難の解消のために数多く供給された。商業都市大阪人の見栄を張らない気質も反映している。長屋は、近代の建築制度や住宅改良・生活改善の社会の潮流を受けて、特に土地区画整理組合事業地区でおおいに発達した。長屋では珍しい和風の門構えを備えたもの、開放的な生垣を備えたものなどいろいろな種類の近代長屋が誕生し良好な住環境を創り出していた。

そこには、多くの人々がかかわっていた。普請道楽の地主が出入りの大工に長屋を建てさせたり、材木屋が地主から土地を借りて長屋を建て商品として販売したり、株式を扱う社長が土地会社を設立して長屋を建設し投資の対象とした。また、大阪市が市営住宅として供給したり、住宅難を解消するために大阪市より低利資金貸付を受けた土地会社が貸家経営をし、あるいは、土地区画整理組合事業に参画して大量に近代長屋を建てたりするなど長屋供給のメカニズムは人々の思惑をはらんでいる。もちろん長屋を建築的に見ると、粗悪なものもあれば高級なものもあり、それは建てる側の住宅に対する考え方による。金儲けを意図する人、いや住宅は普請がたいせつだと考える家主、ハイカラで目立てば良いと考える人もいる。さまざまである。借り手も同じである。調査の目的は、誰がいつどのような理念に基づいて、どんな長屋を供給したかを探ることにある。人が人のために良好な住宅地をつくるための指針になればとの考えによる。

地主と家主と店子は複雑

長屋を供給した人達は公営と民営に大別できる。ここでは民営について考える。民営には「地主＝家主」と「地主≠家主」に大別できる。「地主＝家主」は、地主が出入りの大工に長屋を建てさせて経営するため、長屋の質や維持管理も行き届いている。「地主≠家



図1　スプロール地区（福島区）
昭和17年　大阪市航空写真



図2　土地区画整理組合事業地区（阿倍野区）
昭和17年　大阪市航空写真

主」は、地主が建売大工や材木屋などに土地を貸して長屋を建てさせて販売するため、四戸建の家主などが多くなり長屋の質や維持管理が滞りがちとなる。「地主＝家主」を借りる店子よりは「地主≠家主」を借りる店子の方が法的な権利は複雑である。

戦後、「地主＝家主」が頑張っている長屋は、比較的原形に近い状態で活用されている。しかし、「地主≠家主」の長屋は、家主が1住戸単位で店子に売る場合が多く長屋の外観は個人の増改築でバラバラである。ただ、これも相続などの税金対策が原因で両者とも複雑となり、建て替えか、不動産業者や店子に売ることになり、長屋がつぶされ駐車場になるなどまったく別のものになってしまう。つまり、現存している長屋は、戦災、災害、建て替えなどの悪条件を克服したもので地主、家主、店子の愛着無しでは考えられないということである。


図3　石畳保存自治会（福島区）


図4　阿倍野区（阪南町）


図5　北区（中崎町）


図6　からほり倶楽部（中央区谷町6丁目）


図7　「野田の家」（福島区）

断末魔の長屋でも…

近代大阪が育んだ長屋は人間でいえば、今、断末魔を迎えている。ただ漠然と臨終を待っているのではない。長屋を少しでも後世に伝えたいとする動きがあり、4通り考えられる。

①ほぼ原形をとどめた形で住宅として住み続ける動き

長屋と石畳を大切にしている福島区海老江の住人の方（図3）や登録文化財に申請して地域住民のコミュニティの場として活用しようとする阿倍野区阪南町の家主（図4）がいる。この他に、戦災を免れたところでは、子供が巣立った後、家族の思い出を大切にしながら生活をしている高齢者などがいる。

②外観、軀体（骨組み）、空間などをとどめて活用する動き

大阪市北区の中崎町（図5）や中央区の六波羅雅一氏のからほり倶楽部（図6）などで進められ、長屋を懐かしむ人々にその魅力を再認識する場を創り出している。

③博物館などで、模型でその姿を止めておこうとする動き

大阪くらしの今昔館（大阪市立住まいのミュージアム）や大阪市立歴史博物館などで再現され、多くの高齢者や若者にノスタルジックな環境を提供している。

④新しい理念に基づく長屋を創り出そうとする動き

先駆的には安藤忠雄氏の「住吉の長屋」1975年、ＣＯＭ計画研究所、ヘキサなどの「Ｒｏｊｉコート」1987年、吉井歳晴氏の「野田の家」1996年（図7）など多くの建築家によりさまざまな作品が創り出されている。

長屋には今も人情が生きている

筆者は長屋を30年間ほど見てきた中で何を一番大切にしたいかといえば、長屋にかかわった人々の心である。長屋を愛する心が近所との人情ある付き合いを生み、こまめに修繕したり、建具や格子戸を磨いたり、石畳を美しく保存・活用して住み続ける原動力になっていたものと考える。

2003年3月15日に大阪市立住まい情報センターが「大阪長屋サミット」を開催した。参加希望者は500名にも及ぶ人気で、会場には、長屋に惹かれる若者や愛着を覚える高齢者の人々の熱気にあふれていた。大阪独特の長屋による住文化を後世に伝えるとともに、長屋の未来を創り出せればと願っている。

（わだ　やすよし／大阪市立都島第二工業高等学校教諭 工学博士）

〔引用文献〕
1）大阪市社会部：『大阪市住宅年報　第3号』第57号　昭和2年。
2）大阪市企画部：『昭和16年　大阪市住宅調査書』昭和17年4月。
3）新市域とは、西淀川区、東淀川区、東成区、旭区、住吉区、西成区を含み、現在の区域とは少し異なるところがある。
4）大阪市社会部報告：『本市における貸家の状況』第251号　昭和15年5月
5）大阪市航空写真（昭和17年）所有者大阪市（計画調整局）　平成12（2000）年大阪市指定の文化財に指定される。
6）編集総務庁統計局：「平成10年住宅・土地統計調査報告」。

下寺町界隈のまちの魅力と価値

秋田光彦

伽藍のまち・下寺町

大阪の都心部、天王寺区と中央区の区境を走る松屋町筋に並んで、南北約2キロにわたって、下寺町がある。北の大蓮寺を先頭に南詰の一心寺（こちらの町名は逢坂だが）まで、約30の寺院が一直線上に並んでいる。大阪は現在も仏教寺院のたいへん多い都市であるが、都心の幹線道路に沿って、これだけの伽藍が整然と連なるまちなみは、京都や奈良にも見当たらない。

ひとつひとつの寺の縁起を挙げればきりがないが、たとえば大覚寺は文化10年に再建された当時の壮麗な本堂を残しているし、光明寺は大阪狩野派の画家・大岡春卜などの襖絵、屏風が現存する。昭和4年に再建された心光寺は、ストゥーパ（塔婆）を模したインド様式の本堂で、先ごろ名建築として文化財登録もされる等々、といった案配。雄大な寺社造りに加え、下寺町にはさらに語ることの欠かせない、緑と坂道というふたつの自然遺産も配置されている。

下寺町は上町台地の西側の縁の部分に位置しているが、台地の高地と寺町の平地の境界線上に、ゆたかな緑のりょう線が走っている。それがちょうど各寺の境内地の緑とも連続しながら、都心とは思えない自然緑地を形成している。また、平地から台地上を東西に結ぶ坂道が随所にあり、なかでも天王寺七坂は緑と古風な石畳がマッチして、かつて織田作之助が、小説「木の都」の中でも書いたなにわの情景がいまも静かに守られている。

この下寺町が形成されたのは、江戸時代初期、大坂城の徳川家の初代城主松平忠明が行った、当時の市街地再編が契機とされている。市中のあちこちにあった寺々を集め、郊外の数カ所に寺町を配置したのだが、その理由は有事の際の防衛上とか諸説あってはっきりしない。ただ江戸時代も町民文化が成熟してきた頃には、このあたりは市中から一心寺や四天王寺への参道として大いに発展、花や眺望の人気もあって、当時のリクリエーション空間としてにぎわったようだ。その活況は、上方落語「天王寺詣り」や文楽「曽根崎心中」などからも窺える。



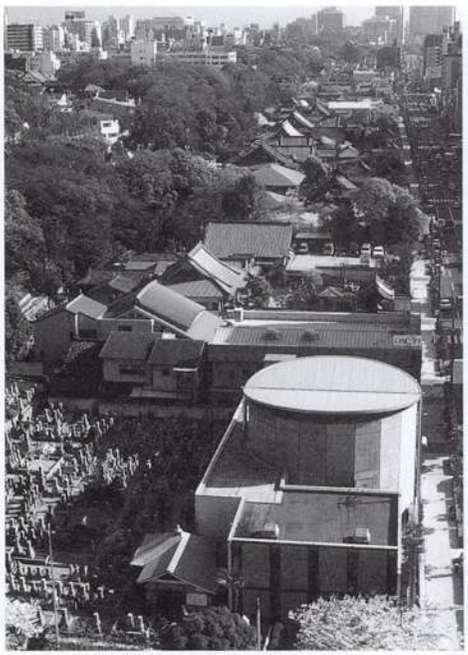
天王寺七坂のひとつ口縄坂

寺町は大阪の原風景

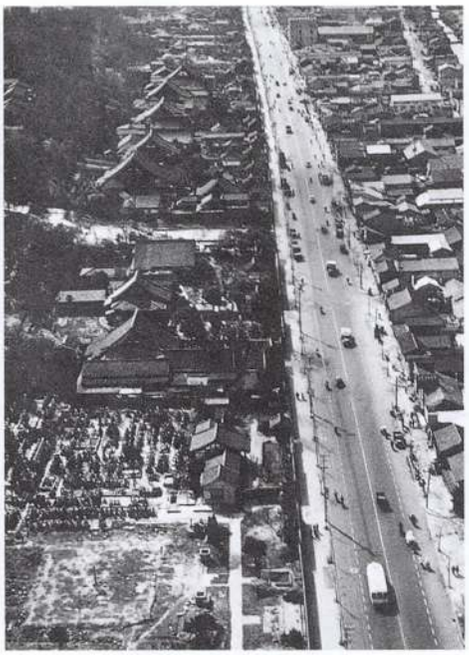
大阪と寺、仏教との由来は、飛鳥時代の四天王寺まで溯る。

古来、仏教伝来の地が大阪であれば、中世になって浄土教の聖地として全国から大勢の信者を集めたのも大阪であった。近世には浄土真宗の蓮如が登場、石山本願寺は時の権力者を脅威せしめた法城として知られた。下寺町に限らず、都心部に現在も残る寺々の連なりは、宗教都市・大阪の原風景といってよい。

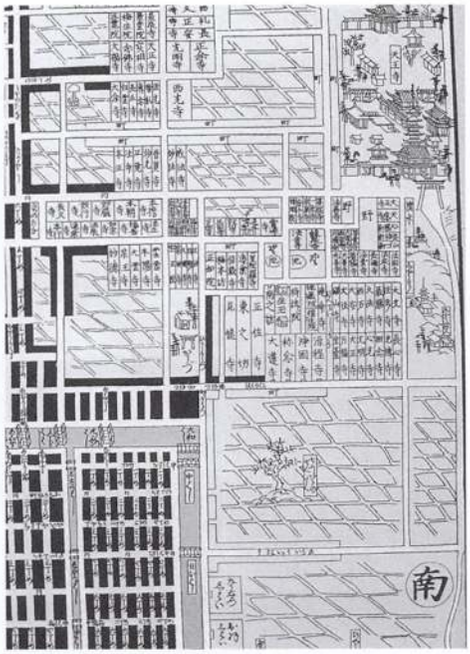
にもかかわらず、現在、私たちがこうした大阪の宗教文化にふれることはほとんどないに等しい。大阪の寺は近代的でなくてはならない、と高度成長期に寺院の高層化が流行り、バブル期には、お寺自らテナントビルやマンション経営に乗り出した。お寺参りは京都や奈良に任せておけと、大阪の寺々はごく一部を除いて、市民が自由にアクセスできるものではなくなった。かつてまちに対しダイナ



應典院を手前に下寺町を臨む



昭和28年当時の下寺町



明暦年間の下寺町界隈。当時とほぼ同じまちなみが現在も残る

ミックに開かれていた大阪の寺自体が、内側に閉じこもり、いささか精気を失った感は否めない。

いま私たちは大阪の原風景である寺町の記憶を、歴史史料の上で確認はできても、生きた空間や生活の匂いとして体感することはできない。いや、それぞれの個人史においても、檀家が離散し、家族が多様化するいま、寺を心の拠り所として感じ取れる世代も徐々にその数を減じてゆく。大阪の寺町の風景は実態的にも心情的にも枯渇しかかっている、といっていいだろう。

日本でも外国でも、歴史ある都市で、シンボル的な宗教空間を持たない都市はない。多くのツーリストは、その都市の原点を寺や教会に訪ね、歴史を学び、また宗教、芸術、生活といった連綿と続く固有の文化にふれる。大阪の歴史を語るには、それにふさわしい大阪固有の寺町文化が必要なのであって、京都や奈良にその代替はできない。観光立都を宣言した現在の大阪にとって、もう一度、大阪の原風景としての寺町を再評価する時が来ているといっていい。

下寺町は風致公園地区にあり、結果的に都市開発から取り残され、400年前のまちなみをほぼ当時のまま守ることができた。約30の寺々には、何の保護も振興策も受けず、しかししぶとく生き残ってきた「まち寺」の矜持がある。歴史そのものを感じさせる江戸時代の寺院もあれば、コミュニティに開放された地域密着型のお寺も登場した。京都のような博物館級の文化財はなくとも、寺が市民の生活につながることで、もうひとつの原風景が立ち上がりつつある。かつての寺町への愛着を現代に再生させようとする、下寺町の実践を紹介していきたい。

共生の寺町文化

その前に、寺町文化とは何か、について筆者の見解を述べておく。

そもそも寺は、葬祭が専門の場であったわけではない。それが常態となるのは明治中期以降のことであって、それ以前の多くの寺は、祭礼の場であると同時に、人々が生きる上で欠かせない「学び」（教育）や「癒し」（福祉）、「楽しみ」（芸術文化）の場でもあった。たとえば、寺子屋の歴史が物語るように、寺院は日本の庶民教育の先駆けであったし、病院や劇場の原型もお寺をその源流にしていることもよく知られている。いわば寺院という場が社会に開かれ、そこに人々の参加や交流があって、さまざまな共生の文化が生み出されてきたのである。それをより集積的に関連的につないだものが、寺町文化の魅力といっていい。

しかし、明治以降、急速な近代化の波が押し寄せ、寺子屋が学校教育に取って代わられたように、寺院は本来の場の意味を失っていく。教育や福祉、芸術といった、寺院から生まれた共生の文化も、そのほとんどが行政や資本のサービスに置き換えられ、かろうじて残ったのが葬式仏教だけというのは実情ではないだろうか。

一度焼失したものを再び蘇らせることはできない。しかし、寺町文化が育んできた魅力は、どこかの歴史村のように往時を再現することで確認できるわけではない。寺町の原風景とは、可視的な風景であると同時に、その意味や価値を伝える、内面に記憶された風景でもある。大阪に寺町の原風景をどう再生するか、という問いは、大阪の寺町がその独自の文化をもう一度現代に再創造することに等しい。言い換えれば「学び」「癒し」「楽しみ」の3つの共生の役割を、再びこの都市全体に投げかけることなのである。

参加と交流のお寺町

下寺町において、寺町文化再生の嚆矢となったのは、94年に開館した一心寺シアターの登場である。寺に隣接してあった元生花卸売市場を同寺が買い取り、仮設劇場として再生してオープンした（02年に、一心寺シアター倶楽として新築された）。一心寺住職高口恭行は、このお寺劇場の開館の趣意を、寺院の役割の変化という文脈で以下のように述べている。

「旧来の檀家システムに頼り切った活動ではなく、いわば都市の流動人口に対してより柔軟に対応する活動形態を模索しなければ、（寺の）経済基盤はもとより活動基盤の喪失といった危惧が現に見え始めていると思われる。つまり、具体的には、従来観光寺院以外では閉ざされていた本堂の扉を、旅行者に対しても地域の新米者に対しても開放するということである」（都市のたくらみ・都市の愉しみ）

高口は建築家、都市計画家としても知られるが、その発想と実行力は、下寺町全体にも波及してゆく。

96年からは、一心寺シアターを中心に下寺町全域で「なにわ人形



なにわ人形芝居フェスティバル。本堂は子どもたちで一杯

芝居フェスティバル」がスタート、春彼岸の土日、寺町に連なる25以上の寺社が本堂から境内すべてを開放して、多数の人形劇団の上演を受け入れた。スタッフとして、檀家や近在の高校生やお母さんグループが手を挙げ、文字どおり、往時を思わせる寺町の活況が再現された。一部の檀家に限定使用されていた寺が、2日間とはいえ、市民を対象に全面開放されたことは、画期的なことといってよい。来街者は2万人を超え、人形劇はもちろん、寺町の緑や花、坂道に存分に親しみ、大阪の寺町の風情を満喫することになる。外からの参加と評価は、眠っていた寺町のモチベーションを引き出す。以後は寺の住職たちが自主的に実行委員会を作り、このフェスティバルはすでに6回を数えている。

寺町文化は、歴史と文化財だけの魅力ではない。遠巻きに拝む国宝級のご本尊もありがたいが、多くの人々は、そこでしかできない参加や体験、交流を求めている。それこそ人々の生活や暮らしとともにあった大阪の寺町文化にふさわしいものではないだろうか。

そして、97年、下寺町の北端に、劇場型寺院・應典院が登場することになる。

劇場型寺院・應典院の活動

應典院は、浄土宗大蓮寺の創建450年記念事業の一環として新たに再建された。再建プランは住職の私を中心に、当時30代の研究者、プランナー、編集者らとともに練り上げられた。本稿では詳細は述べないが、葬式なし檀家なし墓もなしで、宗派不問。本堂はコンクリート造りの劇場仕様で、運営はＮＰＯをモデルにした会員制で行うなど、当初から型破りな寺として世間の耳目を集めた。仏事の代わりに演劇のステージやボランティアのセミナーなどが開催され、このお寺を訪ねる人は1年間に約3万人に上る。しかもその大多数が、ふだん寺とはまったく馴染みのない20代の若者たちであることが、大きな特徴のひとつだろう。

ここには昔ながらのお寺の風情はない。その代わり、さまざまなＮＰＯ（民間非営利団体）や若いアーティストと協力しながら、芸術や教育、ボランティアなど積極的に社会のテーマに取り組み、お寺のアウトリーチを試みている。毎月、寺を会場に「詩の学校」が催され、自分の内面を詩作する若者たちが集まってくる。また、夏休みには高校演劇祭を開催、地元の高校生たちがプロの演劇人と協同しながら自分たちの舞台を作り上げる。今秋のアートフェスティバルでは、美術家・北山善夫が「生と死」をテーマにした展覧会とワークショップを、また舞踊家・岩下徹が大蓮寺の墓地を舞台に、即興のコンテンポラリーダンスを演じる等々、ここには窮屈な儀式はないが、しかし、いのちを振るわせるような場が幾層にも作り上げられている。一心寺シアターがあくまで仮設劇場であったのに対し、應典院はお寺そのものが劇場化したものであり、言い換えれば寺本来の価値をストレートに打ち出す意味で画期的なものであったと言えるかもしれない（ちなみに、應典院の建築設計は、建築家高口恭行の手によるものである）。

先に、現代の寺町文化とは、寺々がその独自の文化をもう一度再創造することだと述べた。過去の風景の再現ではなく、長く継承されてきた意味や価値を現代に問い直すことであるとも述べた。むろん、その価値は保護の垣根を出たとたん、社会のきびしい評価や批判にさらされる。またそれを普遍化していくためには、社会に対し粘り強く説明責任を遂行してゆくことも必要となるだろう。寺町文化の再生とは、寺が社会に対し全身を傾けて「対話」を試みてゆくことなのである。

まちへの愛着をどう育むか

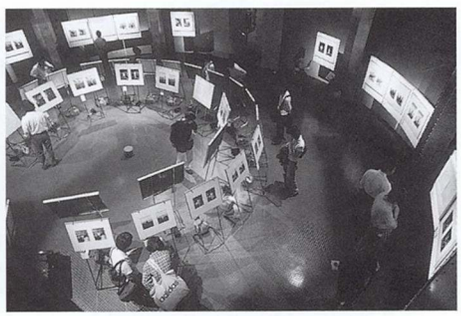
まちへの愛着は、駅舎にせよ小学校にせよ、そのシンボルとなる建築やまちなみを通して認識されてゆく。滋賀県の豊郷小学校保存運動もまた、そこが歴史的建築である以上に、地域の人々にとって世代を超えた学舎（まなびや）として共通の認識があったから勝ち取られた結果だろう。人間の生活や暮らしの匂いのしないところに、愛着は根づかない。

しかしまちへの愛着は、放っておいて育つものではない。変化が速く、世代間の格差も広がると、まちに向ける視線は自ずと至近的なものにならざるを得ない。インターネット社会が定着してゆくほ



應典院正面


應典院本堂は天井７m、直径14mの円形劇場だ


本堂を使ったギャラリー展

ど、変化には敏感だが、不易なものに対し十分な共感ができない感性が育っている。愛着が育つためには、時間と経験が不可欠なのだ。

應典院では５年前から大学生インターンを受け入れている。インターンシップとは、学生が在学中に社会のさまざまな現場に就業体験しながら現場の知を学ぶものだが、應典院でも毎年数名の学生を半年から１年の期間預かっている。見学者ではなく、あくまで主体的な研修生として、應典院のさまざまな現場、発表のみならず会議や討議の場、交渉の場に参加させるし、意見も言わせる。学生にとっては、全身で学ぶような貴重な機会でもあろう。

インターンとは、たとえて言えば「学ぶ意思」である。自分の関心や問題意識があって應典院に参加したのだから、わずかな期間であっても、その吸収力は驚くほどはやい。何でも結構ではなく、遠慮なく問題点を指摘させるから、いっそう対象を凝視する。そういった学びを続けながらやがて彼ら彼女らは、自分と應典院の固有の関係を切り結ぶのである。うれしいことに、そのうち少なくない数の学生たちが、自分の卒論や修論のテーマに應典院を選びなおす。愛着を発見するのである。

同様にまちへの愛着も学びから始まる。それは、歴史的評価や建築的評価を学ぶというような客観的なものではなく、自分がその対象とどれだけ多様な関係性を築き、ゆたかな場を創造できたか、その主観の判断に尽きる。逆にどんな歴史都市であっても、自分にとって動態が乏しく表情に欠ける建築やまちなみであれば、愛着はわきにくい。まちへの愛着とは、いわばひとりひとりの個人とまちが織り成す創造的な協働作業なのである。

下寺町もただ歴史的なまちなみが保たれているから、愛着を注ぐのではない。400年前の昔もいまも、ここから寺町の価値を伝え続けようという文化の連続と、そこにたえず魅力的な人材がいるからこそ、私たちに学ぶことを喚起づけているのではないだろうか。

上町台地からまちへ

2003年５月31日、大阪の都心の文化・生活の魅力を生かしたまちづくりを目指して、「上町台地からまちを考える会」が発会した。当地の地域住民やＮＰＯの活動者、研究者らにより結成され、筆者が代表理事に就いた。

上町台地は大阪の文化の発祥地であるが、同時に学校や病院、文化施設といった生活機能が集中する魅力ある居住空間として知られる。それを狙ってか最近は急激にマンションが乱立しており、逆にコミュニティの問題を引き起こしている。いまは便利さ本位でも、20年、30年の後、なおそこに愛着を持ち続けることのできるまちであるかどうか。私たちは、都心の魅力や価値をあまりに短いスパンで考え過ぎているように思う。


空堀はいま若者に人気の町屋エリアとして知られる

高層住宅と集客施設だけが、都心の魅力なのではない。歴史や自然の資源は言うまでもないが、移り住む人々がそこに生活の根を下ろし、じっくりと人生を愉しむことのできるようなまちの魅力をどう掘り起こすのか、暮らしを通じた新しい愛着の創造が求められる。

上町台地の中央部には、町屋再生で話題を集める空堀地区があるが、戦前の家屋を保存しながら新しいショップ展開も進めており、これまでにない魅力を醸し出している。台地の東縁に位置する在日のまち・コリアタウンも、エスニックな雰囲気を伝えながら、食や衣を通じて多文化共生の暮らしを提案している。下寺町もまた、都心に残された最も古いまちなみから、歴史や文化の持つ意味を現代に伝えようとしている。どれもまちの暮らしや生活の中で長く育まれてきた立派な地域資源だ。

これら３つの地域のように、固有の資源を掘り起こし、まちへの愛着を育むことも、上町台地からまちを考える会のたいせつな役割だ。今年秋には、それぞれの地区を自転車で回遊する、市民発の観光事業「上町台地・アートツーリズム」の実施も計画している。

これらのまちのつながりは、都心の価値を多様なものとし、効率や機能だけではない、ゆとりとか和み、安心を与えてくれる。大資本主導のまちづくりとは対照的に、生きることの価値（ＱＯＬ）に視点を据えた持続的、循環的なまちづくりが、地域の人々の手によって始まろうとしている。

かつて寺町文化とは日本の共生文化の先駆けであった、と前に述べた。市民社会が成熟しつつあるいま、共生の文化はあらゆる社会において、最重要なもののひとつとなっている。人間の暮らしにとって何が必要で何がたいせつなのか、目線を低くして、まちを日常レベルで見つめ直すことから、「学び」「癒し」「楽しみ」のもうひとつの価値が見えてくる。むろんそれを普遍化するには、社会との長い「対話」も、共生文化のだいじな与件である。

下寺町が育んできた、大阪の寺町文化。目に見える風景から、目に見えない心の風景をどう伝えていくのか。現代の寺町の課題は小さくない。

（あきた　みつひこ／大蓮寺住職・應典院主幹）

北浜・船場における近代建築の魅力と再生

栗本智代

大阪で仕事を続けていると、歴史的な近代建築物の中に案内されることが度重なってくる。当初は「いい雰囲気の場所があるんだなぁ」としか感じなかったのだが、大阪が最も成長を遂げた近代の歩みを知るにつれ、モダニズム精神の象徴である遺産として改めて見直したくなった。建築の専門家ではないため難しいことはわからないながらも1つ1つめぐってみると、さらに興味が深まる。建物内での食事やギャラリーなども楽しみ出すと、時間がいくらあっても足りない。

大阪市における近代建築の解体率は約66%にのぼるという報告があり、この20年ほどで急速に消滅していることがわかっている。(「大阪市都心3区における近代建築の保存・活用に関する研究」平成12年度日本建築学会近畿支部研究報告集より)　確かに今日、近代建築の保存は容易ではなく、建物の老朽化やOA化への対応、賃貸オフィスとしての経営困難など、ソフトハード両面で問題があり、民間の場合は収益を上げながらの保存が課題となる。

しかしビルのオーナーや店主の中で、こだわりと誇りをもって、各々の建築物にかかわっていらっしゃる方も少なくなく、独自の味わいを生み出している。北浜・船場界隈からいくつか、新たな試みとして特長ある事例を紹介する。

北浜レトロ ～創建時のコンセプト"イギリス"へのこだわり～

北浜の旧大阪証券取引所の北向かいにあるビルで、明治45年に竣工、もとは証券取引業者の店舗で、後に入った桂隆産業が倒産後、小山寿一さんが買い取られ「北浜レトロ株式会社」を設立された。

このビルは、イギリス人に習った日本の建築家が、当時のイギリスの建造物を想像して建てられたようだ。現オーナーの小山さんは、幽霊ビルのようになっていたのをもとの姿にもどしてあげたいと、建築時の明治末の雰囲気を大切に、自身の設計・デザインにより補修・改装された。そして、ティールームとアンティーク・雑貨の店舗として再スタートし、時代に迎合せずブームを追いかけない、クラシックなイギリスにこだわった「場」づくりが行われている。

生駒ビルヂング ～コンシェルジュオフィスとしての挑戦～

昭和5年に竣工されたこのビルは、堺筋と平野町の角地に、宗兵蔵の設計で、外観はスクラッチタイルやテラコッタを用いた彫りの深い味わいが特徴である。生駒時計店として用いられてきたが、耐震補強の改修が必要となり、その際、社長の生駒信夫さんは、民間所有のまま維持保存していきたいと、収益性のある新しい業態に再生することを立案された。そして、ベンチャー企業である2つの会社にビルの企画・運営を委託し、新しいビジネスモデルの導入に踏み切った。それが、ホテルの中で仕事ができるような「コンシェルジュオフィス」である。28室の賃貸オフィスは全て椅子・机・多機能電話・インターネット回線が用意されており、1階のレセプションで秘書的業務を行ってくれるという。創立当初の雰囲気を十分に残すこのビルでの新しい試みを見守っていきたい。

旧大中証券ビル ～高級フランス料理店への転身～

高麗橋にある赤レンガのこのビルは、明治45年、辰野・片岡建築事務所によって建てられた。大中証券の移転後、ビルのオーナーが再生方法のコンペを行い、200件の応募の中から「シェ・ワダ」の和田信平シェフの案が採用されて、高級フランス料理店となった。

外観は、年齢を重ねた美しさを大切にするため、外壁のレンガも洗いを1回におさえ、看板やメニューもあまり目立たないように配慮したという。一方内部は、徹底的に手が加えられ、フランスからとりよせたインテリアや暖炉、職人による漆喰塗りの壁、時間を経るにつれて腐食する鏡など、生きている建物としていい皺ができるように工夫されている。老舗である「吉兆」の隣で、長年かけていいものを創っていきたいという和田シェフの思いが反映されている。

ダコタハウス「SCOO」 ～新しい賑わい文化～

西船場にも、比較的小規模の近代建築が数多く集積している。江戸堀に位置する地上4階地下1階のこの建物は、大正末～昭和初期に竣工されたという。オーナーが建て替えを考えていたのだが、不動産コンサルティングの㈱アイディーユーの調査とアドバイスにより、歴史ある建築物として見定め、99年から6年間の定期借家として同社に一棟貸しをすることに。改装のポイントは、オリジナルの質感を保つことと、シンプルな空間づくりであった。「人が使って賑わい、利益をあげることで、不動産価値も上がる」という考えのもと、1階はカフェ、2階から4階はヘアデザインやメイク、アロマエステなどフリーアーティストのサロンとして活用されている。お客様は主に25歳から40歳前後。古いビルという素材を生かした雰囲気が、逆に新鮮でおしゃれだとリピーターが増えている。

昼と夜で全く表情が変わるのも魅力の1つで、特にあたたかい橙色の灯があふれる夜景に立ち止まる人も少なくない。

江戸堀コダマビル ～和洋と新旧の折衷～

昭和10年、岡本工務店（ヴォーリズの作品の施工を主に担当）により竣工された。和洋折衷の外観が印象的なこのビルは、もとは綿布商を営んでいた児玉竹次郎氏の邸宅であり、昭和初期の当時、外

観はもちろん設備を含め最先端の建物であった。創立者の孫にあたる現オーナー児玉竹之助さんは、昭和53年に改装の際、かつての雰囲気を残しながら、一部をテナント仕様とし、また音楽関係の知人が多い（自らもクラリネットを演奏される）ため、音楽専用のスタジオ・レッスンホールを設置された。子供から有名な音楽家まで、隠れ家的に愛用されている。さらに、ご本人の趣味であるイタリアコレクションを収蔵する「イタリア資料室」も開放されている。

外観入り口のルーフは、10年前にミラノの建築家がデザインしたもので、前庭には、解体された日本火災ビルの柱の柱頭部分が移設されている。「入り口や窓枠、ベランダなど1つ1つ修復したい」とあくまで竹次郎時代の姿を意識しつつ、現オーナー自身のこだわりとうまく折衷させて運営されている。今後3階部分で、昭和初期の家庭用品の変遷として、蔵に眠っていた実物の展示をしたいと、企画を練っているのだそうだ。

細野ビル ～アートを通した交流の場へ～

新町4丁目、地下鉄西長堀駅からすぐの角地に建つこのビルは、昭和11年竣工。設計施工を担当した合資会社細野組は、御堂筋の道路工事筆頭請負業者であり芦屋の六麓荘の開発など行った業績をもつが、その本社ビルとしてここが建てられた。施主は、会長の細野濱吉。当時細野組は石材の請負も行っていたので、上質な石材があちこちに使用されている。また元会長室や応接間の机、椅子、家具類は創立当初から変わらず残されている。

現オーナーの細野房雄さんは、このビルを取り壊して建て替えの計画を進めるつもりだったのが、改めて建物を見て、最高の石材や技術、デザインの素晴らしさに感動し、自ら手作業で修復しながら維持保存することにしたという。特に会長室は神聖な場所として考えられており、「濱吉の椅子には誰も座れない」と言われる。

今年の2月から新進気鋭のアーティストによる個展が開催されている。6月6日には「66展」（芦屋の六麓荘にもかけている）と題して66人のアーティストによるイベントが行われ、有名無名の老若男女で賑う場となった。ギャラリーを始めてから、細野ビルをスケッチしにくる若い人も増え、「カジカジ」などファッション雑誌の撮影場所にも使用されるようになった。

細野さんは、「1階と地下のスペース代を自分の給料から引いても、このビルを大好きと言ってくれる人に利用していただいて、偶然の出会いがあるコミュニティの場にしたい」と語っている。

新たなまち文化を育む「場」へ

これらの他に、オーナーの人柄が魅力で入居希望者がたえないというビルの話も何例か聞く。オーナーと店子が話をする機会が積極的に設けられ、あたたかい人間関係が育まれているようだ。オーナー自身の意図でギャラリーがつくられることも少なくない。

概して最近の特徴は、オーナーや経営者の思い入れやメッセージ性の強い「場」が誕生し、新しい価値が付加されていることだといえる。実際、少し前までは、中に入りにくい近代建築も多かったのが、仕様の変更を含めた改装で開かれた場に変わり、一般の人がふらりと、独自の空間を楽しめる機会が少しずつ増えている。その取り組みは、静かなファンによって成熟していくに違いない。

近代建築を活用した特有の「場」が、これからの新たな大阪のまち文化を生み出す源泉となりそうである。

（くりもと ともよ／大阪ガス株式会社エネルギー・文化研究所）



北浜レトロ ティールーム（2F）



旧大中証券ビル（シェワダ）



江戸堀コダマビル



SCOO 1F カフェ「DAKOTA」

市民が選ぶ文化財

京都の近代建築を考える会

2003年2月7日付け讀賣新聞で『京都市の調査結果として、市内に残る近代建築物（明治－戦前）が全国最多ということがわかった』と報じられていた。改めてそのような建物がたくさんあるという京都に魅力と関心を寄せられる方も多いのではないかと思う。しかし一方で、この数年来、多くの近代建築物がポツポツポツと姿を消していて、その都度、無念の思いに陥るのは今なお現実である。私たちは、市民の立場から「市民が選ぶ文化財」を主張することで、近代建築物の存在の意義を多くの方々と考えていきたいと思っている。

2つの保存運動

岡崎の京都府立図書館や烏丸三条の旧第一勧業銀行京都支店（現・みずほ銀行京都中央支店）を利用する人は多いと思う。前者は1997年に外壁一皮を残して解体後に新築され、後者は1999年に全面解体後、外観再現（いわゆるレプリカ）で新築され、今、私たちの目の前にあるが、その建物に目をとどめる人はおられるだろうか。京都府立図書館は武田五一が、旧第一銀行京都支店は辰野金吾が設計したもので、並みいる京都の近代建築物の中の両雄で、悠々と建っていたものだ。京都の歴史ある文化の香り高い建築は姿を消した。多くの方々と保存運動にかかわったが、しかしこれが今の社会の一断面だった。これからそういう建物の大切さを、社会が認知することになるであろうはずだったのに…。

市民団体らしい活動の模索

その後、あちこちで近代建築物の危うい状況が生まれていたが、『会』がその都度、保存問題としてかかわることなどは到底、力量不足でできないことであった。

一方、2つの保存運動を通じて、当たり前ではあるのだが、改めて建物には必ず所有者や管理者がいるということに気付いたのもこの頃だ。日本建築学会編『近代建築総覧』（1980年）によれば、京都市の場合、ほぼ1/3が民間所有で、その他は公有で京都府や市、京都大学（国）のものである。

解体という危うさを意識しつつも、公有はさておき、市民としては多くの民間の近代建築所有者等が、一体どのような状況下にあるのかを、もっと知らないといけないのではないかということから、近代建築所有者等へのアンケート調査やヒアリング活動が取り組まれた。00年から02年にかけてのことである。

そして前後するが、1997年4月に催された当会の第3回総会で、京都工芸繊維大学の中川理先生に講演していただいた時、「アメリカの登録文化財はとても概念が広く考えられていて、みなが大切だと思えば文化財だという考え方なのである。例えば、そこの地域で育った人たちは子供の時から、そこの映画館に通って、あの映画館がなくなったら私たちはさびしい、そう思うから登録するというように」というお話が、会員の心のどこかにしっかりと根付いていたこともあった。そういうことで、それなりの時間をかけて、会員が専門家の援助を得ながら近代建築を見たり、多くの方々からいろいろと学んできたことが「市民が選ぶ文化財」に結実したようである。

「市民が選ぶ文化財」とは

まずは会員の中から地域にあり続けてきた大切な素敵な建物を公表しようということである。

「市民が選ぶ文化財」選定要領

■趣旨
近年京都においても多くの近代建築物がその姿を消し、建築文化やまちの景観が失われている状況がある。権威に依拠せず、市民が自発的に考え、様々な見極める力を育て合いながら、自ら意思表示しようとするものである。

■意義及び目的
この要領は、京都市内にあり続けてきた近代建築物で、市民生活において重要であると考えられるものについて、これらを明らかにし、市民が認識を高め合う中で、身近かに建築文化を享受できる豊かな生活環境の維持継続に寄与することを目的とする。

■定義
この要領においてそれぞれ各号に定めるところによる。
①「市民が選ぶ文化財」市民的価値を有する建造物で市民が選ぶ文化財
②「市民」職業等をこえて日々生活をおくる人たち
③「近代建築物」明治期以降に建てられた建造物

■選定
「京都の近代建築を考える会」が京都市内に存する近代建築物のうち、市民的価値を有するものを「市民が選ぶ文化財」に選定する。

■選定の基準
市民的価値を有するものとは次の①から③までのいずれにも該当するものをいう。
①「愛着を覚える」
②「敬意を表する」
③「建築力が迫ってくる」

■所有者等との関連
選定をしようとするときは、あらかじめ、所有者等の同意を得る。

■公共文化財等との関連
文化財保護法及び京都府・市文化財保護条例の規定により文化財に指定されたものを除く。

■標識の贈呈
『会』が交付する標識を所有者等へ贈呈する。

■選考委員会の設置
『会』に所属する会員において委員を構成する。

市民的価値があるのが「市民が選ぶ文化財」

では、この要領の要である市民的価値とはどういうものか。私たちはその基準に、次の３つを掲げた。つまり①愛着を覚える②敬意を表する③建築力が迫ってくる―この３つが備わっている建物こそが市民的価値のある建物というわけである。

さて、１つ目の「愛着を覚える」は、そこにあり続けてきた建物に、日々生活を営む人々が馴染んで、それぞれの素朴な感情を重ねることである。その感情は一歩踏み込めば「幼少や青春の思い出や記憶と結び付いて」「親が生きた時代への親近感」「モダンへの一日本人としての郷愁」「ロマンチックなそしてアンティークな」「潤いや安らぎ」「積層する時代を実感する証として」「まさに歴史の表出」「まちの景観をつくっている」「手を下さなければ滅びゆくものの美しさを感じる」「落ち着きや静けさ」「明治の人の気質というかゴツゴツしたやる気というか勢いを感じさせる」といった各人それぞれのものでありながら、実は多くの人の間で共有しているのではないか。

２つ目の「敬意を表する」は、何に敬意を表するかということであるが、まずそこにあり続けてきた建物にである。同時に、かつてその時代に建物をつくった建築家、施工者や職人が存在していたことに、そして時を経て様々な時期に、改装等に関わった関係者が存在していたことに、さらにその建物を現在に至るまで心を込めて維持管理してきた所有者や管理者が存在しているということにである。近代建築所有者等ヒアリングに応じて下さった方々からは共通して、このような建物を建てたり、あるいは入手した彼らの先人への尊敬の気持ちがまず語られ、同時に必ずその建物への愛情こもる言葉が聞かれた。私たちは今それらを丸ごと享受しているとの念を強くしている。

３つ目の「建築力が迫ってくる」は、その建物そのものに市民に愛着をいだかせる独特の雰囲気が漂っているということである。私たちは、建物独特の雰囲気は「建物全体の姿」「建物外部や内部の空間」「デザイン」「ディテール」「装飾」「レリーフ・テラコッタ」「質感」「素材」「色」「過去のしかも当時の再先端の技術」「職人技」「建築家の意気込み・思い入れ」「重厚さ」「豊かな陰影」「立体感」等に起因しているのではないかと感じている。簡単にいえば、ある建物について、どうもその建物の細部の装飾が気になって仕方がないというようなことがあれば、それが「建築力が迫ってくる」建物であるということである。

＊

なお、「愛着」と「建築力」については、1995年に当会が発足した直後、会員を対象に実施したアンケート《京都の近代建築と私》をベースにしているが、今回それを生かすことができて嬉しく思っている。

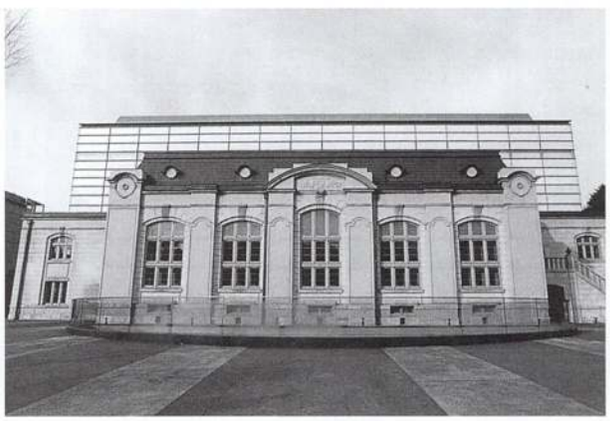
日々の生活の中で、絵をみたり、音楽を聴いて楽しむように、地域にあり続けてきた建物に、市民的価値を見いだす楽しみがこの「市民が選ぶ文化財」である。

前述の要領はこの６月に開催された第９回総会において了承を経たばかりで、年度内に第１号を選定することができれば上々だ。

現在、「会」には多様な職業等に従事する50余名の老若男女が参加しているが、きっとユニークな発見があるだろう。明るい気分で“これから”だ。（**文責／山添みどり**）



京都大学人文科学研究所
附属漢字情報研究センター
設計：武田五一・東畑謙三
竣工：昭和５年



新・京都府立図書館
原設計：武田五一
竣工：明治42年
改築設計：㈱日本設計
竣工：平成12年

近代建築物を維持管理すること、活用すること、そして、未来へ送り届けること。そこには何と申しましても見識という言葉がついてまわるようです。

「建築と社会」誌

特集一覧●1979~2000

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6348-0635、FAX 06-6348-0634）まで。販売価格は1200円（送料・消費税含）。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1979 vol.60	●転換期の再開発＊	●大阪南港 ポートタウン ＊	●商業空間＊	●コンクリートのひびわれ	●日影規則＊	●ホテル建築と情報システム	●農村施設の変貌＊	●建築の終局強度の検討	●庄内のまちづくり＊	●80年代のインテリア＊	●第26回青年技術者＊	●建設業の労務事情＊
1980 vol.61	●80年代の都市と建築―まちづくりの歴史と展望	●今後の省エネルギーの趨勢 ●建築金物	●最近の銀行建築 ●安井建築設計事務所作品集	●住宅の耐久性＊	●建築行政と法規＊	●最近の防水工法	●都市景観とアメニティ＊	●屋内体育施設の設備＊	●水ぎわのまちづくり	●今後の外装吹付仕上材＊	●第27回青年技術者 ●転機にたつマンション・集合住宅	●これからの建築設計と新耐震設計法＊
1981 vol.62	●職能論＊	●中国の論文―北京の都市計画＊	●ポートピア'81＊	●台所まわりの計画と設備＊	●シーリング材の知識＊	●災害と法―安全な環境をめざして＊	●都市住宅―住まい手からの発想＊	●建築物と風―デザイナーのために ●日建設計作品集＊	●住宅・都市整備公団―関西における都市整備を中心とした新公団の役割＊	●間仕切壁の性能評価＊	●第28回青年技術者＊	●障害者の暮らしやすい環境と設備
1982 vol.63	●新たな商業空間の展開＊	●省エネルギーと開口部＊	●医療施設―地域医療と設備計画＊	●近畿の地盤と地質＊	●都市景観―まちなみ美観への誘い＊	●大阪市庁舎（第1期）＊	●ホール建築と音＊	●大スパン構造＊	●昭和設計作品集＊	●絵本にみるすまいとまちづくり ●オー・エム・ホテル日航ビル	●第29回青年技術者 ●地方の庁舎建築＊	●風土・空気と人間＊
1983 vol.64	●関西の建築文化を考える	●マイコンの建築への利用	●多様化する運動施設＊	●建築と品質管理	●計画におけるコミュニケーションとプレゼンテーション	●大阪駅とターミナルビル	●維持管理と設備更新	●東海の将来と文化を考える	●オフィス・インテリアの変革	●プレストレスト・鉄筋・コンクリート構造	●第30回青年技術者 ●大阪城国際文化スポーツホール＊	●集合住宅と生活音
1984 vol.65	●21世紀への関西―魅力あるまちづくりを問う	●関西の超高層ビル＊	●ビルのリフレッシュ―内外装補修技術の現状と見通し―＊	●建設産業とロボット開発＊	●住環境と法制度	●まちの活性化と商業空間 ●京都駅南口再開発ビル＊	●消防設備のポイント	●みどりとそれをとりまく人々＊	●高齢化社会と生活空間	●床の構工法	●第31回青年技術者 ●ディテールの思想	●光応用システムと建築
1985 vol.66	●大阪湾物語＊	●東海の現在と近未来	●自由様式への道―建築家安井武雄 ●建築物の基礎を考える	●情報化をめぐる建築・都市事情	●ホール―それが生みだす文化―	●建物の表情―最近の外壁材料	●大阪国際見本市新会場	●建築と水の演出 ●神戸研究学園都市	●都市と健康・スポーツ	●接合―人体と建築にみる― ●日建設計作品＊	●村野藤吾の一断章 ●伊勢湾をめぐる東海	●第32回青年技術者
1986 vol.67	●これからの住空間―都市型集合住宅にみる	●屋根―そのデザインと素材	●現代デザインーポストモダニズム10年 ●これからの防水工法	●インテリジェントビルの建築・設備計画	●自治体営繕と公共建築	●建築防災と法 ●大阪市庁舎（第2期）	●21世紀の住宅と設備	●開発―その創造的仕掛けの鍵をもとめて― ●ツイン21	●CAD―その応用と展開	●オフィス空間の構成	●第33回青年技術者	●インテリア・イクステンションとリニューアル
1987 vol.68	●入浴物語	●腐食	●創立70周年記念号	●躍動する東海へ	●貯蔵・保管施設 ●大阪府立体育会館	●室内の仕上床	●駅	●行政建築家の可能性	●シティホテルの設備	●宝塚の街づくり＊	●建物と町並みの接点 ●昭和設計作品集	●第34回青年技術者
1988 vol.69	●ホテル物語	●軟弱地盤と基礎 ●文化と伝統―東海からの報告	●設備におけるLCCとリフレッシュ ●東畑建築事務所作品集	●建物の外装リフレッシュ＊	●都心居住	●中国地方の展望とひろしまのまちなみ	●21世紀への照明＊	●制振＊	●超高層住宅を考える	●集合住宅のリフレッシュ＊ ●大阪府営善	●第35回青年技術者 ●800号記念＊	●讀賣テレビ
1989 vol.70	●夢をのせる輸送設備	●リゾート事情 ●竹中工務店創立90周年記念	●色の復権 ●東海の新建築と伝統技術＊	●省力化のための材料・工法	●まちづくりと法	●博覧会とまちづくり	●都市環境創造と設備I	●建築とアート	●構造の省力化 ●鹿島建設大阪支店建築設計部作品集	●都市環境創造と設備II ●ユーザー参加のハウジング	●第36回青年技術者	●最近の博覧会パビリオン
1990 vol.71	●商品化住宅のデザイン＊	●ニュータウン・ルネサンス	●東海の都市景観 ●佐賀市文化会館＊	●スケール感	●プレハブ住宅技術の現在と未来	●国際花と緑の博覧会	●建築家のための設備知識―中規模オフィスビルによるケーススタディー	●高強度化―設計の多様化をめざして―＊	●やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	●都市のナイス・プレイス ●兵庫県営繕の歩み	●第37回青年技術者 ●和歌山県の展望と景観＊	●高級感―建物の顔：感性の時代を迎えての外装材
1991 vol.72	●新しい都市空間づくり―I― ●オフィス・プレジャー―新しい都市空間づくりII― ●建築の風景	●東海支部復活30周年記念	●大阪東京海上ビルディング	●今、京都 ●建築家のための設備知識―複合商業ビルによるケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設局営繕部	●一般号＊	●建築をめぐるトラブルとその解決 ●建設現場のイメージアップ作戦	●空間のアイデンティティ ●きんでん写真集 ●大建設計40周年	●自治体住宅政策への提言 ●大林組創業100年記念	●建築と土木―構造技術の世界― ●第38回青年技術者	●スリムでタフなコンクリート ●21世紀の住まいを考えるシンポジウム
1992 vol.73	●夢物語―人がかわる、まちがかわる―	●こだわりのインテリア ●近畿の郵政建築15年の歩み	●建築とデザイン―東海支部―	●建築家のための設備知識―集合高層住宅の設備システム―	●地球環境時代の建築	●街創り、住まい創り―住宅・都市整備公団関西支社10周年―	●木構造を使ってみませんか―集成材による構造―＊	●接着―建築分野への限りなき可能性	●中国地方の町並みと建築家の「語り、夢、作品」＊	●屋台一仮設の魅力に学ぶ― ●ハウジングのメインストリームを探る	●いま建築教育に何が期待されているか	●京のかたちと色
1993 vol.74	●第39回青年技術者 ●東畑建築事務所創立60周年記念作品集	●大阪府営繕	●東海の美術館・博物館	●市民劇場の舞台設備	●環境―限りある自然と建築とのかかわり	●都市のスカイライン	●映画の中のインテリア ●けいはんなプラザ・住友ホール	●建築の再生―構造技術の役割― ●大阪市営繕	●国際的パートナーシップの可能性	●福祉のまちづくり	●都市型住宅再考	●第40回青年技術者 ●環境一人にやさしい空間創造をめざして
1994 vol.75	●コピー文化の新時代 ●広島の街創りアジア競技大会	●九州のインスタレーションと貌	●伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈＊	●建築のエネルギーシステム	●明日に向かって―会員作品＊	●いま、医療施設は	●住空間における居どころへの視点	●まちなかの看板 ●竹中工務店の集合住宅	●水と建築 ●日本建築総合試験所	●建築設備のCGシミュレーション ●村野、森建築事務所	●構造美―建築の中の美 ●集合住宅団地リニューアル	●第41回青年技術者 ●関西国際空港
1995 vol.76	●光がつくる風合の世界＊	●音―騒音から操音/創音へ	●飛騨・美濃―まちの活性化と地方文化＊	●トイレから見た都市文化	●トイレ空間	●接合 ●コスモタワー	●ユニバーサルデザインとは	●私の空間作法―会員作品	●新しい「都市・建築」の視点＊	●建築構造と社会の接点 ●日建設計＊	●ライフラインと建築設備＊	●第42回青年技術者 ●滋賀県建築課
1996 vol.77	●阪神大震災から学ぶ＊	●大阪府住宅供給公社創立30周年記念＊	●遠江―その地方振興と文化＊	●立体駐車場設備 ●大建設計	●災害！非常時に生きる法体系 ●OAPタワーズ	●いま、プールがおもしろい	●住まいの未来像	●マルチメディアがつくる世界	●キーコンセプトの新時代	●最新の大規模スポーツ競技施設の設備	●私の空間作法'96 ●九州の元気 ●りんくうの3作品	●第43回青年技術者 ●近畿地建営繕部
1997 vol.78	●建築のロングライフ化をめざして	●鉄ものがたり＊	●東海支部会員作品 ●金沢・能登―風土・文化とまちなみ・建築＊	●創立80周年記念／建築と私と社会―80人の眼―＊	●木造建築物の伝統技術とその将来	●住む空間の復興―法・制度の運用と新たな展開へ― ●住都公団関西支社	●素材の不思議 ●大阪ドーム	●新エネルギー ●住宅・都市整備公団改革への提言	●クロスワード都市OSAKA＊	●モザイク都市のほたかたち ●昭和設計40周年	●私の空間作法―会員作品―	●第44回青年技術者 ●京都駅ビル
1998 vol.79	●新しいまちづくりの予感 ●東畑建築事務所創立65周年	●Concrete ●九州とわたし、そして建築	●東海支部会員作品 ●信州―諏訪とその周辺―	●街並みの演出―最近の外構材料	●生活環境の安全・安心	●地球環境保全と建築	●心と体を元気にするインテリア	●建築設備―ビルメンテナンスの立場から	●建築への証言'98―21世紀に向けて	●ゆれをとめる―たえる技術からかわす技術へ	●私の空間作法 ●2001年の医療施設	●第45回青年技術者 ●駅とともに歩んだJR西日本の12年
1999 vol.80	●"らしさ"のデザイン ●建築を綾どる小粋なモノの仕掛人	●大阪市都市整備局	●東海支部会員作品'99 ●北信濃―街並み修景と地域文化の再構築	●都市のパブリック	●関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる	●大阪城天守閣平成の大改修	●改正建築基準法―まちづくり・すまいづくりへの展開―	●私の目でみた環境問題	●アーバンインテリア―都市空間としてのインテリア	●木とともに	●私の空間作法	●第46回青年技術者
2000 vol.81	●21世紀のデザインの動向を見る ●安井建築設計事務所創業75周年	●中国支部―しまなみ海道と中国地方の街づくり―	●東海支部会員作品2000 ●越中・富山―地域文化の醸興と新たな施設づくりの流れ	●こころを癒す環境デザイン	●測る―測定方法と測定結果が意味するもの―	●スケルトン&インフィル	●改正建築基準法―パートII―	●100年後へのメッセージ ●日建設計創業100周年	●来世紀に引き継ぐ―わざ、もの、こころ―	●時間	●私の空間作法―会員作品― ●21世紀の高齢者の居住環境	●第47回青年技術者

＊は欠号

大阪市の日影条例

浅野志昌
大阪市住宅局建築指導部建築企画課

制定の背景

大阪市では、建築基準法に基づく日影による中高層の建築物の高さの制限については、これまで「大阪府建築基準法施行条例」により、府内の統一した基準で行ってきた。しかし、近年、産業構造の変化に伴い、日影規制対象区域外である準工業地域で、工場跡地にマンションの建設が進行してきていること等から、建築基準法の改正の内容を踏まえ、本市の実情にあった規制を新たに検討する必要があると考えた。

そこで、良好な居住環境の確保のための、大阪市の日影規制のあり方について、平成14年８月に大阪市建築審査会に諮問した。

大阪市建築審査会からの答申

大阪市建築審査会で、専門調査員を置き規制に伴う住宅供給や既存建築物などへの影響などを総合的に検証しつつ検討が進められ、専門調査員による４回の検討会と１回の現地視察が実施され、さらに大阪市建築審査会においても３回にわたり審議が行われ、平成14年12月に答申を受けた。

答申の概要は、次のとおりである。

●日影規制の基本的な考え方

- 住環境の保護を図るべき地域では、日影規制の対象区域として指定することにより良好な居住環境を確保する。
- 土地の高度利用の促進を前提とした概ねJR環状線の内側の都心居住型市街地と、都心商業地域に隣接する市街地で土地の高度利用促進を前提とした複合機能型市街地や、個別の建て替え更新を促進し防災性能を高める必要のある密集市街地では、それぞれに個性ある良好な環境形成をめざす。

●日影規制の指定方針

- 現状の日影規制指定区域については、従来どおりの日影規制を維持すべきである。
- 住居系地域へ移行しつつある地域については、良好な居住環境整備の観点から新たに日影規制の対象区域として指定すべきである。ただし、現状では住宅と工場とが混在していること、３階建ての戸建て住宅が増加傾向にあること、住宅と一定の生産機能や生活関連施設との複合の可能性があることなどから、日影規制によって担保すべき居住環境の水準が住居系地域とは同等ではないものと考えられる。
- 複合機能型市街地や密集市街地などの地域では、日影規制の対象区域として指定することには慎重を期する必要がある。ただし、地域の日照への影響が大きい大規模建築物については、一定の日照を確保する仕組みを導入すべきである。
- 特定の土地利用を促進すべき地域（商業活動の活性化が重視される近隣商業地域、生産・物流等、港湾機能の増進を図るべき臨港地区等の臨海部）においては、日影規制の対象区域として指定しないことが望ましい。

新たな日影規制

大阪市では、大阪市建築審査会からの答申を受け、さらに、答申を踏まえた「大阪市の日影規制の基本方針」についてのパブリックコメントを実施して、市民の意見を聞いた上で、平成15年３月に大阪市建築基準法施行条例の改正を行った。従来の大阪府建築基準法施行条例による対象区域に加え、新たに咲洲、舞洲、夢洲などの埋立区域を除く準工業地域（指定容積率200%）にも規制を適用する大阪市の実情に合った独自の規制を平成15年３月に制定した。施行は平成15年10月１日からとなる。（**上表**）

対象区域		規制される建物	日影測定面の高さ	規制される日影時間	
用途地域	指定容積率			敷地境界線から５ｍを超え10ｍ以内の範囲	敷地境界線から10ｍを超える範囲
第１種中高層住居専用地域	200％	高さ10ｍを超える建物	4ｍ	4時間以上	2.5時間以上
	300％			5時間以上	3時間以上
第２種中高層住居専用地域	200％			4時間以上	2.5時間以上
	300％			5時間以上	3時間以上
第１種住居地域	200％			5時間以上	3時間以上
第２種住居地域					
準住居地域					
準工業地域（公有水面埋立法に基づく埋立区域を除く）	200％	高さ10ｍを超える建物	6.5ｍ	5時間以上	3時間以上

ただし、次の地域は除く。
1）都市計画法第８条第１項第９号の臨港地区
2）都市計画法第12条の５第３項の再開発等促進区

＊ 新規の対象区域とその規制内容

新たに追加される準工業地域の指定容積率200%の区域における規制内容は、測定面6.5ｍにおいて敷地境界線から５ｍを超え10ｍ以内の範囲で５時間以上、敷地境界線から10ｍを超える範囲で３時間以上日影となる部分を生じさせてはならないという内容である。

大規模建築物への対応

地域の日照への影響が大きい大規模建築物については、一定の日照を確保する仕組みを導入すべきであるとの答申を踏まえ、大規模建築物事前協議制度※を活用し、平成15年４月より第１種住居地域、第２種住居地域、準住居地域、埋立区域を除く準工業地域の指定容積率300%の区域内において、対象建築物のうち高さが20ｍを超えるものについて、敷地境界線を超えて終日日影を生じさせないように指導している。

また、条例が施行されるまでの間に申請される建築物ついても、改正の規制内容に適合するように指導している。

※ 「大規模建築物事前協議制度」とは
「延床面積5,000㎡かつ階数６階以上」等の新築建物の建設計画について、大阪市と事業者が事前に協議する制度

おわりに

今回、大阪市において、産業構造の変化に伴い、準工業地域の土地利用転換が進みつつあることを踏まえ、大阪市の実情にあった新たな日影規制を定めた。

今後とも、新たな日影規制や大規模建築物事前協議制度を活用し、より良い住環境の確保に向けて取り組んでいきたい。

（あさの　ゆきまさ）

デザイナーと構造設計者のコラボレーションって？ 美について考える（その1）

大氏正嗣
㈱デザイン・構造研究所

先日から、ある公園においていくつかの造形物のプロジェクトに携わった。ただし、普通と少し異なるのは、デザインそのものも私が行ったということである。これらは、建築物ではなく工作物であるが、一定の機能性を有しており、またランドスケープとの関連性を要求される。そこでは、直線的な要素はどちらかと言えば異色な存在であり、巨大なマスは必要とされない。少なくとも通常の建築物に用いる知識はあまり役には立たず、場合によってはネガティブな働きをしてしまうことすらある。

しかし、同時に建築における数多くの制約から解き放たれた構造体は、新しい可能性を目指して多彩な展開を可能とすることに気がついた。建築というフィールドで培われた考え方が、違った場所（この場合は公園だが）で新しいエネルギーを得て、そしておそらく再び建築に帰っていく。こうした流れを自分なりにどう咀嚼していくことができるのか、小さなプロジェクトを通じて実感した素直な気持ちである。

用・強・美

計画案を進める上で、「用・強・美」という何度も聞き慣れた言葉が思い起こされる。そういえば、自分が携わった建築のプロジェクトにおいて、この三者のバランスは果たしてどうだったのだろうか？　もちろん、この三者のウエイト（重み付け）は必ずしも同等ではない。これは、建築が有する社会性故に施設の性質や目的等の与条件が異なればその重要性が変化しうるためである。

特に、近年では経済性（これも社会要素と考えられるが）に大きく左右され、三者のバランスを鑑みることすらなかなか容易ではない。声高に、建築の持つ文化性のみを強調するつもりはない。ただ、私たちが持っている建築的固定観念を打破することができれば、少なくとも今抱いている所在不明の閉塞感に対する何らかの解決策を生み出せると考えるのは楽観的過ぎるであろうか。

□

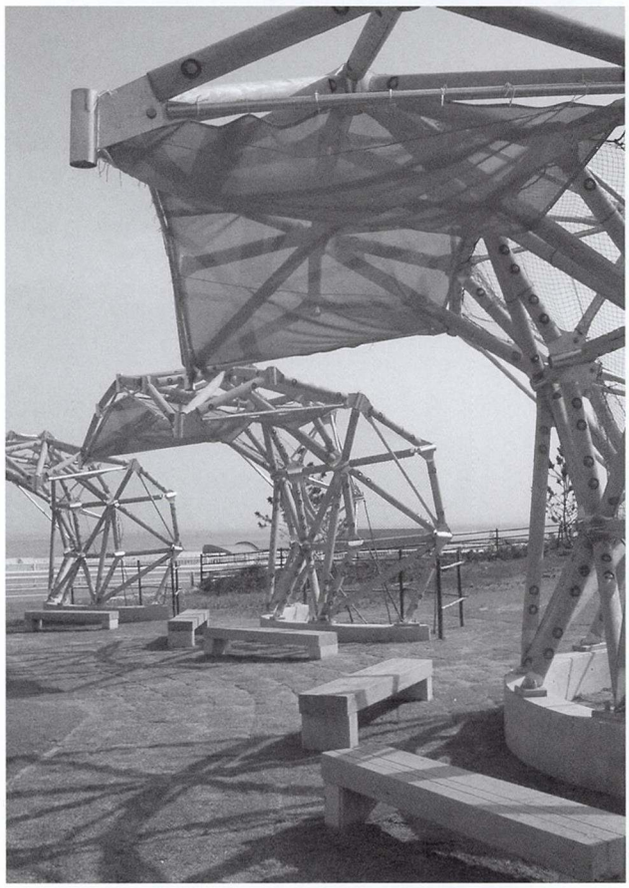
「用・強・美」という考え方はもちろん建築全体についての問題ではなく、構造設計という場面においても重要なポイントである。構造設計であるから「強」を取り扱う機会が多いことは当然であるが、現実には設計時間の大部分をそれを満足させることに費やしているのが実状である。実際、「用」や「美」に対して構造的にどれだけの配慮ができているのかと聞かれたならば、必ずしも盤石の自信を持って答えられるわけではない。

しかし、当たり前のことではあるが建築には様々な用途があり、それに応じて構造設計者といえども「用」や「美」への十分な知識を有し、的確な配慮をすることは必要なことに違いない。なぜなら、建築という最終目的は個々の専門（例えば、デザイン・構造・設備等）が個別に最高の結果を出したとしても、建築全体で考えた場合に必ずしも最大値をとるとは限らないからだ。

わかっていながらも、それがなかなか実現できない苛立ちが、「コラボレーション」という美辞麗句の形を取って多用されている。しかし、コラボレーションすることは当たり前じゃないのか？　なぜなら、私たちの最終目的が建築であり、まちであり、地域であり、社会なのだから。

□



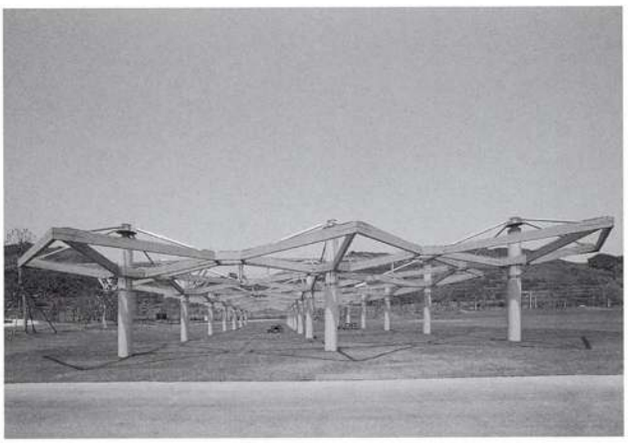


国営明石海峡公園の海沿いの無料開放地域にあるシェルパーゴラ

この上屋は、その背後に蔓性の樹木を植えてある。10年も経つ頃には、その樹木がこのシェルの上を覆い尽くす。その時に、このシェルは役割を終える。期限付きの構造物である。

足下は5点のみで支持されており、その支持点を曲線状に配置している。また、シェルは3つの異なる片持ち曲線により構成されており、その微妙な曲率の違いがシェルを安定させるギリギリの状態を作り出している。

専門家が自分の専門に閉じこもって、専門的立場からのみ発言をすることは非常に容易である。しかしながら、それは必ずしも目指すべき最終形を共通の認識としているとは言い難い。それどころか、ひょっとしたら全く違う姿を頭の中に描いているのではないか。お互いに知っているつもりでありながら、実は相手のことを何もわかっていない。ホラー映画のような結末を導くことのないように願うばかりである。







淡路島の国営明石海峡公園内にあるイベント用パーゴラ

規則正しい幾何学模様が織りなす連続性の美は、私たちに凛とした感情と同時に何かほっとする感覚も与えてくれる。
実は、この架構の木材は柱とは接していない。つながっているのは唯一柱の頂点のみである。頂点から吊り下げられた大きな袴は、隣の袴と支え合っている。
一つの柱と木架構では不安定に揺れてしまうこの形状が、複数個連続することにより、安定した形状へと変化する。

もちろん、立場が違えば考え方が異なるのは当然という意見はあるだろう。それを否定するつもりはない。が、目指すべき目標（あるいは目的）を少なくとも一つの建築というプロジェクトにおいて近づけることすらできないのなら、私たちは何を目的として仕事をしているのかということになってしまう。

□

「用・強・美」は、個別の存在ではあり得ない。これは、デザイナーも、構造設計者も、設備設計者も施工者も、すべての建築に携わる人々が自分の専門をバックボーンに置きながら考え続けなければならない。そして、その言葉は常に私の頭にも響いている。

美は目的

小さな公園の造形物について計画を進めながら、何度も考えていたことに「美」についてのスタンスがある。それは、構造設計者としての立場を持ちながらも、建築の「美」をどのように捉え、それを実現するための手法を考案する土台となる部分。自分が考える「美」について、何らかの形でまとめることが必要であるはずだ。

□

まず最初に、「美」とは何なのか？　「美」を巡る議論は、当然建築の世界のことだけではなく、「美学」として学問的な研究がなされている。私は、「美学」を修めたものではないため、十分な知識を有しているわけではないし、これから述べる内容も学術的には必ずしも適切でないかもしれない。こうした点については、ご批判を甘んじてお受けする。しかし、最終的に知りたいのは「美が何であるか？」ということではなく、「美が私たちになぜ必要なのか？」、そして「美と建築の関係をどう認識すべきか？」という点である。今回はそこまで思いを巡らせる準備が私にはなかったが、構造設計において「美」は結果なのか、あるいは目的なのかという点については考えてみたい。

結論から言えば、私はやはり「美」は構造設計においても主体的に考えるべき目的であると思う。それは、考察を重ねるまでもないことかもしれない。しかし、そこに至る過程を再認識することは意味がある。「美」をデザイン的スタディの結果として受動的に認識しサポートするだけであれば、構造設計者とはいえ建築に携わる専門家としては、はなはだ不十分ではないだろうか。「美」は目的として考えるだけの価値のあるものなのだ。

□

ところで、「美」に思索を巡らす上ではまず最初に、私たちが何を美しいと感じるかを考えなければならない。しかし、現実には私たちは自己の明確な判断基準を持ち、対象物をその基準に従い「美しい」と定めるわけではない。例えば、野に咲く一輪の小さな花を美しいと愛でる場合もあれば、大きな花束を美しいと感じる場合もある。あるいは、人の見事な振る舞いに美しさを感じることもあれば、優しい心そのものに美しさを見出すこともあるだろうし、桜の花の散り際にも「美」を見出し、抽象画の中にも「美」を見出すこともある。その判断過程に、統一された基準を見出すことは難しい。

しかも、「美」の判断は個人個人により異なる。ある者が美しいと感じる物も、他の者は全くそう感じない場合がある。すなわち、「美」は主観により認められる存在である。しかし、一方で誰もが美しいと感じる何かがあるような気がしてならない。「美」は個の趣向でありながらも、個を貫く普遍的な「美」というものも存在するのではないかという希望を誰もが持ち続けている。しかし、それすらも社会的な規範の中で社会通念としての「美」として認識されているのではないだろうか。真実がどこになるのかは、誰にもわからないのだろうが。

（おおうじ　まさし）

冷媒への取り組みと将来

片岡修身
ダイキン工業㈱地球環境室

冷媒と環境問題

フロン冷媒は温暖化問題とオゾン層問題という大きな環境問題を抱えており、各国で各種の規制を受けている。しかし、冷媒がエアコンや冷蔵庫の中で作動媒体として実際に働いている間は環境問題を起こすことはなく、廃棄の際の回収や装置内への封入が不完全なために大気中へ漏洩することで、環境問題を起こす。

冷媒が漏洩すると冷却能力が低下しクレームにつながるのでメーカーにとって冷媒漏洩は大きな品質問題であり、かなりの漏洩防止の努力はなされてきている。しかし、それでもある程度の漏洩は生じる。漏洩の原因を調べると、現地工事の不良によるケースや工場でのろう付けの仕上がりが十分ではない製品に現地で荷重をかけて漏洩を生じたケース、銅材の圧延の際に混入したと思われる銅管素材中の異物が腐食して漏洩したケースなどがあり、メーカーからの出荷時点では漏洩していないものが大半である。また製品廃棄の際には冷媒回収が行われているが、残っている冷媒を100%回収することは時間の制約で困難であり、また家庭用エアコンのようにリサイクル工場で冷媒を回収するものについては、工場に廃棄製品が到着するまでに漏洩する冷媒もある。さらにはエアコンの長期使用により腐食が生じ、冷媒が漏洩して能力が出なくなることも、製品を廃棄する理由の一つであり、このような場合には冷媒の回収は不可能である。このため、冷媒漏洩の完全な防止は不可能に近く、使用することだけでは環境影響を与えないフロン系冷媒であるが、環境規制を避けることは難しい。

環境規制と欧州の先進性

フロン系冷媒は種々の規制を受けることになるが、日本の場合は冷媒問題といった地球環境問題に対しては、国際協調という観点から規制が制定されることが多い。一方、欧州は環境先進性を政策として掲げており、環境規制では先行することが多い。このため、国内エアコンメーカーも欧州の冷媒規制の動向には、単に輸出市場という観点からだけではなく、環境規制の先進地域として神経を尖らせている。

オゾン層破壊係数の高いCFC (Chloro-Fluoro-Carbon)はすでに先進国では全廃されており、カーエアコンや冷蔵庫で主に使われていたCFC12などの生産が廃止された。CFCに比べればわずかではあるがオゾン層問題が残る。HCFC (Hydro -Chloro-Fluoro-Carbon)についても、図1に示すように来年からモントリオール議定書による本格的な削減が開始される。これに伴い、エアコンで主に使用されているHCFC22が来年向けの新規製品から国内ではほぼ全廃される。日本では自主的な取り組みとしてHCFCは新規製品から全廃されるが、EUではすでに新規製品向けHCFCの全廃規制を多くの国で実施済みであり、またEU全体としても、冷媒として最後まで容認されてきたヒートポンプ用途に関しても、今年いっぱいで新規製品には使用禁止となる。

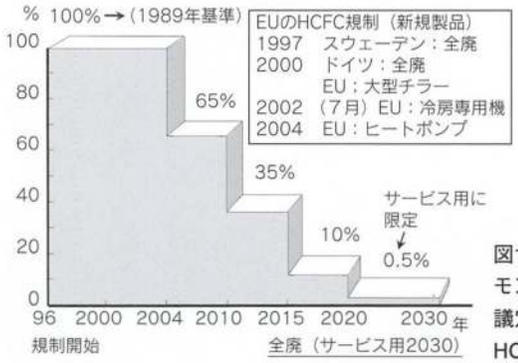


図1 モントリオール議定書とEUのHCFC規制

CFCやHCFCの代替冷媒としてはオゾン層を破壊しないHFC (Hydro-Fluoro-Carbon) 冷媒が採用されることが多いが、デンマークをはじめオーストリアやスイスなどではHFCに対しても規制がすでに制定されている。しかし、現在EU政府内でもHFCに対する規制を検討中であり、これが成立すると各国別の規制は非関税障壁と見なされるために効力を失うので、このEU全体の規制が非常に大きな意味を持つ。現在の非公開ドラフトでは、カーエアコンに関してはGWP150を超える冷媒について具体的な全廃スケジュールが盛り込まれている。一方、定置式エアコンに関しては漏洩検査義務や充塡記録の作成義務などが盛り込まれているが、全廃については触れられていない。

自然冷媒採用の実態

冷媒漏洩による温暖化を避けるには、GWPの低い自然冷媒の採用は効果的である。一般に欧州では自然冷媒が多く受け入れられているという印象が強いが、現実には中大型の空調用途での自然冷媒の実用化は多くはなく、空調製品の展示会などでは自然冷媒の製品展示を探しだすのは容易ではない。一方、冷媒充塡量の少ない冷蔵庫ではイソブタンが冷媒の主流となっており、国内でも本格的に採用が始まっている。また大型冷凍冷蔵設備では歴史的にアンモニアが使用されてきた背景もあり、アンモニアの採用が進んでいる。一方、

表1 従来冷媒と将来冷媒

			冷媒物性							
			凝縮圧力 MPa	体積流量 R22比	理論COP R22比	ODP	GWP	大気中寿命 年	燃焼性	毒性
CFC12		単体	1.08	62	103	1.0	10600	100	不燃	低
HCFC22		単体	1.73	100	100	0.05	1700	11.9	不燃	低
HFC	HFC134a	単体	1.16	63	101	0	1300	13.8	不燃	低
	HFC125	単体	2.26	96	81	0	3400	29	不燃	低
	HFC407C	非共沸	1.86	102	99	0	1650	−	不燃	低
	HFC410A	疑似共沸	2.72	141	92	0	1980	−	不燃	低
	HFC32	単体	2.80	160	97	0	550	5	弱燃	低
	HFC152a	単体	1.04	61	105	0	120	1.4	強燃？	低
自然冷媒	アンモニア	単体	1.78	116	106	0	0	0	弱燃	高
	イソブタン	単体	0.60	34	102	0	3以下	−	強燃	低
	プロパン	単体	1.53	83	98	0	3以下	−	強燃	低
	プロピレン	単体	1.85	101	98	0	3以下	−	強燃	低
	CO_2	単体	10	243	41	0	1	120	不燃	低

自動車メーカーはカーエアコン用途に二酸化炭素を冷媒とする機器の開発を進めている。カーエアコン用途にも当初は炭化水素を採用する検討がなされていたが、開発途上で事故が生じたため、開発は中止され二酸化炭素の検討が開始された。

冷媒の燃焼性や毒性による危険性は冷媒量の3～4乗に比例すると考えられ、冷媒量が冷蔵庫に比べるとかなり多いカーエアコンやルームエアコンでは、燃焼性や毒性のある冷媒の採用は容易ではない。

主な将来冷媒の特性は**表1**に示される通りである。自然冷媒には毒性や可燃性のものが多く、二酸化炭素は空調条件では性能が低く、これらの採用は容易ではない。またHFCであってもGWPの低いものは可燃性や毒性のあるものが多くなり、これも採用は容易ではない。冷媒の毒性や可燃性も漏洩を生じなければ安全上の問題は生じないが、前述のように冷媒の漏洩防止や回収を完全に行うことは難しく、燃焼性や毒性の問題には考慮が必要である。

サービス用冷媒

新規製品向けの冷媒評価は種々なされているが、サービス用の冷媒もユーザーにとっては重要な問題である。CFCは生産が全廃されてすでに7年になり、サービス用CFCの不足や密輸が問題になっている。CFCの代替冷媒としては種々の混合冷媒が開発されているが、種類が多く組成も冷媒メーカーごとに異なるために、機器メーカーにとって、性能や信頼性を保証することは難しい。**表2**に、現在ASHRAE34（米国冷凍空調技師協会規格）に登録されている非共沸混合冷媒を示す。この中にはR407CやR410Aといった新規製品に採用されている冷媒もあるが、大半はCFC代替のサービス用の冷媒である。

エアコンメーカーで一種類の冷媒を一種類の製品に対して信頼性を保証するためには最低でも数台の圧縮機の耐久運転が必要であり、新しい混合冷媒を過去のモデル全般に対して保証することはメーカーにとって現実的には不可能である。

CFCやHCFC用の製品の冷媒だけを単純にHFC冷媒に交換すると、CFCやHCFCに比べてHFCは潤滑油への溶解性が低いため潤滑油の循環が不十分となり、潤滑不良や冷却能力低下を招く。潤滑油の流動性を確保するためにこれらの混合冷媒には少量の炭化水素が加えられることが多いが、圧縮機の中にはCFCやHCFCの分子中に含まれる塩素による焼け付き防止性に依存している機種があり、このような製品にHFCと炭化水素の混合冷媒を採用すると、過酷な運転条件が生じた場合に圧縮機の焼け付きを生じて運転できなくなる。また、混合冷媒の大半は非共沸混合冷媒であり、蒸発や凝縮の際には組成が変化する。このような冷媒は伝熱管内で組成が均一ではなくなるため性能が大きく低下する場合もある。当然、圧力が変わる場合には耐圧部分が破裂する危険性も生じるし、また冷凍能力が変化するため、官庁への届け出や許認可が必要になる場合も多い。

このような問題が種々考えられるため、もし冷媒を入れ替える場合には冷媒メーカーや機器メーカーと十分な相談が必要である。

今後の予測

自然冷媒や種々の低GWPのHFC冷媒が存在するが、今後は数種類の冷媒が採用されていくと思われる。オゾン層問題や温暖化問題でフロン系冷媒が規制され、環境問題がなければ優れた冷媒であった物質の使用が順次禁止されており、選択肢は減少している。また分子構造上の組み合わせは限定されており、CFC12やHCFC22のような非常に広範な条件で高い性能を発揮するような冷媒が新たに開発される可能性はほぼゼロである。

一方、温暖化から要求される省エネ性を満足しようとすれば、機器の実使用条件で高性能が得られる冷媒を使う必要がある。また安全面からの要求は設置場所によりかなり異なり、人口密集地か否か、管理は適正な水準を維持できるか、あるいは地震が多いか否かなどを考慮して冷媒は選択されねばならない。

残念ながら、これらの種々の要求をすべて満足する冷媒はなく、このことから、今後は多くの種類の冷媒が用途に応じて採用されるものと考えられる。

（かたおか　おさみ）

表2　ASHRAE34に登録済みの非共沸混合冷媒

称号	組成（質量%）	組成公差（質量%）	沸点／露点（℃）	安全等級
R-400	R-12/114（指定要）			
R-401A	R-22/152a/124 (53/13/34)	± 2.0/+0.5-1.5/ ± 1.0	-34.4/-28.8	A1/A1
R-401B	R-22/152a/124 (61/11/28)	± 2.0/+0.5-1.5/ ± 1.0	-35.7/-30.8	A1/A1
R-401C	R-22/152a/124 (33/15/52)	± 2.0/+0.5-1.5/ ± 1.0	-30.5/-23.8	A1/A1
R-402A	R-125/290/22 (60/2/38)	± 2.0/+0.1-1.0/ ± 2.0	-49.2/-47.0	A1/A1
R-402B	R-125/290/22 (38/2/60)	± 2.0/+0.1-1.0/ ± 2.0	-47.2/-44.9	A1/A1
R-403A	R-290/22/218 (5/75/20)	0.2-2.0/ ± 2.0/ ± 2.0	-44.0/-42.3	A1/A1
R-403B	R-290/22/218 (5/56/39)	+0.2-2.0/ ± 2.0/ ± 2.0	-43.8/-42.3	A1/A1
R-404A	R-125/143a/134a (44/52/4)	± 2.0/ ± 1.0/ ± 2.0	-46.6/-45.8	A1/A1
R-405A	R-22/152a/142b/C318 (45/7/5.5/42.5)	± 2.0/ ± 1.0/ ± 1.0/ ± 2.0	-32.9/-24.5	A1/A1
R-406A	R-22/600a/142b (55/4/41)	± 2.0/ ± 1.0/ ± 1.0	-32.7/-23.5	A1/A2
R-407A	R-32/125/134a (20/40/40)	± 2.0/ ± 2.0/ ± 2.0	-45.2/-38.7	A1/A1
R-407B	R-32/125/134a (10/70/20)	± 2.0/ ± 2.0/ ± 2.0	-46.8/-42.4	A1/A1
R-407C	R-32/125/134a (23/25/52)	± 2.0/ ± 2.0/ ± 2.0	-43.8/-36.7	A1/A1
R-407D	R-32/125/134a (15/15/70)	± 2.0/ ± 2.0/ ± 2.0	-39.4/-32.7	A1/A1
R-407E	R-32/125/134a (25/15/60)	± 2.0/ ± 2.0/ ± 2.0	-42.8/-35.6	A1/A1
R-408A	R-125/143a/22 (7/46/47)	± 2.0/ ± 1.0/ ± 2.0	-45.5/-45.0	A1/A1
R-409A	R-22/124/142b (60/25/15)	± 2.0/ ± 2.0/ ± 1.0	-35.4/-27.5	A1/A1
R-409B	R-22/124/142b (65/25/10)	± 2.0/ ± 2.0/ ± 1.0	-36.5/-29.7	A1/A1
R-410A	R-32/125 (50/50)	+0.5-1.5/+1.5-0.5	-51.6/-51.5	A1/A1
R-410B	R-32/125 (45/55)	± 1.0/ ± 1.0	-51.5/-51.4	A1/A1
R-411A	R-1270/22/152a (1.5/87.5/11.0)	+0.0-1.0/+2.0-0.0/+0.0-1.0	-39.7/-37.2	A1/A2
R-411B	R-1270/22/152a (3/94/3)	+0.0-1.0/+2.0-0.0/+0.0-1.0	-41.6/-41.3	A1/A2
R-412A	R-22/218/142b (70/5/25)	± 2.0/ ± 2.0/ ± 1.0	-36.4/-28.8	A1/A2
R-413A	R-218/134a/600a (9/88/3)	± 1.0/ ± 2.0/+0.0-1.0	-29.3/-27.6	A1/A2
R-414A	R-22/124/600a/142b (51.0/28.5/4.0/16.5)	± 2.0/ ± 2.0/ ± 0.5/+0.5-1.0	-34.0/-25.8	A1/A1
R-414B	R-22/124/600a/142b (50.0/39.0/1.5/9.5)	± 2.0/ ± 2.0/ ± 0.5/+0.5-1.0	-34.4/-26.1	A1/A1
R-415A	R-22/152a (82.0/18.0)	± 1.0/ ± 1.0	-37.5/-34.7	
R-415B	R-22/152a (25.0/75.0)	± 1.0/ ± 1.0		
R-416A	R-134a/124/600 (59.0/39.5/1.5)	+0.5-1.0/+1.0-0.5/+0.1-0.2	-23.4/-21.8	A1/A1
R-417A	R-125/134a/600 (46.6/50.0/3.4)	± 1.1/ ± 1.0/+0.1-0.4	-38.0/-32.9	A1/A1
R-418A	R-290/22/152a (1.5/96.0/2.5)	± 0.5/ ± 1.0/ ± 0.5	-41.2/-40.1	
R-419A	R-125/134a/E170 (77/19/4)	± 1.0/ ± 1.0/ ± 1.0		A1/A2

研究を最前線で追う

20 健康で快適な生活と温熱環境を考える

環境行動学研究室
生活健康学専攻
奈良女子大学生活環境学科

建築設備や空調設備の進歩により、室内を１年中、１日中ある程度同じ環境に保つことが容易になった。またストレスの多くなった現代社会では癒しを求めて、リラックスできる快適な空間に人々の関心が集まっている。しかし本当に「快適な空間」とはどのようなものであるかについては検討の余地があり、現代の居住空間は、必ずしも快適な空間を提供しているとは言えないと考えている。

本研究室では、健康で快適な生活環境のための様々な要件について、住環境工学、人間工学的立場から研究している。と言っても非常に広範囲であるので、実際には、高齢者など生活弱者をも含めた居住者が安心して快適に生活でき健康を保つための、満足できる休息を得られる空間・温熱環境整備を考え、「温熱的快適性」「睡眠環境」「高齢者」をキーワードに研究を進めている。

暑さ寒さと人体影響・生活

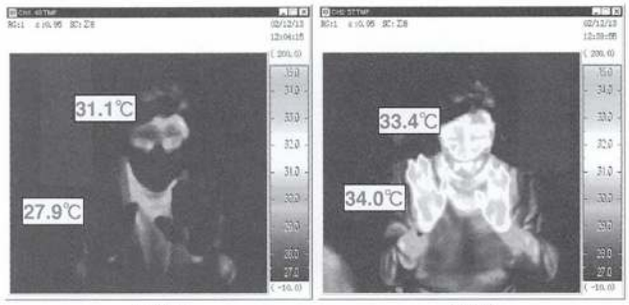
日本は四季の変化がはっきりしており、夏は蒸し暑く、冬は日本海側の豪雪地帯と太平洋側の乾燥した寒い地帯があり、どちらも過ごしやすいとは言い難い。冷暖房使用に関するアンケート調査を行うと、年齢や地域によっても異なるが、関西では冷房は６月～９月まで、暖房は11月～４月まで使用している者が多く、室内で冷暖房を使用せずに生活する期間はわずかであることがわかる。冷暖房機器の使用により快適になる場合もあるが、冷房による冷えや暖房によるドラフト問題など、必ずしも快適になるとは限らない。

そこで実際の居住空間で人は暑さ寒さをどのように感じながら生活しているのか、アンケート調査や実測調査を行い、実際の環境での問題点を抽出している。さらに、温度・湿度・気流速度の制御可能な人工気候室を用いて被験者実験を行い、様々な温熱環境でのわれわれの生理的・心理的影響を皮膚温、体内温、心拍数、脳波等や温度感覚、快適感等を測定し、どの程度の温熱環境が最も快適か、健康に影響を及ぼさないかなどを検討し、快適で効果的な冷暖房に関する提案を行っている。

さらに、寒さに強い人や弱い人がいて、同じ部屋にいても快適さに差があることから、最近は、温熱環境の快適性の個人差がどの程度あるか、それは何によるのかについても検討を行っている。

また、昨年度より、住居内で最も激しい温熱環境変化にさらされる浴室環境について、住宅や高齢者施設で調査を行い、入浴環境の実態を把握し、さらに、人工気候室で入浴時の生理的・心理的影響に関する実験を行い、安全で快適な入浴環境、浴室設備について検討を行っている。

快眠のための睡眠環境とは？



入浴前　　入浴後
冬期における入浴前後の皮膚温分布による温まり方
（高齢者施設の浴場での実態調査から）

疲れを癒し、明日への活力を取り戻す睡眠のための空間を快適にすることは重要である。また、８時間程度眠るとすると、１日のうちで1/3を過ごすことになる寝室の快適性に、私たちはどの程度気を配っているのだろうか。

蒸し暑くて寝苦しい夏や、寒くて寝付けない冬の睡眠温熱環境を改善し、健康で快適な睡眠を得るためにどうすれば良いのか検討している。夏期や冬期にどのように睡眠をとっているか、20歳代～80歳代までの男女によるアンケート調査では、男女とも、夏期は冷房の所有率は高いが、健康のため良くないとの理由から夜間ずっと使用している者は少なく、しかもあまり温熱的に快適ではないとの評価が多い。冬期には、寝室では睡眠中暖房はほとんど使用せず、電気毛布やあんかなどで寝床内を暖めているものが、年齢が高くなるほど、また女性に多く、高齢者女性では80%に達する。

そこで、冷房環境や暖房環境を想定し、人工気候室を用い、寝室の温熱環境や寝床気候等を変えて被験者に実際に夜間に眠ってもらい、睡眠時の脳波、心拍、筋電図、皮膚温等を測定して、睡眠の深さや質について検討しているが、冷房環境では体の冷えが、電気毛布使用環境では暖めすぎが睡眠を阻害することがあることが明らかになった。さらに様々な環境設定で、より快適な睡眠が得られる環境を求めて、この夏も夜間睡眠実験を繰り返し、冬期にも実験予定である。

高齢者にも安全で快適な空間は？

日本は超高齢社会に突入しつつある。バリアフリー、ユニバーサルデザインの観点から、生理的機能の低下した高齢者にも快適な温熱環境や使いやすい空間を提案することを目的として、実験室を用いた行動実験や温熱環境の評価実験など、様々な実験や日常生活での実測調査・アンケート調査を行っている。主に、温熱環境の人体影響の年代差や台所空間での家事作業の問題点を検討し、改善提案を行っている。

●研究室のひととき

睡眠・入浴・くつろぎ・家事など，生活行為や個人差等プライバシーにかかわる研究です。高齢者に被験者として来て頂いたり、居住住居を訪問したりと、学内外の方々にご協力をお願いしています。気を使います。（でも、実験室にはそれらの実験設備が一通り揃っています。生活できそうです）

連絡先
〒630-8506　奈良市北魚屋西町
Tel＆Fax:：0742-20-3475
http://www.nara-wu.ac.jp/life/health/comf/



久保博子助教授と院生・卒論生

●研究スタッフ

久保博子/1960年生まれ
- 専攻／住居環境工学・人間工学
- 著書／共著に「健康と住まい」梁瀬度子編、朝倉書店、「CDブック　ハウスクリマ　—住居気候を考える—」磯田憲生、松原斎樹、久保博子編、海青社、など

—その9— 平均値について

山田 修
修 建築事務所

三種類の平均値

平均値は、いくつかの数・量の中間値で「平に均す(たいらならす)」ところより「全体的に見てバランスのとれた値」という意である。

平均値には、①相加平均 ②相乗平均 ③調和平均の三種類がある(図1参照)。これらの中で、言葉からすると調和（ほどよく釣合がとれて整っている）が耳に心地よく響く。

相加平均は算術平均で、小学校で学んだ。簡単で容易に求められる所より、学生の成績の代表値として今でも多用されている。だから平均値は、即、相加平均と解釈してもよい。

定　　義	a_1 a_2 ---------- a_n の場合
① 相加平均	n個の数の総和をnで割った値 $\frac{a_1+a_2\text{-----}+a_n}{n}$
② 相乗平均	n個の数の積をn乗根した値 $\sqrt[n]{a_1\times a_2\text{----}\times a_n}$
③ 調和平均	n個の数があるとき，それぞれの逆数の総和をnで割った数の逆数(H) $\frac{1}{H}=\frac{\frac{1}{a_1}+\frac{1}{a_2}\text{-----}+\frac{1}{a_n}}{n}$

図1

体操平均

相加平均に似たものに、体操平均がある。

オリンピックの体操競技のときに6人の審判員が出す平均値である。

たとえば、6人の出した点数が、8.7, 8.9, 9.2, 9.3, 9.4, 9.7のときは、両端部の高低の点数を取り除く。「恣意(しい)や不正」の入る余地を防ぐためだ。このような方法をとっても、技術・美しさを採点する当競技の採点は、むずかしい。とくに、美しさは主観的で抽象的ゆえ、個人の評定基準があってもないに等しい。

いずれにしても、4人の平均点は

$$\frac{8.9+9.2+9.3+9.4}{4}=\frac{36.8}{4}=9.20$$

or

$$\frac{-0.1+0.2+0.3+0.4}{4}+9.0=\frac{0.8}{4}+9.0=9.20$$

となる。

これなどは、エコヒイキのない平均値である。瞬間的に出す平均値は、近似値で、かつ皆が分かる計算法がよい。「ソウカ」と納得する相加平均が優れている。

相加平均>相乗平均　である

相加平均は、常に相乗平均より大きい。ということは、点数はいつも大きい方が好ましい、ということだ。そういう意味で相加平均が平均値の代表値となっている、ことが理解できよう。

ここで、相加平均>相乗平均　であることを証明してみよう。

図式解法は、図2のように求めた。

ハッチ部分の面積の大小は、一見すれば理解できる。

算式解法は、次のように求める。

2数の相加平均を$\frac{a+b}{2}$、相乗平均を$\sqrt{ab}$とすると、

$\frac{a+b}{2}\geqq\sqrt{ab}$を証明すればよい。

すなわち　$\frac{a+b}{2}-\sqrt{ab}=0$　なれば、OKである。

$$\frac{a+b}{2}-\sqrt{ab}=\frac{a+b-2\sqrt{ab}}{2}$$

$$=\frac{(\sqrt{a}-\sqrt{b})^2}{2}\geqq 0 \quad \therefore \text{OK.}$$

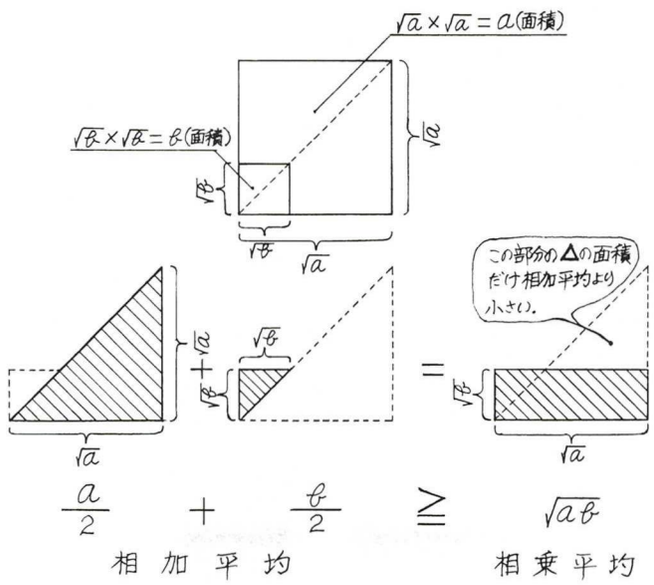


図2

242 リウッド（再生木）

YKK AP株式会社 ビル建材第一事業部
〒540-8534 大阪市中央区谷町４－８－７
TEL：06-6947-4140 FAX：06-6947-4151

21世紀を迎えて、あらためて環境問題を持ち出すまでもなく、これからは一度つくり上げた建物をいかに長く使うかが重要になってきている。そして新しく建てる場合には、いかにエネルギー消費を少なくするか、あるいは将来のライフサイクルコストをどれだけ少なくしていけるかという視点が不可欠である。

ＹＫＫ APではリサイクル・リユース・リモデルをテーマに新素材開発に取り組んできて、「リウッド（再生木）」という新素材を開発した。

リウッド（再生木）とは

リウッド（再生木）とはプラスチック（ポリプロピレン）と木粉を原料とし、これを接着剤を使わずに押出し成形したもので、プラスチックは廃プラを、木粉は製材所で発生した端材やおがくずを粉砕したものを使用している。また、リウッド自身も、粉砕することにより材料として再利用することができ、原料から商品までリサイクルが可能な環境に優しい素材である。

リウッド（再生木）の特長

①天然木に近い質感をもっている

リウッドは木粉が50%以上入っているのと表面をサンディング処理してあるために、天然木のような暖かみのある肌触りをもっている。

②耐候性に優れている

促進耐候性試験を行うと天然木は紫外線による白色化が激しく、色の変化（色差）が大きいのに対してリウッドは表面の木粉は紫外線の影響を受けるために表面の見た目は多少白っぽくなるが、天然木のような激しい色の変化はない**図１**。また、促進耐候性試験を3000時間行い、引張り強度を測定しても強度劣化は少ない**図２**。

③耐腐朽性、防蟻性に優れている

木粉がプラスチックに覆われているために、リウッドは腐朽菌による腐朽やシロアリによる影響を受けない**表１**。そのために、天然木のように内部で腐朽菌が繁殖して腐ったり、シロアリの食害を受けることがなく、長期間使用することができる。また、防腐剤や防蟻剤といった薬品類を使用する必要がない。

④地球環境と人に優しい素材である

材料となる木粉とプラスチックは廃材を使用しているのと、一度商品となったリウッド自身も粉砕することにより再び材料としての使用が可能なため、新たな森林伐採、石油資源の使用、廃棄物の増加を抑制する。製造工程で接着剤を使用していないため、人体に有害な「ホルムアルデヒド」を発生しない。木粉とプラスチックを原料としているために可燃性であるがプラスチックにオレフィン系樹脂であるポリプロピレンを使用しており、万が一の燃焼時にも有害な塩素系ガスの発生はない。

リウッド（再生木）を使用した商品

ＹＫＫ ＡＰではリウッドの優れた耐候性を活かし、新商品の開発を行ってきた。家庭に安らぎと温もりを与え、公共施設においても自然の風合を感じさせる屋外デッキを中心に、透明性が求められる建築では環境制御としてルーバー**写真１**を、街等に活気を与える景観にはベンチ**写真２**を開発しており、環境を考慮した新商品をＹＫＫ APは開発している。

（森川　務／建材委員）

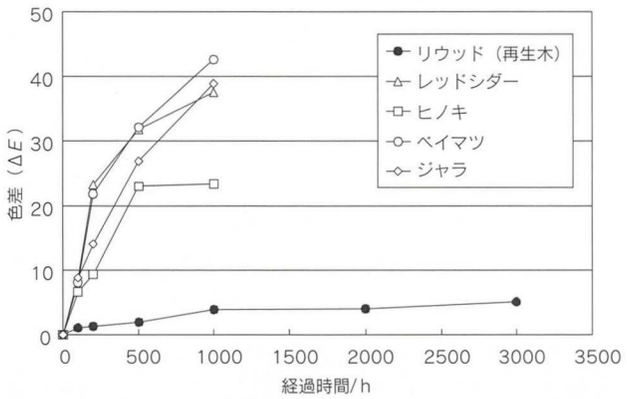


図１　促進耐候性試験における暴露時間と色差（Δ E）の関係

樹種	平均質量減少率			
	菌種：オオウズラタケ		菌種：カワラタケ	
	耐候操作なし	耐候操作あり	耐候操作なし	耐候操作あり
リウッド(再生木)	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
スギ心材	24.7%	41.7%	18.9%	31.4%
ベイマツ心材	27.9%	34.4%	16.6%	23.1%
ヒノキ心材	10.5%	19.4%	5.5%	12.4%
ベイスギ心材	0.0%	0.0%	3.3%	1.2%
イペ	0.7%	0.7%	1.4%	2.5%
ジャラ	0.1%	0.4%	0.7%	2.6%

富山県林業技術センター

表１　長期腐朽試験による質量減少率（JIS Z 2101準拠）

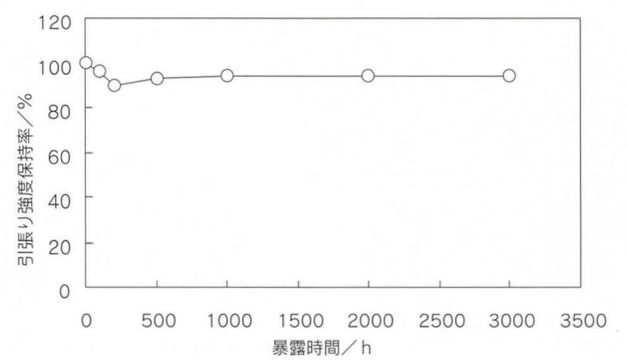


図２　促進耐候性試験における暴露時間と引張り強度保持率の関係

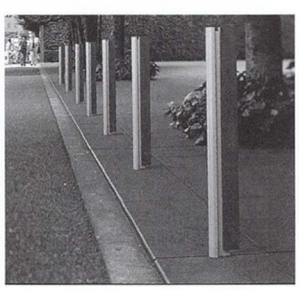


写真１　ボラード



写真２　ベンチ

温故知新

上原正行
出版委員会委員長

宇治川の 先陣思う 梅雨まなか

木立の隙間から　地元Y工場の煙突が丸見え。しかも煙モクモク
「行政の景観風致指導はよろしくない」と皆さん手厳しい。



豪雨のあとの宇治川は あたりの音をすべて打ち消すほどの急流であった。



世界遺産・宇治上神社を参拝-日本最古の神社建築、その斬新なデザインに驚く

6月26日、出版委員会のメンバーは　宇治を訪問。
月一度　第3木曜日が会合予定の委員会ですが、今回は新緑の宇治。
温故知新・古い建築と新しい建物を　めでる会となりました。
これは、河田委員（竹中工務店設計部）の企画によるもの。

昨夜来の集中豪雨で　宇治川の水嵩はあがり、中の島への朝霧橋が閉ざされていて　びっくり。　しかし　どんよりとした雲の下
みずみずしい木々の緑、アジサイの鮮やかなブルー、バイオレット、そして　あたりの音をすべて打ち消すほどの急流は　ゴミ一つ無く猛々しくも清清しい眺めで　見飽きることが無いほど。
オフィス空間をすこし離れ　まさしく「忙中閑有」。
眼に優しいひとときでした。

宇治市源氏物語ミュージアムから宇治上神社へ

京阪宇治駅前集合。先ずは『宇治市源氏物語ミュージアム』へ。
平等院鳳凰堂のプランに少し似た感じの空間を　樹木の中にすっぽり優しく納めた　たたずまい。プレキャストの唐破風状造形は源氏物語の世界と符合するように思える。映像展示室で上映される短編映画「浮舟」は篠田正浩監督作品。語りは夫人の岩下志麻。人形の表情がすばらしい。

次に、早蕨の道を経て、『宇治上神社』を参拝。　平等院の鎮守として崇敬された日本最古の神社建築は　世界文化遺産に登録済み。
本殿（平安後期）、拝殿（鎌倉前期）ともに桧皮葺の国宝建築。
全体に軽やかで、各部材のプロポーションも小ぶりで愛らしい。

平等院鳳凰堂、そして鳳翔館

対岸に渡り、皆さん久しぶりの鳳凰堂ご対面。

浄土庭園の中心といわれる阿字池を横目に見ながら次の現代建築『宝物館・鳳翔館』にたどり着く。目立たない入り口に、そそとした案内プレート。その後ろに菩提樹の大木。お年寄りご夫婦が足元の実を大事そうに拾っておられた。この建築は打放しコンクリートと金属、ガラスという素材をバランスよく組合わせ、周囲の環境に融合させている。御堂の内部を彷彿とさせるほの暗さの中に、鳳凰や梵鐘がうかぶ。一巡して　時刻は5時過ぎ。幹事さんの段取りよろしく、徒歩2分で本日の会議室『辰巳屋』の二階座敷へ通される。
予定どおり　本年第3回委員会を終了。次回は　他の委員からの要請で18時15分からの開催となった。　そして丁度、みなさんの喉も乾いた頃　隣室へ。そこから、宇治川の流れ、屋形船、そして鵜も見える。後は出版企画のアイデアがビールの空き瓶とともに増えて行くのでありました。

（うえはら　まさゆき）



鳳凰堂を遠望すると、マンションにょきにょき 煙モクモク

「建築家　伊東忠太の世界展」

日時　2003年9月6日（土）～10月5日（日）
11：00～21：00　会期中無休
会場　KPOキリンプラザ大阪　TEL 06-6212-6578
大阪市中央区宗右衛門町7-2
地下鉄御堂筋線・難波駅より徒歩3分
料金　一般700円、学生500円、中学生以下無料
協力　ワタリウム美術館（企画）
出品　建築図面、家具、石像、絵画、スケッチ、写真など約300点を集めた伊東忠太回顧展

村井修写真展『東京－街の余白』

建築が、経済社会の求めに応じて個々に自由な表現で立ち並び、都市風景が変わりつづける今日の東京。その都市の背後で密かに姿をみせる片々の虚実の現象。そこになぜか心安まる時間と不安が併存する空間。
身近に出合った混沌とした街の表裏を、約35点のカラー写真で構成する。写真家・村井修氏の4年前の『港町グラフィックス』展に続く、新作発表展となる。
会期　2003年9月5日（金）～9月17日（水）
11：00～19：00（最終日～17：00）会期中無休
会場　アユミギャラリー　TEL 03-3269-1577
東京都新宿区矢来町114
地下鉄・東西線神楽坂駅下車1分、大江戸線牛込神楽坂駅下車5分

第20回記念　現代日本彫刻展

山口県・宇部市では「響（ひびく）」をテーマに、現代日本彫刻展を開催する。今回の20回展では、「まちづくり」の観点から、常盤公園での展覧会のほかに、終了後の中心市街地への設置も視野に入れている。
会　期　2003年10月1日（水）～11月10日（月）
会　場　宇部市野外彫刻美術館企画展示場
（宇部市常盤公園内）
構　成　公募入選作品10点＋河口龍夫、小清水漸、新宮晋ら招待作家による作品10点
詳細は　http://www.city.ube.yamaguchi.jp/choukoku/を参照。

第15回関西三大学合同建築展

京都造形芸術大学、京都精華大学、大阪芸術大学、大阪工業大学、大阪市立大学、東京理科大学が参加して、15回目の関西三大学合同建築展―expanded「環境ノイズエレメントとしての建築」が開催される。
会期　2003年10月10日（金）～19日（日）
14：00～19：30予定
会場　未定（9月初めには決定。http://www.underground-project.netを参照）
■シンポジウム
日時　2003年10月11日（土）14：30～18：00予定
会場　大阪芸術大学芸術情報センターAVホール
大阪府南河内郡河南町東山469
講師　塚本由晴（アトリエ・ワン）
上記催しは未確定部分があるので、大阪芸術大学建築学科合同研究室（TEL 0721-93-3781）、または上記ホームページで確認されたい。

ODPデザインセミナー

「モエレ沼公園」は彫刻家イサム・ノグチが基本設計をしたもの。ゴミ埋立地を公園へと再生し、環境を回復する計画であり、同時に、公園全体をひとつの彫刻作品と見なした巨大な造形作品でもある。
ODPデザインセミナーでは、2002年度グッドデザイン大賞を受賞した札幌市「モエレ沼公園」の園長・石村寛人氏を講師に迎え、その開発プロセスが語られる。
日時　2003年9月26日（金）15：00～16：30
会場　ATC・ITM棟9階セミナールーム（大阪・南港）
入場　一般1,000円、学生500円（当日受付で徴収）
定員　150名（予約先着順）
問い合わせは、大阪デザイン振興プラザ事務局（TEL 06-6615-5510）へ。
●石村寛人（いしむら　かんじ）／1951年生まれ
1975年千葉大学園芸学部造園学科卒業、札幌市役所で中島公園、大通公園再整備。モエレ沼公園造成。

緑をまとう家展―我流天国―、INAXギャラリー大阪で

9月からのINAXギャラリー大阪では、街で見つけたユニークに植物をまとっている家を取材し、我流天国の主といわんばかりの満足感を味わう住人たちを紹介する。
たとえば、現役90歳の会社経営者が40年前120tの土を運んでつくった5階建てビルの屋上果樹園。借家を緑で包み込んだ東京・国立市の「プランターコテッジ」。さらに、赤瀬川原平氏（美術家・作家）が住むニラハウス（藤森照信氏設計）、石山修武氏設計による屋上菜園のある自邸「世田谷村」も写真で登場する。

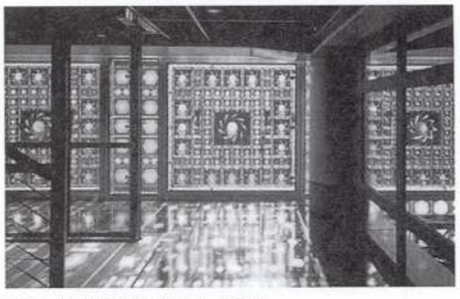


駅ビルから見るシラトリビル（東京・大森）撮影：瀬戸正人
厚さ60cmの土に、梅や柿やミカンなど様々な果樹が高さ4m以上にもなって生えている

会期　2003年9月5日（金）～11月21日（金）
10：00～18：00　水曜日休館
会場　INAX大阪ショールーム2階
大阪市西区新町1-7-1
入場　無料
■講演会「建築家は植物と闘う」
日本においては「社寺も民家もすべての建築」は、すごい勢いで成長する植物との闘いの歴史だったという藤森照信氏が、タンポポハウスやニラハウスの設計を通して見えてきた植物への実感のこもった話をする。
日時　2003年10月24日（金）18：30～20：00
会場　INAX大阪ショールーム8階会議室
講師　藤森照信（東京大学生産技術研究所教授）
参加　無料。希望者は電話かFAXでINAXギャラリー（TEL 06-6539-3518、FAX 06-6539-3521）まで。

ジャン・ヌーベル展、東京オペラシティアートギャラリーへ

一昨年パリのポンピドーセンターで開催されたあと、ミラノ、マドリッドを巡回し、今年秋、フランスの建築家ジャン・ヌーベルの個展が東京オペラシティアートギャラリーに、そして来年2月14日からサントリーミュージアム〔天保山〕に登場する。
人々から眺められることを意識し、また見る者の視線に対して限りなく知的な官能性を投げ返してくるヌーベルの建築は、新しい美的枠組みをもたらすものとして大きな注目を集めている。
本展では、実現しなかったプロジェクトを含め、これまでに手がけた作品を200点以上の精密なデジタル・プリントによって展示し、幅25mのスクリーンではヌーベルの代表作を実物に近いサイズで投影する。
会期　2003年11月1日（土）～2004年1月25日（日）
12：00～20：00（金・土曜日は21：00まで）
月曜日休館（祝日の場合は開館。11／25、12／29、1／5、1／13は休館）
会場　東京オペラシティアートギャラリー
東京都新宿区西新宿3-20-2
料金　一般1,000円、大高生800円、中小生600円
構成　アラブ世界研究所、カルティエ財団現代美術館、ナント裁判所、ケ・ブランリー美術館ほか


アラブ世界研究所（パリ）1987

American Wood Design Awards 2004作品募集

全米林産物製紙協会（AF & PA：American Forest & Paper Association）では、“American Wood Design Awards 2004”を開催。作品を募集している。
2000年に創設され、初回は15作品、2002年の２回目は16作品の建築・住宅等が受賞している。

対象　アメリカの木材を構造や内外装等に使い、日本国内に1998年～2003年10月末に完成した建築・住宅、その他木質構造物。新築・増改築は問わない。
募集　2003年８月１日（金）～10月31日（金）
応募　www.awda.jpのEntry Form、または氏名、住所を記入したFAXでの応募申込者には、所定の応募用紙を郵送。
審査　隈　研吾（建築家、隈研吾建築都市設計事務所）
中田捷夫（構造家、中田捷夫研究室）
藤森照信（建築史家、東京大学教授）
ロバート・ハル（建築家、The Miller Hull Partnership.LLP）
賞　American Wood Design of the Year（最優秀賞）、Honor Award（優秀賞）、Special Jury Award（審査員特別賞）
募集要項詳細は、www.awda.jpに掲載。

「国際デザイン・ビジネス交流会議2003」参加者募集

㈶国際デザイン交流協会（会長：田代　和）は、本年３月まで“「消費」再考”をテーマにデザインコンペ提案を募集した。この1288件の応募作品の中から第１次審査で選定された優秀作品38点について、応募者自身による公開プレゼンテーションと最終審査を兼ねて「国際デザイン・ビジネス交流会議2003」を開く。会場には優秀作品38点が展示され、世界の新進デザイナーと産業界、デザイン界などとのビジネス交流の場となる。
経済産業省、外務省ほかの後援。

■2003年10月21日（火）
①10：30～17：00　コンペ優秀作品のプレゼンテーション（日英同時通訳）
②18：00～20：00　レセプション・交流会

■2003年10月22日（水）
①９：00～12：00　コンペ応募者との個別ビジネスマッチング
②14：00～17：00　国際デザインフォーラム
コンペ入賞作品表彰式＋コンペ講評パネルディスカッション＋コンペ優秀作品の展示

会　場　大阪国際会議場12階・特別会議場
大阪市北区中之島5-3-51
参加者　産業界・デザイン界・教育機関・地方公共機関等200名
参加料　１人10,000円（２日間の全プログラム）
事務局　㈶国際デザイン交流協会・産業交流事業部
TEL 06-6346-2612、FAX 06-6346-2615
URL：http://www.jdf.or.jp/

「建築・設備総合管理技術者」資格取得講習

建築と設備に精通した広範な知識の下に、“総合的な観点から建築物の維持保全計画をまとめ、実施に責任をもつ建築物のナビゲーター”である「建築・設備総合管理技術者」資格取得のための講習会が、㈳建築・設備維持保全推進協会（BELCA）の主催で行われる。今年から受講資格も大幅に緩和されているが、受講申込手続き等々詳細はBELCA事業推進部へ問い合わせられたい。

・東京　2003年11月19日（水）～21日（金）
定員／80名、会場／飯田橋レインボービル（新宿区）
・大阪　2003年12月３日（水）～５日（金）
定員／40名、会場／大阪YMCA会館（西区土佐堀）
申込受付　BELCA（TEL 03-5252-3873、FAX 03-5252-3871、e-mail：belca@belca.or.jp）へ９月30日（火）までに。ただし、定員になり次第締め切り。
受講料　61,950円（テキスト・消費税含む）

「建築環境・省エネルギー講習会」

建築士法に基づく特別講習として、建築・設備技術者を対象に環境・省エネルギー対策の動向、建築と地球環境、改正省エネルギー基準（性能基準と仕様基準）を解説する。受講料はテキスト代を含め25,000円。

・2003年10月７日（火）及び11月11日（火）
10：00～16：30
コクヨホール（東京都港区・各定員260名）
・2003年10月15日（水）10：00～16：30
広島厚生年金会館（広島市中区・定員120名）
・2003年10月21日（火）10：00～16：30
福岡国際会議場（福岡市博多区・定員120名）
・2003年10月29日（水）10：00～16：30
第二豊田ビル（名古屋市中村区・定員120名）
・2003年10月31日（金）10：00～16：30
千里ライフサイエンスセンター（豊中市・定員140名）
なお、10月10日（金）には仙台で、10月24日（金）には札幌でも開催される。
参加申込みは㈶建築環境・省エネルギー機構建築研究部（〒102-0084　東京都千代田区二番町4-5　TEL 03-3222-6693、FAX 03-3222-6696）へ。

第９回公共建築賞公募

国の機関、地方公共団体、政府関係機関もしくはこれに準ずる機関が施行した建築物、及びその他公共性の高い建築物で、1996年４月～2000年３月に竣工したものを対象に、第９回公共建築賞の募集が始まる。

賞の種類　・公共建築賞―行政・文化・生活施設部門別に各１点
・公共建築賞・特別賞―２点内外
・優秀賞―全国で31点以内
応募方法　申込書、図面、写真10枚以内、説明書をA3判クリヤファイル１冊にまとめて、応募する建築物が所在する地区の公共建築協会地区事務局へ、2003年９月１日～10月31日に提出する。
審査委員　２段階審査を行う。第２次委員は下記７名。
尾島俊雄（早稲田大学）、川上格（公共建築協会会長）、見城美枝子（青森大学）、白幡洋三郎（国際日本文化研究センター）、寺本英治（国土交通省）、福島七郎（東京都財務局）、柳澤孝彦（建築家）

申込書はhttp://www.pba.or.jpからダウンロードも可能。問い合わせは、㈳公共建築協会（〒102-0093　東京都千代田区平河町1-7-20、TEL 03-3234-6265）へ。

国際光触媒技術シンポジウム

産官学が一体となった“光触媒産業化”に向けた様々な最新の取り組みを紹介するシンポジウムが開かれる。主催は㈱工業調査会。アドバイザーは独立行政法人産業技術総合研究所と物質・材料研究機構。

日　時　2003年10月６日（月）10：00～17：00
会　場　パシフィコ横浜・アネックスホール
横浜市西区みなとみらい1-1-1
受講料　21,000円（消費税込み）
事務局　E. J. クラウス＆アソシエート日本支社
TEL 03-5212-7071、FAX 03-5212-6091

ギャルリー・タイセイ常設展

「再見・再読ル・コンビュジエ２～ローコストハウジングから集合住宅へ～」では、ル・コンビュジエの住宅作品を中心に、ローコスト住宅への挑戦がやがて集合住宅へと発展していく流れを追う。

会期　2003年８月25日～10月17日（金）
10：00～17：00　土日祝日は休み
会場　ギャルリー・タイセイ
東京都新宿区西新宿１　新宿センタービル17階
TEL 03-5381-5510
入場　無料
展示　内部を見ることができる模型、解説を加えた図面資料によって、オザンファン邸、ラ・ロッシュ＋ジャンヌレ邸、ワイセンホフ・ジードルング、スタイン邸、サヴォア邸などを紹介

日本建築協会

月間の動き

【平成15年 7 月分】

正・副会長会議

第４回正・副会長会議
７月11日（金）17:00～18:30
出席者　佐野会長ほか７名
議　事　（１）常設委員会事業の収支改善について
（２）平成15年度事業運営について
第５回正・副会長会議
７月22日（火）16:00～17:30
出席者　佐野会長ほか５名
議　事　今後の協会運営について

理事会

第３回常任理事会
７月22日（火）15:00～16:00
出席者　佐野会長ほか８名
議　事　（１）平成15年度収支予算１／４半期執行状況について
（２）評議員の異動について
（３）後援・協賛名義の使用について
（４）報告事項
①「日本建築協会賞」について
②職員の退職及び異動
③支部長会議の開催について
④公益法人制度の改正について

支部長会議

７月29日（火）15:00～17:00
出席者　佐野会長ほか４名
議　事　（１）本部支部間の経理処理について
（２）ホームページ（支部ページ）について
（３）他団体が実施するＣＰＤ事業との連携について
（４）「建築と社会」支部特集号について
（５）支部における実務講習会の開催について
（６）会員増強対策について
（７）支部総会の日時について
（８）日本建築協会賞について

編集委員会

第４回編集委員会
７月９日（水）18:00～20:10
出席者　設楽委員長ほか６名
議　事　（１）８月号「介護と建築・設備」特集経過報告
（２）９月号「建築とノスタルジー」特集経過報告
（３）10月号構造特集企画経過報告
（４）11月号「会員作品」特集経過報告
（５）12月号「第50回青年技術者」記念企画経過報告
（６）会員企画小委員会の件
（７）作品作風、広告企画、シリーズ頁等の報告・検討
（８）収支状況報告
第４回法令分科会
７月２日（水）14:00～15:30
出席者　鶴田幹事ほか３名
議　事　「法令コーナー」の企画
第４回広告企画小委員会
７月２日（水）17:00～18:15
出席者　渡邉副委員長ほか７名
議　事　（１）平成15年８月号～10月号特集経過報告
（２）平成15年度独自特集、広告企画小委員会特集企画
（３）収支状況報告
第４回設備分科会
７月２日（水）18:00～19:45
出席者　梶井幹事ほか２名
議　事　（１）青年技術者特別企画の報告
（２）「研究最前線を追う」の企画
（３）「設備の頁」の企画
（４）８月号「介護と建築・設備」特集のフォロー
第４回構造分科会
７月４日（金）18:00～21:15
出席者　田渕幹事ほか６名
議　事　（１）10月号構造特集の企画
（２）「構造の頁」の企画
第50回青年技術者特別企画小委員会
７月９日（火）17:00～18:00
出席者　設楽委員長ほか５名
議　事　第50回青年技術者特別企画
第５回構造分科会
７月18日（金）18:00～20:00
出席者　田渕幹事ほか３名
（１）10月号「力と楽しくつき合う方法」特集の企画
（２）「構造の頁」の企画
第３回作品作風小委員会
７月24日（木）19:00～20:30
出席者　倉渕副委員長ほか２名
議　事　（１）作品の選定
（２）作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
（３）「ｇａｌｌｅｒｙ」掲載報告・予定

事業委員会

第３回事業委員会
７月16日（水）18:00～20:00
出席者　川村委員長ほか６名
議　事　各小委員会からの報告と検討
第３回若い会員の集い小委員会
７月１日（火）19:00～20:50
出席者　杉本副委員長ほか４名
議　事　今後の企画について
第３回情報小委員会
７月９日（水）18:00～19:40
出席者　天野副委員長ほか５名
議　事　実施報告ならびに今後の企画について
第３回見学会小委員会
７月10日（木）18:00～20:05
出席者　松浦副委員長ほか７名
議　事　実施報告ならびに今後の見学会の候補について

出版委員会

第４回出版委員会
７月17日（木）18:15～19:10
出席者　上原委員長ほか６名
議　事　（１）＜プロのノウハウ＞と特装本の経過報告
（２）今後のテーマと執筆者選定
第５回建築教育小委員会（仮称）
７月３日（木）17:30～18:45
出席者　安達主査ほか３名
議　事　（１）「建築設計教育の変化」について
（２）今後の作業予定
第14回「建築施工図の作図方法とチェックポイント（仮称）」出版小委員会
７月10日（木）18:00～19:30
出席者　田中主査ほか６名
議　事　（１）建築施工図の作図方法とチェックポイントに関して（事例報告）
（２）今後の作業予定等について

教育委員会

第１回講習会小委員会
７月18日（金）18:00～19:15
出席者　片倉・藤井正副委員長ほか４名
議　事　本年度建築工事実務講習会の開催について

建築クラブ

第372回建築クラブ朝食会
７月８日（火）8:00～9:30
演　題　「大阪の都市再生について」
講　師　岩本　康夫　氏（大阪市計画調整局長）
場　所　大阪全日空ホテル
参加者　29名

入会者(敬称略)

〔個人会員〕
倉斗　道夫（日本設計）　　中西　由一

◀会員の訃報
大林　芳郎氏（名誉会員）　平成15年７月19日ご逝去
寺元　通夫氏　平成15年２月19日ご逝去



アース製薬研究棟



大隅合同庁舎



滋賀県立成人病センター



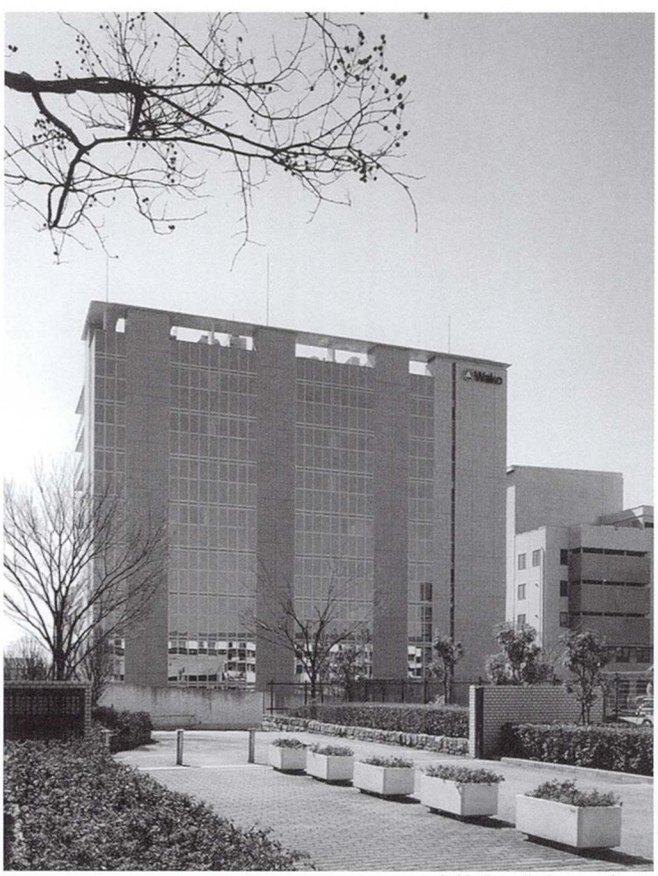
篠山市民センター

株式会社　東畑建築事務所

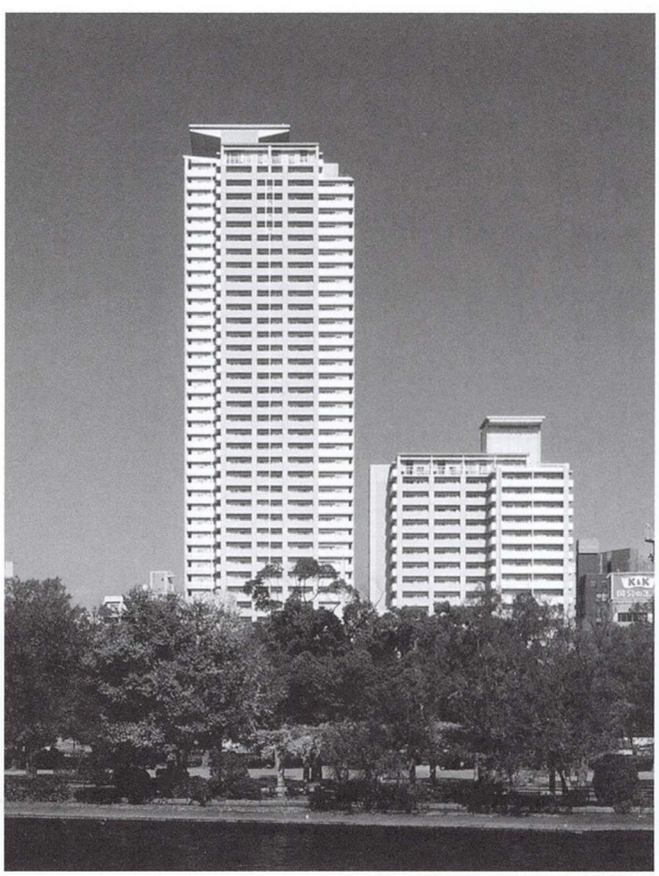
URL　http://www.tohata.co.jp

◆本社・大阪事務所　　〒541-0044　大阪市中央区伏見町4-4-10　　TEL　06-6202-0391

◇東京事務所 03-3581-1251　◇名古屋事務所 052-223-3931　◇九州事務所 092-472-8737



和光純薬工業大阪研究所



ジーニス大阪

株式会社 浅沼組

あなたが好きだから、
あなたの好きな街をつくりたい。

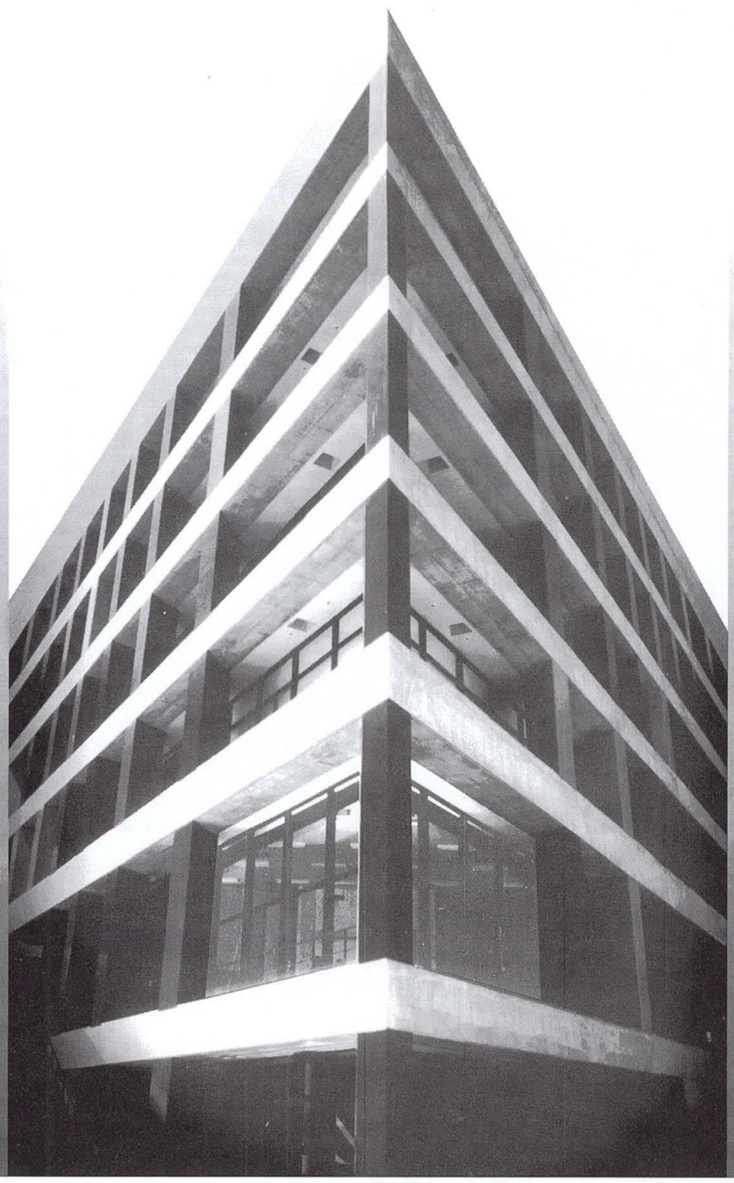


人・都市・自然のシンフォニー
（まち）

Asanuma

本社・大阪本店　〒543-8688 大阪市天王寺区東高津町12番６号　TEL.06-6768-5222(代表)
東 京 本 店　〒160-0007 東京都新宿区荒木町５番地　TEL.03-5269-3111(代表)

技へ、術へ、力へ。



宝塚造形芸術大学マルチメディアタワー

明治40年の創業以来、奥村組は信頼性を何よりも大切にし、そのバックボーンとなる高品質技術を次々と開発してきました。都市の社会基盤づくりに欠かせないシールド工法、安心の暮らしを提供する免震構法など、「わが国初」「トップクラス」といわれる独自技術の数々がその証しといえるでしょう。先進の技術力が、その時代にふさわしい環境創造を支え築きあげる原動力になる…、奥村組の変わらぬ理念です。

こころを形に、かたちを未来に。

奥村組

OKUMURA CORPORATION

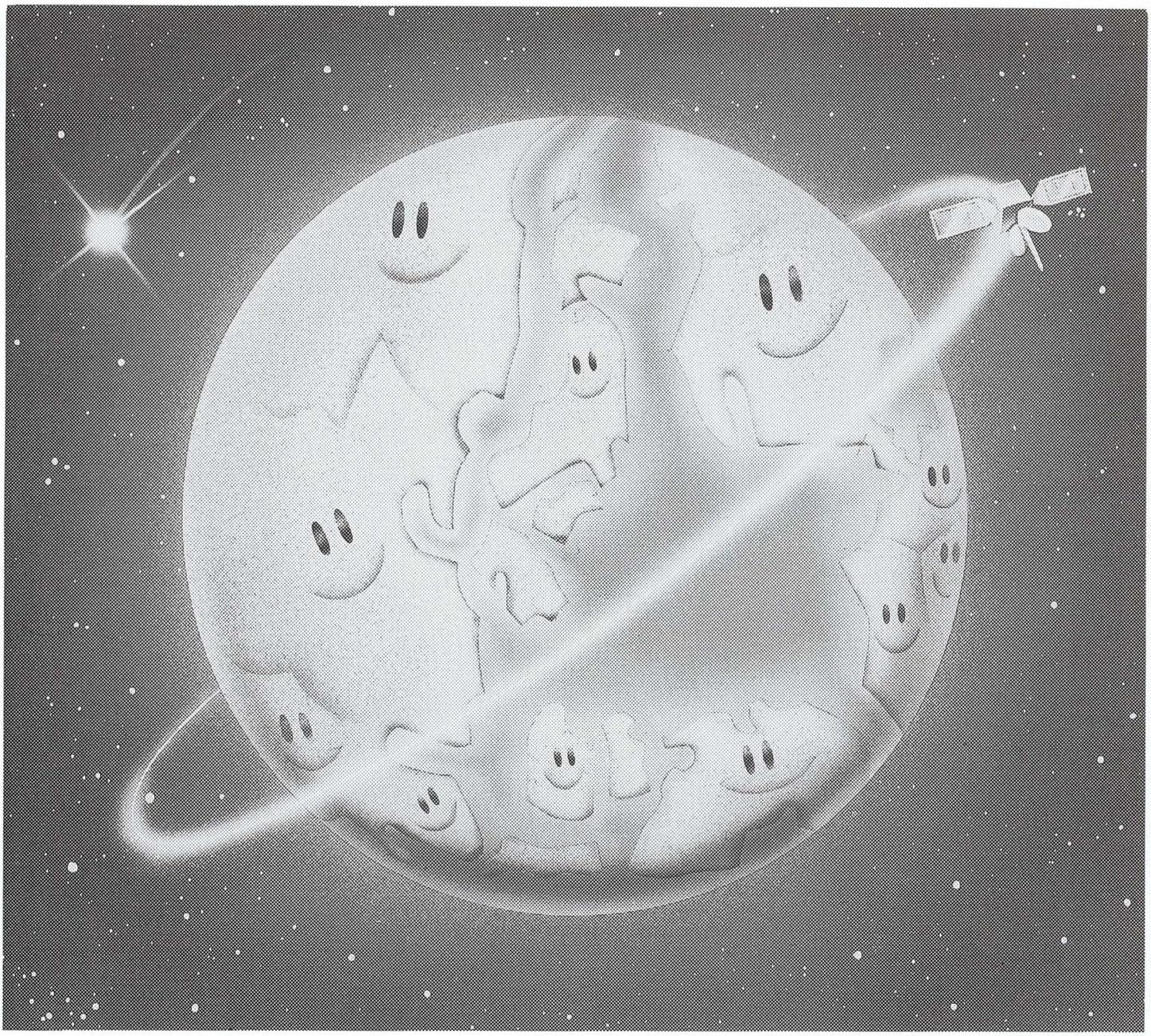
本　社：大阪市阿倍野区松崎町2-2-2 TEL.06(6621)1101
東京本社：東京都港区芝5-6-1 TEL.03(3454)8111



人と自然そして建設が共にある未来へ。グランドデザイナー、カジマ。

鹿島
KAJIMA CORPORATION

本社：東京都港区元赤坂1-2-7〒107-8388　http://www.kajima.co.jp/



地球人、みんなを
ニッコリさせたい。

「かけがえのない地球のためにできること」その答えを求めて、
鴻池組はグローバルな視点から様々な環境問題に幅広く対応できる
独自のノウハウや技術開発に取り組んでいます。

鴻池組
KONOIKE CONSTRUCTION CO.,LTD.

本社・大阪本店：〒541-0057 大阪市中央区北久宝寺町3-6-1 ☎06(244)3500
東京本店：〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-3-11 ☎03(3296)7700
URL http://www.konoike.co.jp/

Zenitaka

それは人が集まる場所。



存在感、魅力あるスペース、独創……
いい建造物には、そんな表現が当てはまります。
でも、人が何故集まってくるのかと言えば、
そこにある優しさや信頼感からではないでしょうか。
我々は人に優しい空間を目指し、
これからも期待に応えて行きます。

◈ 錢 高 組
URL http://www. zenitaka. co. jp/

大成建設

私たちのいちばんの技術は、
お客様の思いを読み取る技術です。

ひとつの建物、ひとつの施設が生まれるまでには、
数えきれぬほど多くの技術が投入されます。
個々の技術はもちろんですが、何よりも大成建設が胸をはって誇りたいのが
お客様の思いを読み取る技術です。
私たちはご利用いただく方の率直な声から引き出された
真のニーズをしっかりと把握し、すべてのプロセスに反映させながら、
大きな満足を創造します。





人と環境のありかたを考える。
それも戸田建設の品質のひとつです。

ビル建設に伴う大量の廃棄物をゼロに——戸田建設が超高層ビルの新築工事において、いち早くゼロエミッションを達成しました。これも人と環境のよりよい関係を考え、建設のトータルな「品質」を追求してきた私たちの成果の一つです。さらなる省資源・省エネルギー技術の開発など、これからも私たちは地球環境問題と真正面から取り組んでまいります。

for the Best Quality for the Earth Environment

ISO 9001・14001認証取得

戸田建設

本　社/〒104-8388 東京都中央区京橋1-7-1 ☎(03)3535-1354
大阪支店/〒550-0005 大阪市西区西本町1-13-47 ☎(06)6531-6095
http://www.toda.co.jp/

夢の色が、見えますか?



鉄やコンクリートには、心がありません。
しかし、そんな材料で作られているにも関わらず、
私たちの周囲の建造物が、
さまざまな表情を見せているのはなぜでしょう。
それは、作り手の夢が、表情となって現われるから。
私たち西松建設は、ヒューマン・タッチの夢を託します。

毎日ふれあう技術

西松建設

〒105-8401 東京都港区虎ノ門1丁目20番10号 電話03(3502)0232

やすらぎ ぬくもり をつたえます



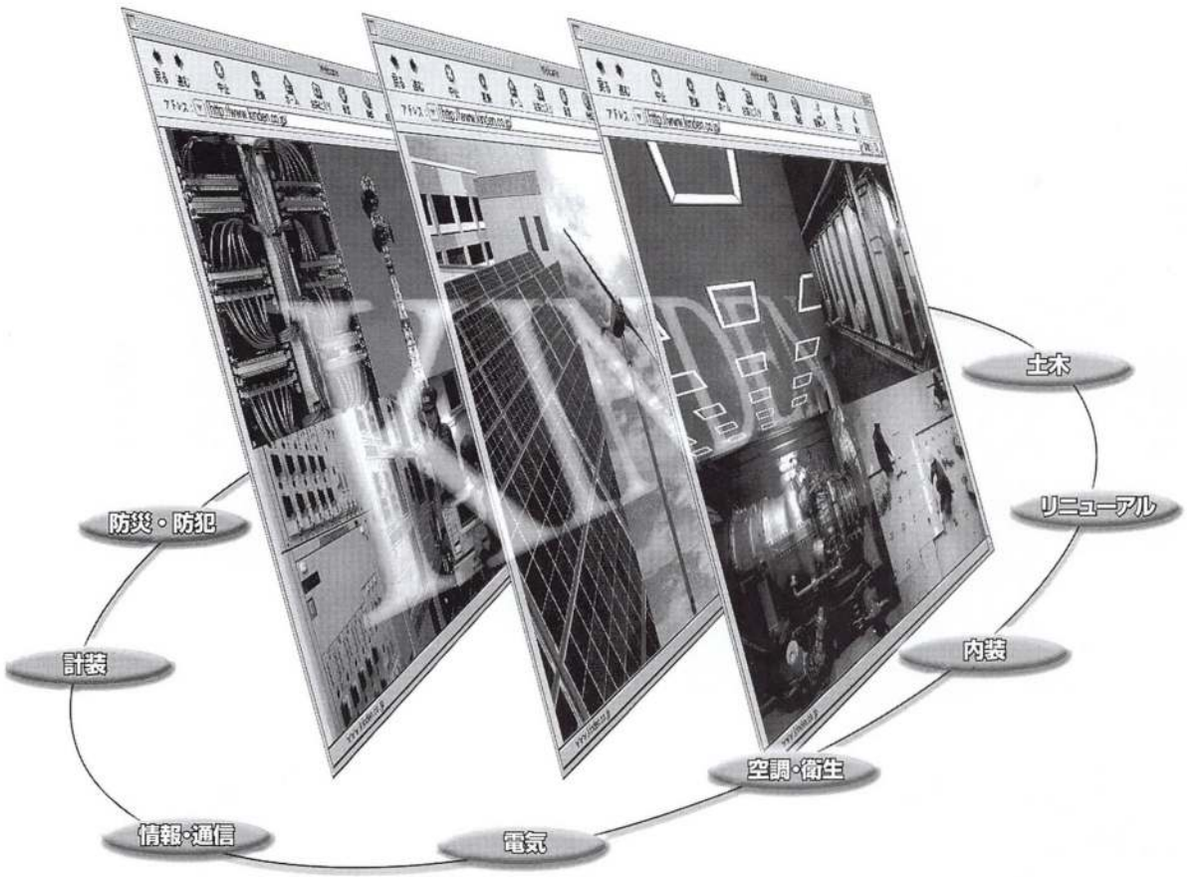
Matsumura 株式会社 松村組

本社・大阪本店　大阪市北区東天満1-10-20　　東京本店　東京都千代田区内幸町1-1-2
支店　名古屋・札幌・東北・広島・九州・神戸・京都・横浜　http://www.matsumura-gumi.co.jp/

Technology Domain

情報 エネルギー 環境

Kinden CORPORATION



きんでんの総合テクノロジーにまずアクセスを!

もっと情報化を・・・快適な環境を・・・エコロジーに配慮した省エネを・・・。こんなときは、迷わずアクセス。

<きんでん>の総合テクノロジーが、最適のエンジニアリングソリューションをご提供いたします。ファシリティのトータル・パートナーとして、地球環境を考え設備やネットワーク構築、メンテナンス・リニューアルまで幅広い領域でお客さまのニーズにお応えする<きんでん>。そこには、情報・エネルギー・環境のフィールドでこれまで培ってきたノウハウが結集されています。

本店 大阪市北区本庄東2丁目3番41号　東京本社 東京都千代田区九段南2丁目1番21号
TEL.06-6375-6000　TEL.03-5210-7272
http://www.kinden.co.jp/

きんでん



あなたの、いちばん心地良い場所はどこですか。
きっと、多くの方が、大自然の中をイメージされることでしょう。
私たちは、そんな快適さをあらゆる建物の内に創造していきたいと考えています。
人間は、あくまでも自然の一部。その事実を大切に、新しい最適環境を創造していきたい。
もっとナチュラルに、いつもあなたのそばに、ダイダンです。

Always With You.

—光と空気と水を生かす—
ダイダン

SHOWA SEKKEI
株式会社 昭和設計

代表取締役社長　三　宗　司　郎

本社　552-0007 大阪市港区弁天 1-2-1800 オーク1番街
Tel 06−6575−5555　Fax 06−6575−5556

東京　160-0015 東京都新宿区大京町 23-3 四ツ谷オーキッドビル
Tel 03−3357−8631　Fax 03−3357−8632

神戸　651-0085 神戸市中央区八幡通 4-1-15 成樹ビル202号
Tel 078−242−0971　Fax 078−242−0972

和歌山　640-8232 和歌山市南汀丁 22番地 汀ビル301号
Tel 073−433−4464　Fax 073−433−4465

徳島　770-0003 徳島市北田宮 2-14-51
Tel & Fax 088−634−3780

広島　730-0017 広島市中区鉄砲町 2-18
バルミープラザ八丁堀 801
Tel 082−222−3760　Fax 082−222−3775

九州　810-0003 福岡市中央区春吉 3-15-15 ル・ソレイユ21
Tel 092−752−1565　Fax 092−735−1750

熊本　862-0913 熊本市尾の上 2-18-3 千代田ビル401号
Tel 096−384−8045　Fax 096−384−8031

HOKOKU

誠実・安全・正確

繊細な発想と大胆な行動力で、明日を創造します。

Creating Tomorrow with Bright Ideas and Actions

〝時代がどの様に進化しても、社会がどれだけ変貌を遂げようとも、本当に必要とされる企業は発展し続ける〟
・・・この言葉を旨に、私たち豊國建設は繊細な発想力と大胆な行動力で、新しい２１世紀を切り拓きます。

豊國建設株式会社

〒530-0044
大阪市北区東天満２丁目３番２１号　日本興業空心町ビル５階
Tel 06 (6353) 1001(代表)　Fax 06 (6353) 1091(代表)
Email eigyou@hokoku-const.com
東京・北上・新井・舞鶴・京都・加古川・益田・福岡

THE FRESH SPIRIT IS EXCITING

王建工業株式會社

取締役社長　永　原　義　夫

○ 販売部門　　内装材全般・住宅機器
○ 加工部門　　住宅部材・鋼材加工製品
○ 工事部門　　建築企画・設計・施工

―― 建築は常に時代精神を表現する文化である ――

〒530-0047 大阪市北区西天満6丁目1番2号
TEL (06) 6362-9402㈹・FAX (06) 6365-9917

空気と水と熱で社会に奉仕する

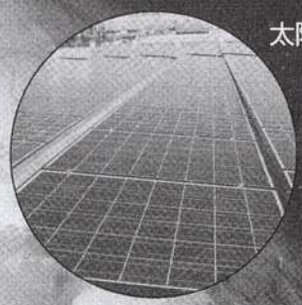
空気調和設備・給排水衛生設備　設計施工
環境衛生設備・プラント設備　設計施工
設備保守・メンテナンス工事

株式会社 清水工業所

代表取締役社長　清　水　義　一　郎

本社・本店	大阪市北区豊崎1－11－19	電話　06-6372-2851
東京支店	東京都中央区湊3－4－8－201	電話　03-3551-8041
福岡支店	福岡市博多区山2－9－3	電話　092-483-2851
宇都宮支店	栃木県宇都宮市御幸本町4736－12	電話　028-662-0333
群馬支店	群馬県邑楽郡大泉町吉田2066	電話　0276-46-5723
山陰支店	鳥取県鳥取市桜谷17－1	電話　0857-23-5051
営業所	札幌・太田・埼玉・千葉・横浜・京都・奈良・神戸・守口・高槻・大東	

きれいな地球を後世に!
クリーンエネルギーの
ベストミックス


太陽光発電

住友電設がご提案します

新エネルギー・省エネルギー技術のハイブリッド・・・

太陽光発電、風力発電、レドックスフロー電池、
省エネ提案などの新エネルギー事業をはじめ、
環境機器（研削液凝集濾過装置）開発・製造など
環境事業にも積極的に取り組んでいます。


風力発電

SEM 住友電設 大阪本社 TEL.06-6537-3400 東京本社 TEL.03-3454-7311
http://www.sem.co.jp/



バリアフリーな街づくり。モノづくり。

バリアフリー対応完全埋没、フラットタイプ エキスポール。



バリアフリー対応製品はポールを地中に埋め込め、地面とフラットな状態で収納可能にすることにより、高齢者や身体障害者の方達の、障壁(バリア)となる段差をなくすことができます。

本社
大阪市西区南堀江2-13-22〒550-0015
大阪支店
大阪市西区南堀江2-13-22 〒550-0015
Tel .06(6532)3731 Fax.06(6533)2293
東京支店
東京都江東区白河2-9-5 〒135-0021
Tel .03(3630)2811 Fax.03(3630)2816
名古屋営業所
名古屋市中川区舟戸町3-20〒454-0805
Tel .052(363)5221 Fax.052(363)5255
アトリエユニオン/東京
東京都港区虎ノ門2-3-22 〒105-0001
Tel .03(3506)1717 Fax.03(3506)1718
アトリエユニオン/大阪
大阪市西区南堀江2-13-22〒550-0015
Tel .06(6532)8920 Fax.06(6533)0224
アトリエユニオン/名古屋
名古屋市中川区舟戸町3-20〒454-0805
Tel .052(363)5221 Fax.052(363)5255

ITEMS
建築用ドアハンドル
レバーハンドル
ドアストップ・エッセ
クロセット
ケアシステム・ハンドバー
フロアシステム
消火器収納ケース
サインシステム・ピクト
キャスタル+メタルアート
都市景観ヒューランドスケープ

UNION
環境を考え製品を創る
株式会社ユニオン
iso 9001 iso 14001
www.artunion.co.jp

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

より快適な水環境をめざして
給排水衛生設備，冷暖房設備，消火設備の設計，施工

株式会社 西原衛生工業所 大阪本店

大阪本店　〒531-0071　大阪市北区中津六丁目8番4号
TEL 06-6458-3628（代表）
本　　社　〒108-0023　東京都港区芝浦三丁目6番18号
TEL 03-3452-7441（代）
支　　店　札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋・九州

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

CHOYO
人がいる多彩なフィールドで、
新しい限界に挑戦しています。

電気設備設計施工
朝陽電気株式会社
代表取締役　山本貴士

本　　社　〒530-0005 大阪市北区中之島三丁目2-4(朝日ビル)
TEL 06(6385)1361(代)　FAX 06(6385)1050

空気調和設備
給排水設備
電気設備
産業設備
水処理施設
環境施設

三機工業株式会社
取締役社長　宅　清光
常務取締役関西支店長　本木　満

関西支店　大阪市淀川区宮原3-4-30 ニッセイ新大阪ビル　電話 06(6350)8100
本　　社　東京都千代田区有楽町1－4－1　電話 03(3502)6103
支　　店　北海道・東北・関東・千葉・横浜・北陸・名古屋・京都・神戸・四国・中国・九州

電気設備工事設計施工
東光電気工事株式会社
関　西　支　社
常務取締役支社長　髙橋幸久

大阪市中央区高麗橋4丁目3番7号　電話大阪(6202)0325～9番
本　　社　東京都千代田区西神田1丁目4番5号
支　　社　北海道・東北・丸ノ内・新宿・神奈川・東関東・北関東・中部・九州

空気調和・衛生設備・設計施工

株式会社 三晃空調

本　　社　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話06-6363-1671
東京本店　東京都新宿区西新宿　新宿住友ビル　電話03-3344-7911
大阪本店　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話06-6363-1371
支　　店　仙台・横浜・名古屋・京都・神戸・広島・福岡

電気設備設計施工

株式会社 三興社
代表取締役社長　上田正雄

本　社　大阪市北区堂島浜1－4－19（日土地堂島ビル）
電　話　06（6442）3671（代）
支　店　東京都中央区日本橋茅場町2丁目17番3号
電　話　03（3666）1478（代）
営業所　堺・泉州・泉南・滋賀

空調衛生・冷凍冷蔵・地盤凍結
よりよき環境へ技術で挑む

株式会社精研

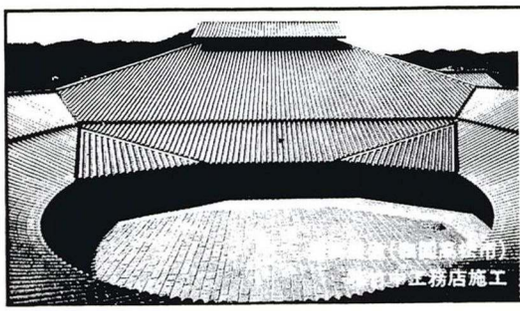
本　　社　大阪市中央区瓦屋町2丁目11番16号(オートセンタービル1・2階)
〒542-0066 電話 大阪（06）6768－5031代表
メンテナンス　電話　大阪（06）6768－1651代表
東京支社　東京都文京区小石川1丁目12番14号(日本生命小石川ビル7階)
〒112-0002　電話（03）5689－2351代表

OKUJU
スペース クリエイター
建築に革命をもたらした技術がある
「大規模天井無足場工法」
内外装創作パネル・システム天井・間仕切
株式会社 オクジュー
本社
大阪市北区西天満5丁目3番7号 〒530-0047
TEL(06)6312-4131 FAX(06)6312-7998
東京・九州・横浜・南九州・名古屋・上海

学校建築のトータルアドバイザー
二葉工業株式会社
黒板・掲示板・家具
電動黒板装置・サイン・スクリーン
〒547-0001 大阪市平野区加美北3―4―5
TEL06(6792)5858 FAX06(6792)2810

＊奉仕感謝の店
タイル及び規格石一式施工
株式会社 川岸窯業商店
本社 大阪市西区西本町1の13の33
TEL.06―6532―0641(代表)
FAX.06―6535―5181
天理営業所 天理市丹波市新町49

●情報処理●企画・制作●編集●画像処理●印刷・製本
人と技術をクリエイティヴで結びます
日本データネット株式会社
本社 〒530-0043 大阪市北区天満1-1-10 TEL.06-6352-7502 FAX.06-6355-2714
制作部 〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19 TEL.06-6352-0943 FAX.06-6355-5533
印刷工場 〒530-0043 大阪市北区天満2-5-15 TEL./FAX.06-6352-1551


あらゆる屋根工事の相談は、
ナニワ瓦株式会社
〒556-0024 大阪市浪速区塩草一丁目二番三号
☎ 六五六一～七四五四
ファックス 六五六一～七四一六

Digital Pri-Press
AOBA PRINTING CO.,LTD.
代表取締役社長 依藤孝行
青葉印刷株式会社
〒534-0027 大阪市都島区中野町2丁目10番11号
Phone.06-6351-5428 Fax.06-6351-5299

デンカCSAファミリー製品
●デンカCSA（膨張性混和材） コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材） 鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント） コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材） 地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材） コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に
電気化学工業株式会社
近畿地区販売店
浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・網野（07727）2－2220
舞鶴（0773）76－0133
金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332－6861
TEL 東京（03）3272－8501
小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443－6181
光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）6252－6000
東郷化成株式会社
TEL 滋賀・守山（0775）83－2381
TEL 大阪（06）6877－1581



グランデ タイルパネルのバリエーションが増えました。

50三丁・50四丁・75角・100角からもお選びいただけます。

グランデ製品体系

- グランデ
  - 工場仕上げパネル
    - ●タイルパネル　工場で高品質タイルを密着張りしたパネル。
    - ●塗装パネル
      - ●プレガード　工場でゆず肌調塗装を施したソフトな仕上り感のあるパネル。
      - ●ミラーコート　工場でフッ素樹脂塗装を施した光沢のある格調高いパネル。
      - ●マットコート　工場でフッ素樹脂のつや消し塗装を施したパネル。
      - ●メタリックコート　工場でメタリック調のフッ素樹脂塗装を施したパネル。
  - 現場仕上げパネル（ベースパネル）

旭化成建材
東　京／03-5473-5318　札　幌／011-261-5443　仙　台／022-223-5155　名古屋／052-212-2233　金　沢／076-265-4510
大　阪／06-6347-3847　高　松／087-822-0305　広　島／082-247-6131　福　岡／092-752-3974
当社の会社概要やグランデに関する情報は、インターネットを通じてもご覧いただけます。http://www.asahi-kasei.co.jp/akk/grande

雑誌　03379-9

Vol.84 No.05 2006年5月1日発行　毎月1回1日発行　昭和24年3月1日第3種郵便物認可　ISSN 0911-8780
社団法人　日本建築協会　〒530-0014 大阪市北区梅田1-1-3-2-100 電話大阪06(6348)0635 FAX06(6348)0634 http://www.aaj.or.jp
定価1,200円（●本体1,143円●消費税57円●送料共）正会員の購読料は会費に含めて徴収